

なが おき こ ふん ぐん
長 沖 古 墳 群 XII

— 第202号墳の調査 —

め いけ い せき
女 池 遺 跡 IV

— E地点の調査 —

にし とみ だ しん でん い せき
西 富 田 新 田 遺 跡 II

— C地点の調査 —

2014

本庄市教育委員会

序

埼玉県北部にある本庄市は、多様な企業や豊富な農産物、伝統ある祭りなど豊かな総合力をもった市であり、また、文政2年（1819）に国内有数の叢書である「群書類従」を完成させた総検校塙保己一をはじめとする多くの人材も輩出してきました。更に、都心から群馬・長野・新潟方面への要衝となる立地を生かし、多くの主要幹線道路・鉄道へのアクセスポイントも豊富に抱えております。この度の国道17号本庄道路の着工によって本市の一層の発展も期待されます。

これらの特長を育んだ本庄の地には、過去からの遺産である文化財も数多く存在し、県内でもトップクラスと言える500箇所以上の遺跡が残されています。そのうち、本書にて報告する3遺跡はそれぞれに特色があります。まず、長沖古墳群は県内を代表する古墳群と言えます。女池遺跡は縄文時代から中世までの多種の遺構が検出されている複合遺跡であり、今回報告するE地点の成果からも各時代の遺構が高い密度で広範囲に広がっていることが改めて確認されました。

また、西富田新田遺跡C地点では、古墳時代中期の土器を大量に持つ竪穴住居が3軒発見されました。それまで丘陵上等に生活していた人々が、ちょうどこの時期になって広大な耕地を求め集落域を拡大し始めたと考えられています。今回発見されたのはこうした時期の集落であり、開墾の歴史の一ページを描く基礎資料となるものです。いずれの遺跡も、本庄市の文化財の豊富さを物語る典型的な遺跡と言えるでしょう。

ここに、これらの遺跡の発掘調査報告書が刊行できましたことは、関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご協力の賜と、深く感謝いたします。本書が、この地域の皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となれば幸いです。

平成26年3月

本庄市教育委員会
教育長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町児玉字賀家ノ上520番1（仮換地：児玉都市計画事業児玉南土地区画整理事業33街区3画地の一部）に所在する長沖古墳群（県遺跡No.54-300）賀家ノ上地区C地点、本庄市児玉町吉田林字藤池54番地5に所在する女池遺跡（県遺跡No.54-305）E地点及び、本庄市西富田字新田798-1に所在する西富田新田遺跡（県遺跡No.53-094）C地点の発掘調査報告書である。
2. 長沖古墳群に関する発掘調査報告書は、これまでに児玉町教育委員会、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、本庄市教育委員会、本庄市遺跡調査会により計11冊が刊行されている。本書は長沖古墳群の12冊目の報告書となることから『長沖古墳群Ⅻ』とした。また調査地区名および古墳番号については、『長沖古墳群』（菅谷他 1980）刊行後、新たに発見・調査された古墳址について小字ごとに整理されており、地区名・古墳番号を付している。本報告所収の発掘調査は、長沖古墳群賀家ノ上地区における3地点目の調査・5基目の古墳址となるため賀家ノ上地区C地点・賀家ノ上地区第5号古墳址となる。しかしながら古墳番号については、上述の『長沖古墳群』において、全古墳の通し番号が付けられており、それ以後に試掘調査・発掘調査・現地踏査等で発見された場合にも、発見順に通し番号を付している。現在この番号名称が一般的に通用しており、古墳総数把握の利便性と混乱回避からも、本報告でもこれにならい古墳名称を「長沖古墳群第202号墳」とする。

女池遺跡に関する発掘調査報告書は、これまでに児玉町教育委員会、児玉町遺跡調査会、本庄市遺跡調査会により計3冊が刊行されている。本書は女池遺跡の4冊目の報告書となることから『女池遺跡Ⅳ』とした。また女池遺跡における調査地点としては5地点目となることから、本書所収の調査地点を女池遺跡E地点と呼称する。

西富田新田遺跡に関する発掘調査報告書は本庄市教育委員会により1冊が刊行され、本書は西富田新田遺跡の2冊目の報告書となることから、『西富田新田遺跡Ⅱ』とした。また西富田新田遺跡における調査地点としては3地点目となることから、本書所収の調査地点を西富田新田遺跡C地点と呼称する。
3. 発掘調査は、3地点ともに個人住宅建設に伴い事前の記録保存を目的として、本庄市教育委員会が実施したものである。
4. 発掘調査および整理・報告書刊行に要した経費は、国庫補助金・県費補助金・市費である。
5. 発掘調査の期間は、以下のとおりである。

長沖古墳群第202号墳

自 平成23年7月21日（木）
至 平成23年7月29日（金）

女池遺跡E地点

自 平成23年10月11日（火）
至 平成23年11月10日（木）

西富田新田遺跡C地点

自 平成23年11月28日（月）

至 平成23年12月26日（月）

6. 発掘調査は本庄市教育委員会文化財保護課が行い、担当は長沖古墳群第202号墳および女池遺跡E地点を太田博之・大熊季広が、西富田新田遺跡C地点を太田・的野善行があたった。
7. 報告書刊行のための整理作業及び報告書作成作業は、太田・恋河内昭彦・松本完の協力を得て、大熊・的野が行った。
8. 女池遺跡E地点における基準点等の測量および製図は、株式会社協同測地開発に委託した。
9. 本書所収の3遺跡に関する遺構図のデジタルトレースは、株式会社測研埼玉支店ほんじょう事務所に委託した。
10. 本書所収の3遺跡に関する遺物実測図作成・観察表作成及び写真撮影等の遺物整理作業の一部は、有限会社毛野考古学研究所に委託した。
11. 本書所収の3遺跡に関する遺構・遺物図版等作成の一部は、有限会社毛野考古学研究所に委託した。
12. 本書の編集・執筆は、大熊の協力を得て的野が行った。
13. 発掘調査及び本書作成にあたって、下記の方々や諸調査機関よりご助言ご協力を賜った。記して感謝いたします。

岡 稔 池田 匡彦 金子 彰 坂本 和俊 新海 基史 外尾 常人 田村 誠 中沢 良一 中平 薫
長瀧 歳康 東野 豊秋 丸山 修 矢内 勲

14. 本書に関する資料は、本庄市教育委員会が管理・保管する。
15. 本報告の発掘調査、整理調査および報告書編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

発掘調査組織（平成23年度）

主体者	本庄市教育委員会	教	育	長	茂木 孝彦
事務局		事	務	局	長 関和 成昭
	文化財保護課	課		長	金井 孝夫
		副	参	事	兼 課 長 補 佐 鈴木 徳雄
		主		幹	恋河内昭彦
		主		査	松澤 浩一
		主		任	松本 完
調査担当者		課	長	補	佐 兼 埋 蔵 文 化 財 係 長 太田 博之
調査担当者		主		査	大熊 季広
調査担当者		臨	時	職	員 的野 善行

整理調査組織（平成24年度）

主体者	本庄市教育委員会	教	育	長	茂木 孝彦
-----	----------	---	---	---	-------

事務局	事務局 長	関和 成昭
文化財保護課	課 長	金井 孝夫
	副参事兼課長補佐	
	兼歴史民俗資料館長	鈴木 徳雄
	主 幹	恋河内昭彦
	主 査	松澤 浩一
	主 任	松本 完
整理担当者	課長補佐兼埋蔵文化財係長	太田 博之
整理担当者	主 査	大熊 季広
整理担当者	臨時職員	の野 善行

整理調査・報告書刊行組織（平成25年度）

主体者 本庄市教育委員会	教 育 長	茂木 孝彦
事務局	事務局 長	関和 成昭
文化財保護課	課 長	川上 美恵
	副参事兼課長補佐	
	兼歴史民俗資料館長	鈴木 徳雄
	主 幹	恋河内昭彦
	主 査	松澤 浩一
	主 任	松本 完
整理担当者	課長補佐兼埋蔵文化財係長	太田 博之
整理担当者	主 査	大熊 季広
整理担当者	臨時職員	の野 善行

凡 例

1. 本書所収の遺跡全測図・各遺構図等における方位針は、座標北を示す。平面図中のXY座標値は、平面直角座標第IX系の座標を示し、単位はmである。
2. 本書所収の地図のうち、第2図は国土交通省国土地理院発行1/25,000「本庄」(平成10年発行)、同「伊勢崎」(平成15年発行)および同「藤岡」(平成10年発行)をもとに、また、第3図(長沖古墳群)は「児玉町都市計画事業 児玉南土地区画整理事業公図重ね図」1/1,000(昭和62年測量)を、第11図(女池遺跡)は「児玉町都市計画図No.10」1/2,500(平成12年修正)を、第32図(西富田新田遺跡)は「本庄市都市計画図10・11・16・17」1/2,500(平成10年測量)をもとに加筆・作成した。
3. 本報告書の本文・図中における各種遺構の略号は、下記のとおりである。
SI…竪穴住居跡、SD…溝跡、SK…土坑、SE…井戸跡、Pit…ピット、P…遺構に伴うピット
4. 観察表中における先頭列の番号欄は、「出土遺物図」の番号ならびに遺物出土状況図中の番号、遺物写真図版中の番号に、それぞれ対応している。
5. 土器観察表における、各項目の内容は以下のとおりである。A-法量(単位はcmまたはgとする。カッコ内は推定値を示す)、B-成形、C-整形・調整、D-胎土・材質、E-色調、F-残存度(完形を1とする)、G-備考、H-出土位置(現場取り上げ番号等)
6. 本文中および土層説明中において、浅間A軽石(As-A)、浅間B軽石(As-B)は浅間山系火山の噴出物を表し、それぞれ天明3年(1783年)と天仁元年(1108年)に噴火した際に下降した軽石である。

目 次

序

例 言

凡 例

第 I 章	発掘調査に至る経緯	
	第 1 節 長沖古墳群第202号墳	1
	第 2 節 女池遺跡E地点	2
	第 3 節 西富田新田遺跡C地点	3
第 II 章	遺跡の地理的・歴史的環境	
	第 1 節 地理的環境	5
	第 2 節 歴史的環境	6
第 III 章	長沖古墳群第202号墳の調査	
	第 1 節 遺跡の概要	11
	第 2 節 検出された遺構と遺物	11
	1. 古墳墳丘	11
	2. 古墳周溝	11
	3. 出土遺物	19
第 IV 章	女池遺跡E地点の調査	
	第 1 節 遺跡の概要	23
	第 2 節 検出された遺構と遺物	23
	1. 竪穴住居跡	23
	2. 溝 跡	32
	3. 土 坑	35
	4. 井 戸 跡	38
	5. その他の遺構・遺物	40
第 V 章	西富田新田遺跡C地点の調査	
	第 1 節 遺跡の概要	42
	第 2 節 検出された遺構と遺物	42

1. 竪穴住居跡	42
2. 溝 跡	55
3. 土 坑	55
4. その他の遺物	56

第VI章 まとめにかえて	57
--------------------	----

引用・参考文献	57
---------------	----

写真図版

報告書抄録

第 I 章 発掘調査に至る経緯

第 1 節 長沖古墳群第202号墳

平成23年6月20日、松田圭司氏より個人専用住宅建設を予定している本庄市児玉町児玉字賀家ノ上520番1（仮換地：児玉都市計画事業 児玉南土地地区画整理事業33街区3画地の一部）にかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか確認を行ったところ、照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地 長沖古墳群（県遺跡No.54-300）が存在することが判明した。

長沖古墳群は明治期の半ばからその存在が注目されており、多くの学者も訪れている古墳群である。大正元年に刊行された『埼玉縣誌上巻』（埼玉県 1921）には、本庄市児玉町秋山所在の秋山古墳群とともに「児玉郡金屋村梅原の百塚」として、埼玉県内の著名な古墳（群）の一つとして記載されている。また昭和44年10月1日には、地域的に特色がありかつ群として価値が高いものであることから『長沖・高柳古墳群』として埼玉県重要遺跡に選定されているものである。開発に伴う試掘調査・発掘調査についても、古墳群内の一部が土地地区画整理事業地に選定されたこともあり、個人住宅・店舗・道路等の建設に先立ち多くの調査が実施され、現存するもの・しないものを含め200基以上の古墳が確認されている。当該開発予定地の周辺では、北東方向のごく近傍に2基の古墳が連続して存在しており、当該地においても古墳が存在する可能性が十分考えられた。

市教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について遺跡保存のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、平成23年7月7日に現地調査を実施した。試掘調査の結果、敷地南側に古墳の周溝と思われる溝跡1条と、埴輪片が検出された。この結果と事業計画図とを照らし合わせると、厚さ30cmの遺跡保護層を確保することが出来ない設計であった。

試掘調査の成果と共に、事業主体者に対して『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の回答文書を交付し、1.協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である長沖古墳群が存在するため現状保存が望ましいこと、2.やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第93条第1項の規定により『埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、3.『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4.本回答後は、関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後保存に向けた協議が行われたが、周辺道路との高低差の問題から設計の変更は困難であるとの結論に達し、現状保存されない建物部分のうち、埋蔵文化財が存在する南側について発掘調査を実施することとなった。

書類上の手続きについては、平成23年6月20日付けで松田圭司氏より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会では同届出を7月8日付け本教文発第116号にて埼玉県教育委員会あてに進達し、また7月20日付け本教文発第191号で本庄市教育委員会教育長より『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会に提出された。9月2日付け教生文第4-621号で埼玉県教育委員会より『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があり、事前の発掘調査が必要であるとされた。

現地における発掘調査は平成23年7月21日～7月29日の日程で行われた。

第2節 女池遺跡E地点

平成23年9月2日、倉本恵介氏より個人専用住宅建設を予定している本庄市児玉町吉田林字藤池54番5にかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか確認を行ったところ、照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地 児玉条里遺跡（県遺跡No. 54-121）が所在することが判明した。

児玉条里遺跡は約100万㎡の範囲にわたっており、その広大な面積の中に東西南北に沿って碁盤目状の水田地形が広がっている。過去に多数の試掘調査・発掘調査が行われており、古代の水田耕作の痕跡等が多く検出されている。一方で、この遺跡範囲内が全て水田耕作適地ではなく、畑作地や集落範囲も含まれており、発掘調査でも実際に竪穴住居跡等も検出されている。当該開発予定地周辺についていえば、児玉条里遺跡内に集落遺跡である女池遺跡（県遺跡No. 54-305）が所在しており、女池遺跡では発掘調査・試掘調査等で、縄文時代から平安時代を中心とした竪穴住居跡や、炭焼きの跡と考えられる土坑等が検出されている。当該開発予定地は女池遺跡に近接しており、周辺地形などから当該地においても水田関連遺構のみならず集落関連遺構が検出される可能性が高いと考えられた。

市教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について遺跡保存のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、平成23年9月14日に現地調査を実施した。試掘調査の結果、敷地の北側に竪穴住居跡等の埋蔵文化財が検出されたが、事業計画図と照らし合わせることにより、厚さ30cm以上の遺跡保護層が確保できる設計であった。試掘調査後、建物基礎の設計変更が決定され、建物基礎部分に長さ2m以上の地盤補強杭工事が実施されることとなった。変更後の設計では、仮に建物部分の直下に埋蔵文化財が所在した場合、それらが直接破壊されることとなる。建物部分直下の埋蔵文化財の状況を確認するために9月26日に再度現地調査を実施したところ、古墳時代～奈良時代の竪穴住居跡等の埋蔵文化財が複数検出された。

これらの試掘調査の成果と共に、事業主体者に対して『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の回答文書を交付し、1.協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である児玉条里遺跡が所在するため現状保存が望ましいこと、2.やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第93条第1項の規定により『埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、3.『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4.本回答後は、関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後保存に向けた協議が行われたが、他に事業適地がなく、当該地における工法変更も困難であるとの結論に達し、工事により埋蔵文化財が破壊される建物部分について発掘調査を実施することとなった。

書類上の手続きについては、平成23年9月2日付けで倉本恵介氏より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会では同届出を9月29日付け本教文発第233号にて埼玉県教育委員会あてに進達し、また10月7日付け本教文発第235号で本庄市教育委員会教育長より『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会に提出された。10月13日付け教生文第4-805号で埼玉県教育委員会より

『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があり、事前の発掘調査が必要であるとされた。

現地における発掘調査は平成23年10月11日～11月10日の日程で行われた。

なお当該発掘調査対象地は、上述のように奈良・平安時代の水田（条里）遺跡である児玉条里遺跡の範囲として周知されていたが、今回の試掘調査の結果から、水田（条里）遺跡ではなく集落遺跡であることが判明し、隣接する集落遺跡である女池遺跡の範囲が当該地まで延びていると考えることが適当である。そのため、文化財保護法第95条および埼玉県埋蔵文化財事務処理要綱第2条、第3条の手続きに従って、女池遺跡の範囲を拡大（変更増補）することとし、平成23年9月20日付け本教文発第228号『埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カード（変更増補）』を埼玉県教育委員会教育長あて提出した。これに対しては、埼玉県教育委員会教育長より平成23年9月29日付け教生文第9-69号による『埋蔵文化財包蔵地の周知について』の通知があった。その後、平成25年度の発掘調査において、女池遺跡の範囲が更に広がるということが判明し、第11図に示した遺跡の範囲は報告書執筆時点での範囲である。

第3節 西富田新田遺跡C地点

平成23年9月29日、大竹慶二郎氏より個人専用住宅建設を予定している本庄市西富田字新田798-1にかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか確認を行ったところ、照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地 西富田新田遺跡（県遺跡No. 53-094）が所在することが判明した。西富田新田遺跡は、西富田新田・夏目古代集落などと呼称される推定古代集落の一部に含まれており、古墳時代中期～平安時代の大規模な遺跡群の一部であると考えられている。遺跡範囲周辺の試掘調査・発掘調査の結果からもこういった推定が裏付けられており、当該開発予定地においても、古墳時代から古代にかけての竪穴住居跡等が所在する可能性が十分考えられた。過去にも実際に西富田新田遺跡の範囲内で開発に伴い2度の発掘調査が実施されている。

市教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について遺跡保存のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、平成23年10月20日に現地調査を実施した。試掘調査の結果、多量の土器片と共に、古墳時代の竪穴住居跡が検出された。事業計画では建物基礎部分に柱状改良工事を施工する計画となっており、検出された埋蔵文化財は現状保存することが出来ない設計であった。

試掘調査の成果と共に、事業主体者に対して『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の回答文書を交付し、1.協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である西富田新田遺跡が所在するため現状保存が望ましいこと、2.やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第93条第1項の規定により『埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、3.『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4.本回答後は、関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後保存に向けた協議が行われたが、他に事業適地がなく、当該地における工法変更も困難であるとの結論に達し、検出された埋蔵文化財が破壊されると考えられる建物予定部分および浄化槽予定部分について発掘調査を実施することとなった。

書類上の手続きについては、平成23年9月29日付けで大竹慶二郎氏より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会では同届出を11月11日付け本教文発第261号にて埼玉県教育委員会あてに進達し、また11月21日付け本教文発第300号で本庄市教育委員会教育長より『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会に提出された。12月19日付け教生文第4-1091号で埼玉県教育委員会より『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があり、事前の発掘調査が必要であるとされた。

現地における発掘調査は平成23年11月28日～12月26日の日程で行われた。

(本庄市教育委員会事務局)



西富田新田遺跡C地点 遺構確認状況

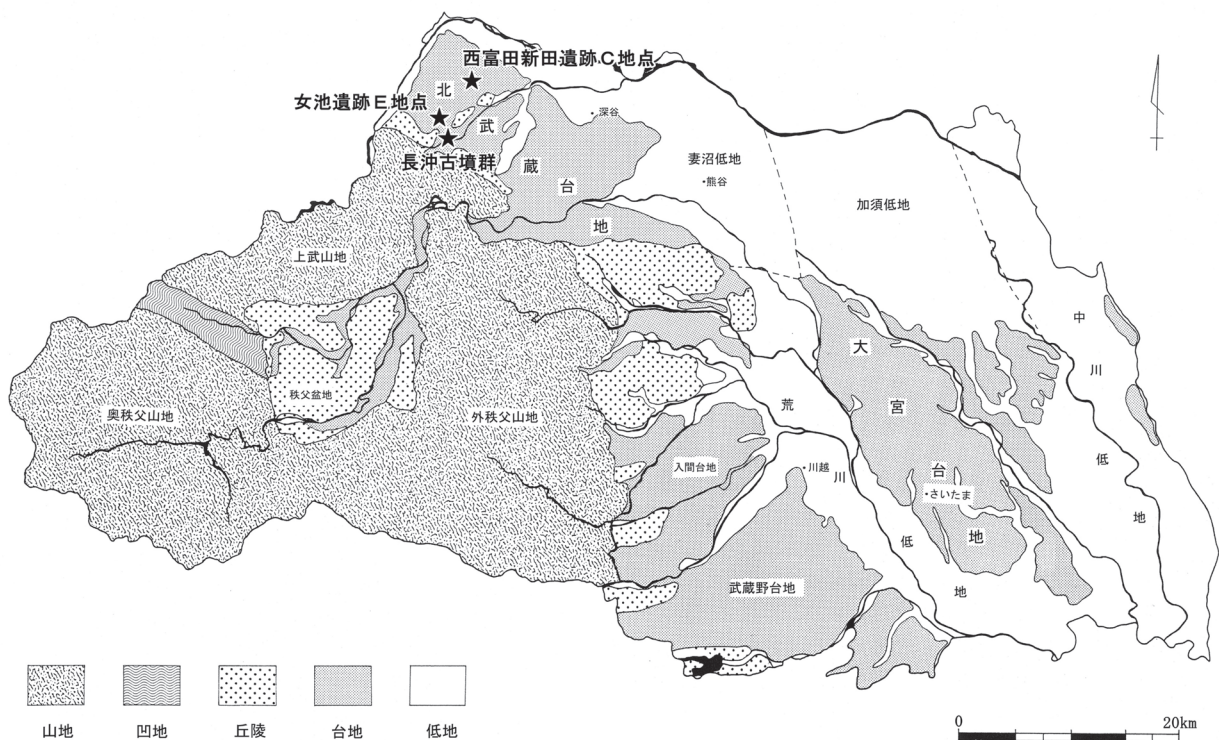
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本書で報告する長沖古墳群、女池遺跡、西富田新田遺跡の所在する本庄市は、埼玉県北西部に位置し、東側は深谷市および児玉郡美里町と、西側は児玉郡神川町、南側は秩父郡皆野町および長瀨町、北西側は児玉郡上里町、北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市と接している。平成18年、本庄市と児玉町の合併により、市域は北東端の利根川から南西端の上武山地に至るにおよび、その長さはおおよそ20km、面積は89.45km²となった。

本庄市の地形は、南西部の山地および丘陵、中央部に相当する児玉市街地から本庄市街地にかけての台地、北東部の利根川右岸に展開する低地に大別される。山地部分は上武山地と呼称され、群馬県南西部の赤久縄山を中心とする地域と、埼玉県北西部の標高1,037mの城峯山を主峰とする山系の総称であり、南東から北西方向へと展開している。丘陵部は、上武山地の裾部から北東方向へと半島状に延び、児玉丘陵と呼称されている。またこの児玉丘陵からは、第三系の独立丘である生野山丘陵・大久保山丘陵が断続的に延長している。

台地部は北武蔵台地の一部をなすもので、本庄台地と呼称されており、身馴川扇状地と神流川扇状地の複合地形である。台地上には南西から北東方向へ中小の河川が流下し、河川周辺部は沖積化が進行している。台地北端部は児玉郡上里町金久保付近から本庄市鶴森にかけて段丘崖を形成し、この段丘崖を隔てて、利根川右岸の低地と接している。低地部は、利根川や烏川による氾濫原であり、自然堤防の発達が顕著で、下流域の妻沼低地、加須低地へと連続している。



第1図 埼玉県の地形

本書所収の長沖古墳群の群域の北端は、J R 八高線児玉駅より南西方向約800m、関越自動車道本庄・児玉インターチェンジより南西方向約4.6kmに位置し、小山川左岸の未固結堆積物に被覆された河岸段丘低位面に占地している。群域は南西から北東方向に長軸を有し1.7km、南東から北西の幅は550mに及んでいる。一方、女池遺跡は、J R 八高線児玉駅より北方向約100m、児玉町中心市街地の中ではやや北寄りに位置する。地形としては概ね平坦で、緩やかに北向きに下がる本庄台地上である。女池の名にあるように、小規模な新旧のため池が周辺に見られ、北側に広がる水田地帯を潤している。

西富田新田遺跡は、J R 高崎線本庄駅より南西方向約2.1km、J R 上越新幹線本庄早稲田駅の北西方向約1.9kmに位置している。本庄台地上の上里町と本庄市の境界に近い部分に位置し、本庄市街地の南西端付近である。

第2節 歴史的環境

ここでは報告する3遺跡が属する主な時代である縄文時代～平安時代の、本庄台地上における主要な遺跡について簡単に触れる。

縄文時代の遺跡は総体とすれば、上部山地から丘陵上に多い傾向にある。特に前期までは、遺跡が本庄台地上では確認される例はまれであり、数遺跡で土器片などがわずかにみられる程度である。ところが中期になると丘陵上にも遺跡を残しながら、本庄台地上へも進出する様子がみられる。大規模な環状集落である古井戸遺跡(88)、将監塚遺跡(87)、新宮遺跡(94)をはじめとして、女堀川中・下流域では、西富田前田遺跡(20)、七色塚遺跡(14)等で中期の住居跡が確認され、他にも笠ヶ谷戸遺跡(35)、村後遺跡(46)、飯玉東遺跡(26)、雷電下遺跡(25)などで土坑や遺物が散見される。後・晩期に入ると、遺跡数自体は減少するが、女池遺跡(2)、児玉清水遺跡(61)、藤塚遺跡(44)等の様に小規模ながら一定程度の遺構・遺物は確認される。

弥生時代遺跡の本庄市における特徴は、集落形成が比較的低調であり、特に大規模な集落遺跡が形成されないということがあげられよう。弥生時代中期の遺跡としては、丘陵部において土坑群が検出された浅見山I遺跡(5)、また低位段丘や台地部においてやはり土坑が確認されている今井条里遺跡(b)や児玉清水遺跡(61)及び夏目西遺跡(75)があげられよう。また、根田遺跡(23)、四方田遺跡(24)、雷電下遺跡(25)、笠ヶ谷戸遺跡(35)、小島本伝遺跡においては、遺構は検出されていないものの、当該期の遺物が確認されている。弥生時代後期においては、丘陵上や丘陵裾部の低位段丘及び微高地に、小規模かつ短期的な集落が形成されるようになる。このような遺跡には、浅見山I遺跡(5)、大久保山遺跡(6)、山根遺跡(22)、飯玉東遺跡(26)、生野山遺跡(D)、美里町塚本山遺跡(B)があげられよう。これらの遺跡のうち、大久保山遺跡・生野山遺跡からは吉ヶ谷式土器が、山根遺跡・飯玉東遺跡からは樽式土器が、また塚本山遺跡からは二軒屋式土器が出土しており、該期における活発な人的・物質的な移動あるいは交渉の様子が窺える。

古墳時代前期に入ると、集落遺跡の形成は前時代と比較し急激な増加を見せ、その占地も台地縁辺部や沖積化が進行した低地内の自然堤防や微高地上へと移動している。これらの集落遺跡からは、畿内系及び東海西部系土器が少量ながらも出土し、その立地と併せて前時代からの一定の乖離が窺える。これらの外来系土器の展開と集落遺跡における占地変化の背景には、生産基盤の整備・獲得および水

田経営の新技术を有する集団の存在と、地域社会の再編成が推定されている。

このような古墳時代前期の集落遺跡は、高度経済成長期以降の開発が早く、比較的発掘調査が多く行われている女堀川中流から下流にかけての範囲だけでも、久下前遺跡（9）、久下東遺跡（10）、北堀新田前遺跡（13）、七色塚遺跡（14）、下田遺跡（18）、四方田遺跡（24）、雷電下遺跡（25）、後張遺跡（27）、川越田遺跡（28）、東牧西分遺跡（29）、浅見境北遺跡（32）、地神遺跡（39）、塔頭遺跡（40）、前田甲遺跡（42）、柿島遺跡（43）、藤塚遺跡（44）、堀向遺跡（45）、社具路遺跡（76）、今井条里遺跡（b）等が連なるように展開している。このうち後張遺跡は、古墳時代前期から中期にかけての中核的集落として知られている。

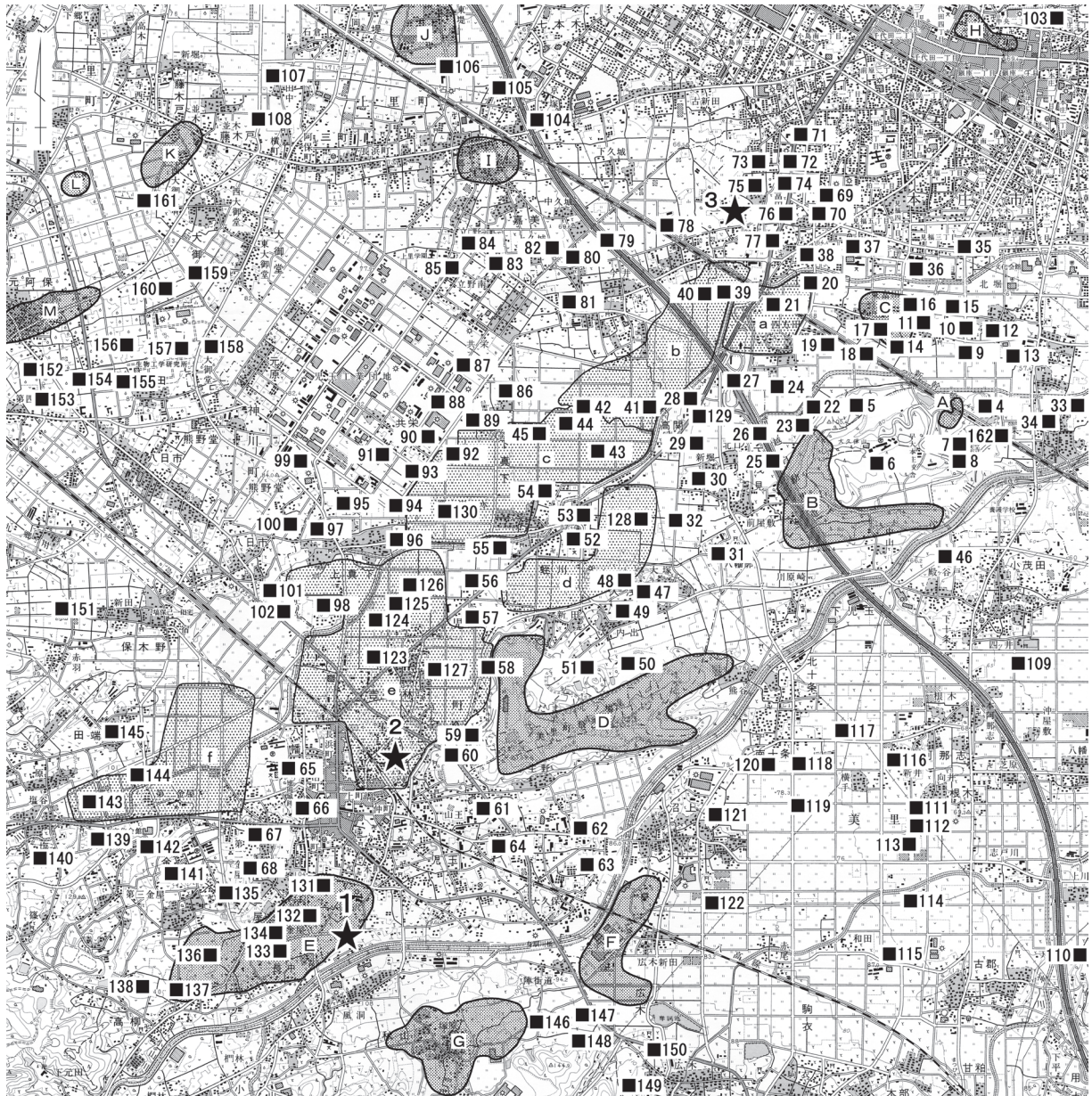
古墳時代中期の集落遺跡は、前期から継続・拡大するもののほかに、西富田新田遺跡（3）のような女堀川左岸の微高地や、台地内奥部および利根川右岸の低地を見下ろす本庄台地の段丘崖上に、新たに展開する集落が出現する。これらの集落遺跡には、九反田遺跡（21）、四方田遺跡（24）、笠ヶ谷戸遺跡（35）、雌濠遺跡（37）、弥藤次遺跡（73）、夏目遺跡（74）、夏目西遺跡（75）、本庄城址（103）等が知られ、一集落内における住居軒数も一段と増加している。また、これらの集落のなかには、夏目遺跡のように、鍛冶関連遺物や畿内系土器・朝鮮半島系土器を模倣した地元産土師器などが検出され、西日本方面との交渉または彼地からの移住を想定しうる例も見られる。前代までは、ほぼ未開拓の状態であったと思われる台地内奥部への集落の進出は、これを可能とする新技术の獲得と、人口の増大とを背景としたものであったろう。

本庄台地、女堀川下流域および大久保山丘陵周辺における古墳時代後期を中心とする集落には、山根遺跡（22）、東本庄遺跡（33）、村後遺跡（46）、薬師元屋舗遺跡（70）、社具路遺跡（76）、東谷遺跡（162）、小島本伝遺跡などが知られる。これらの遺跡の多くは、古墳時代終末期から一部は奈良・平安時代へと連続している。また、女堀川中流域では、低地内の自然堤防や微高地上に占地している。前代から継続的に集落が営まれる後張遺跡（27）、川越田遺跡（28）の他に、左口遺跡（54）、飯玉東遺跡（26）、共和小学校校庭遺跡（52）、辻堂遺跡（56）、南街道遺跡（57）、塚島遺跡（93）、辻ノ内遺跡（95）、また、後期から始まる大規模な集落として今井川越田遺跡（41）、金佐奈遺跡（98）が知られる。

上述したような集落遺跡の展開にあわせ、墳墓の築造も活発に行われている。周溝墓は、下野堂遺跡、浅見山Ⅰ遺跡（5）、北堀新田前遺跡（13）、飯玉東遺跡（26）、宥勝寺北裏遺跡（4）、村後遺跡（46）で検出されており、このうちの北堀新田前遺跡・村後遺跡においては前方後方形の周溝墓が確認されている。古墳は、埼玉県内最古級の前方後方墳である鷲山古墳（31）をはじめとして、全長70m以上の前方後円墳の前山1号墳（A）が前期に築かれ、続く中期に方墳の前山2号墳（A）、直径65mの中期大型円墳である公卿塚古墳（16）といった多様な墳形の古墳が丘陵上および微高地上に造営されている。本庄台地上には、八幡山古墳、三空山古墳などを含む旭・小島古墳群が、また南西方に目を転じると、児玉市街地の南側から児玉丘陵にかけて展開する長沖古墳群（E）といった県内有数の古墳群が知られている。なお、大久保山丘陵の北東斜面地には埴輪窯跡（4）が所在しており、当地域においても埴輪生産が行われていたことが確認されている。

奈良時代になると、女堀川下流域の集落は激減し、わずかに七色塚遺跡（14）、社具路遺跡（76）を見るにとどまる。女堀川中流域における沖積低地内の自然堤防および微高地上の集落数は、やは

り激減するものの熊野太神南遺跡（83）、八幡太神南遺跡（84）、立野南遺跡（85）、将監塚遺跡（87）、古井戸遺跡（88）、南共和遺跡（91）、真下境東遺跡（97）、真下境西遺跡（100）のように本庄台地南側の縁辺部に新たな集落が営まれるようになる。これらの遺跡の内、やや後出して設営される将監塚遺跡・古井戸遺跡は長期的に継続するものであるが、その他の集落は平安時代に至ること無く終焉を迎えるものである。女堀川中流域のこのような集落の移動と消長の背景には、律令体制成立段階における条里制の展開が要因となっているものと考えられ、一定の政治的強制力をもとに計画的に集落が設営されたものと捉えられている。律令的な施設に関して言えば、本庄市に東隣する深谷市の中宿遺



第2図 周辺の主要な遺跡

〈本庄市〉 1. 長沖古墳群第202号墳 2. 女池遺跡 3. 西富田新田遺跡 4. 宥勝寺裏埴輪窯跡・宥勝寺北裏 5. 浅見山I 6. 大久保山 7. 大久保山寺院跡 8. 東谷古墳 9. 久下前 10. 久下東 11. 北堀久下塚北 12. 北堀新田 13. 北堀新田前 14. 七色塚 15. 北堀久下東北 16. 公卿塚古墳 17. 元富 18. 下田 19. 観音塚 20. 西富田前田 21. 九反田 22. 山根 23. 根田 24. 四方田 25. 雷電下 26. 飯玉東 27. 後張 28. 川越田 29. 東牧西分 30. 関根氏館跡 31. 鷺山古墳・鷺山南 32. 浅見境北 33. 東本庄 34. 栗崎館跡 35. 笠ヶ谷戸 36. 伊丹堂前 37. 雌濠 38. 西富田本郷 39. 地神 40. 塔頭 41. 今井川越田 42. 前田甲 43. 柿島 44. 藤塚 45. 堀向 〈美里町〉 46. 村後 〈本庄市〉 47. 新屋敷 48. 城の内 49. 金鑽神社古墳 50. 向田 51. 壺丁田 52. 共和小学校校庭 53. 蛭川氏館跡 54. 左口 55. 蛭川坊田 56. 辻堂 57. 南街道 58. 吉田林割山 59. 阿知越 60. 御林下 61. 児玉清水 62. 下町古墳群 63. 大久保 64. 児玉大天白 65. 雉岡城 66. 八幡山 67. 金屋北原 68. 金屋西 69. 薬師 70. 薬師元屋舗 71. 二本松 72. 西富田 73. 弥藤次 74. 夏目 75. 夏目西 76. 社具路 77. 社具路南 78. 今井諏訪 79. 久城前 80. 久城往来北 81. 今井原屋敷 〈上里町〉 82. 往来北 83. 熊野太神南 84. 八幡太神南 85. 立野南 〈本庄市〉 86. 将監塚東 87. 将監塚 88. 古井戸 89. 内手 90. 古井戸南 91. 南共和 92. 平塚 93. 塚畠 94. 新宮 95. 辻ノ内 96. 上真下東 97. 真下境東 98. 金佐奈 〈神川町〉 99. 元屋敷 100. 真下境西 101. 八荒神南 102. 反り町 〈本庄市〉 103. 本庄城址 〈上里町〉 104. 本郷東 105. 愛宕 106. 愛宕耕地 107. 田中西 108. 田中前 〈美里町〉 109. 日の森 110. 諏訪山古墳 111. 向居 112. 勝丸稻荷神社古墳 113. 道灌山古墳 114. 志渡川遺跡・志渡川古墳 115. 南志渡川 116. 堂山古墳 117. 十条条里 118. 新倉館跡 119. 烏森 120. 樋之口 121. 水殿瓦窯跡 122. 宮下 〈本庄市〉 123. 高縄田 124. 樋越 125. 鶴蒔 126. 石橋 127. 宮田 128. 東田 129. 梅沢 130. 中下田 131. 金屋中之道 132. 金屋南 133. 長沖村後 134. 長沖久保 135. 倉林東 136. 長沖梅原 137. 高柳南 138. 宇留井山 139. 塩谷下大塚 140. 塩谷平氏ノ宮 141. 倉林後 142. 枇杷橋 143. ミカド 144. 田端南堂 145. 田端中原 146. 秋山大町 147. 秋山大町東 148. 秋山諏訪平 〈美里町〉 149. 広木上宿 150. 甕薙神社前 〈神川町〉 151. 保木野境 152. 光権寺館跡 153. 北原 154. 久保宿 155. 金屎 156. 中原 157. 皂樹原・檜下 〈上里町〉 158. 不二塚前 159. 大御堂女堀 160. 油免 161. 阿保氏大御堂 〈本庄市〉 162. 東谷

A. 前山古墳群 B. 塚本山古墳群 C. 東富田古墳群 D. 生野山古墳群 E. 長沖古墳群 F. 広木大町古墳群 G. 秋山古墳群 H. 北原古墳群 I. 本郷古墳群 J. 東堤古墳群 K. 大御堂古墳群 L. 青柳古墳群四軒在家支群 M. 青柳古墳群元阿保支群

a. 西富田・四方田条里 b. 今井条里 c. 児玉条里（児玉北部地区） d. 児玉（蛭川）条里 e. 児玉条里 f. 金屋条里

跡や熊野遺跡等が注目される。両遺跡は櫛引台地北側の利根川およびその右岸に広がる低地を見下ろす段丘崖上に立地しているものである。これらの一連の遺跡は、7世紀後半から新たに設営が始まるものであり、集落域のほかに官衙関連の遺構も確認されている。

平安時代の集落遺跡については、古墳時代後期の様に数十軒の竪穴住居が密集して存在する様子は見られない。一部の遺跡を除けば、竪穴住居跡が4, 5軒以下しか検出されないものが多い。女堀

川中～下流域では薬師元屋舗遺跡（70）、下田遺跡（18）、社具路遺跡（76）、東牧西分遺跡（29）が比較的大きな集落であり、他に北堀久下塚北遺跡（11）、久下前遺跡（9）、七色塚遺跡（14）、前田甲遺跡（42）、山根遺跡（22）、夏目遺跡（74）、元富遺跡（17）、東谷遺跡（162）、東本庄遺跡（33）、藤塚遺跡（44）、柿島遺跡（43）、今井川越田遺跡（41）、雷電下遺跡（25）等で当該期の集落が検出されている。また、古墳時代から水田として利用されてきた今井条里遺跡（b）も平安時代においても軸方位などを変えながらも存続し、1108年のAs-B火山灰の降下以後も復旧の痕跡が確認されている。



女池遺跡E地点 試掘調査風景

第三章 長沖古墳群第202号墳の調査

第1節 遺跡の概要

長沖古墳群は、本市市児玉町長沖・児玉町金屋・児玉町高柳に所在し、標高125mの児玉丘陵の北端付近から、標高102mの本庄台地上まで約70万㎡の範囲に広がる古墳群である。群域を北東方向から大きく切り込む様に、県道44号線（児玉秩父線）から金屋交差点への延長線にそって一つの谷が入り、古墳群を南西側の「高柳支群」と東側の「長沖支群」に分かつ。規模の大きな長沖支群は、更に小規模な支谷で分離された複数の小支群から成る。古墳群を構成する古墳は概ね5世紀中頃～7世紀にかけて築造されたもので、前方後円墳7基を含み、現在200基以上が確認されている。密集して現存するものや、古地図・伝承等により確認されたもの、試掘調査・発掘調査によって確認されたもの等がある。昭和49年度に長沖古墳群長沖支群の範囲内に「児玉南土地区画整理事業」が計画され、道路・店舗・個人住宅等の開発に伴って、多くの発掘調査が実施されている。特に、都市計画道路環状一号線付近では多数の発掘調査が実施され、高密度な古墳分布の様子が明らかになっている。

本章にて報告する長沖古墳群第202号墳は、長沖古墳群内の長沖支群に属しており、その中でもほぼ最東端に近い所に位置する古墳である。周辺では、第3図に示す様に、長沖古墳群第1号墳、第2号墳が扇状地形の傾斜に沿って北東方向に向かって並んでおり、第202号墳もこれらと同一の小支群に属するものと思われる。第202号墳は今回の調査以前の段階で地上に盛土等は残っておらず、個人住宅建設に先立って行われた試掘調査によって初めてその存在が明らかになった古墳である。住宅の建設画面上、試掘調査により明らかになった本古墳の現状保存が困難であったため、建物予定部分の一部に対して発掘調査を実施したものである。

検出された遺構は古墳の周溝1条であり、それ以外の施設は一切検出されなかった。周溝内からは埴輪片が出土した。墳形は、古墳の規模や周辺の古墳との関係等から円墳である可能性が高いと思われる。今回の調査対象範囲から周溝規模を推定すると、周溝の内径は直径9m程度、周溝の外径は直径14～15m程度である。古墳は古墳時代後期に築造されたものと推定される。

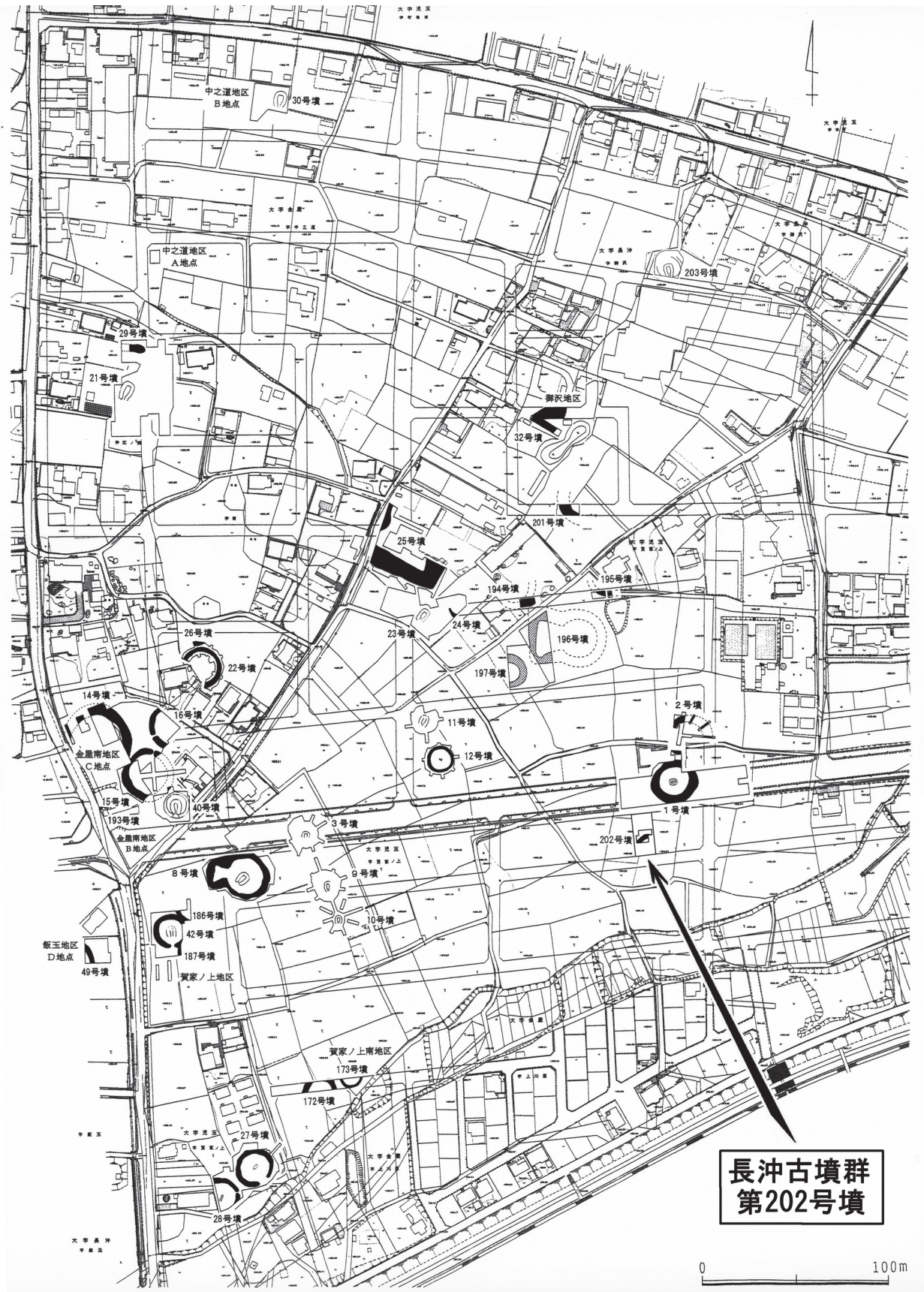
第2節 検出された遺構と遺物

1. 古墳墳丘

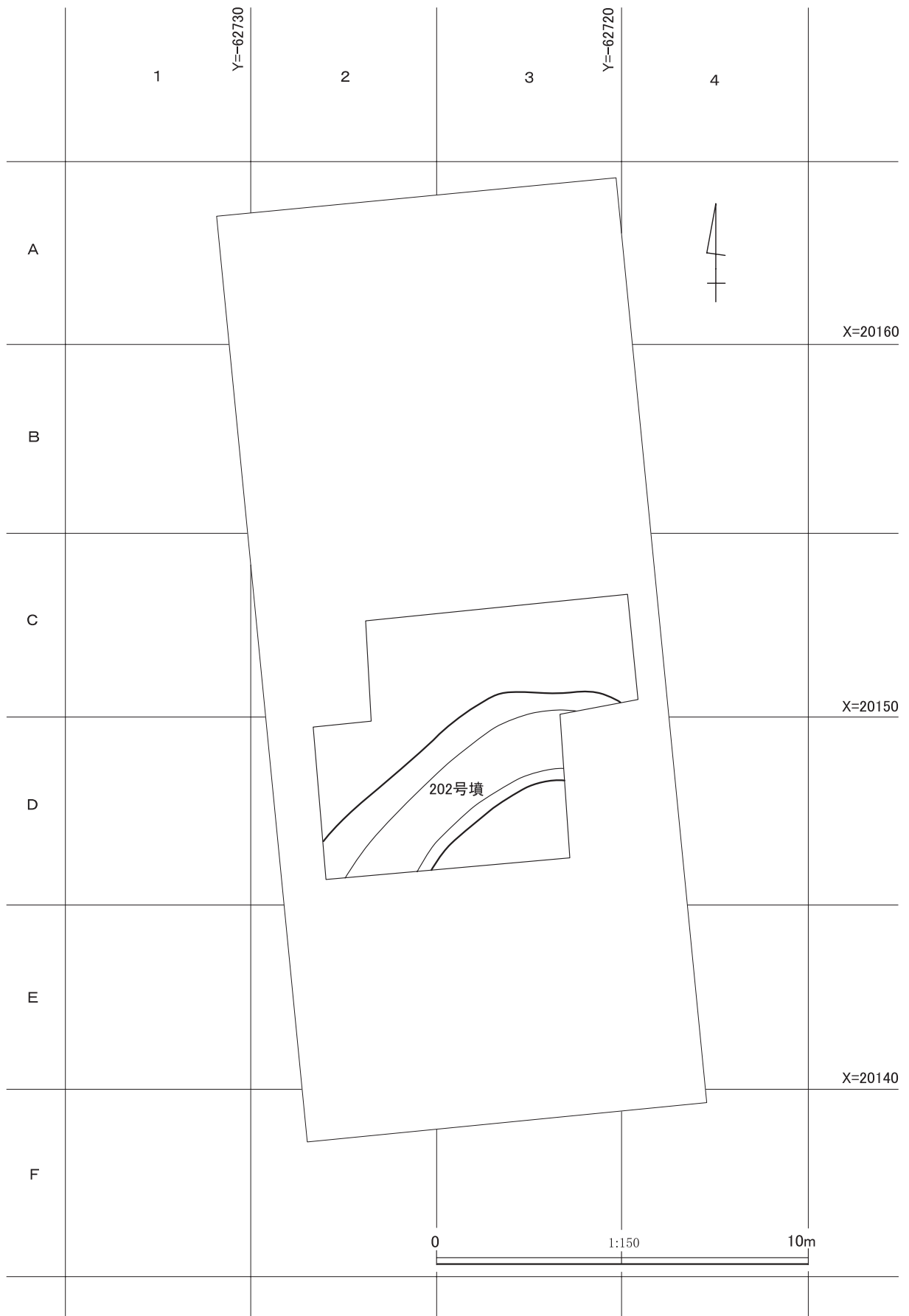
表土剥ぎの段階でも明瞭な墳丘盛土は確認できず、古墳時代の表土層の一部もしくは盛土の可能性のある層が調査区壁面に僅かに検出出来るのみである。第5図の第11層が墳丘の最下層に対応する土層であり、調査範囲内では墳丘の下でのみ確認されている土層である。締め固められたものか盛土されたものかは不明であるが、他の土層と比較してやや締りがあることが確認できる。また、土層観察の結果から、第6層は墳丘盛土の崩落した土層であると考えられる。調査範囲で確認された平面プランは正円ではなく、ややいびつな形状をしている。検出範囲から推定すると、墳丘規模は直径約9m程度と考えられる。

2. 古墳周溝

周溝は上幅2.5～2.7m、下幅1.4～1.5mの規模があり、底面はほぼ平坦と言える。底面内では若干東

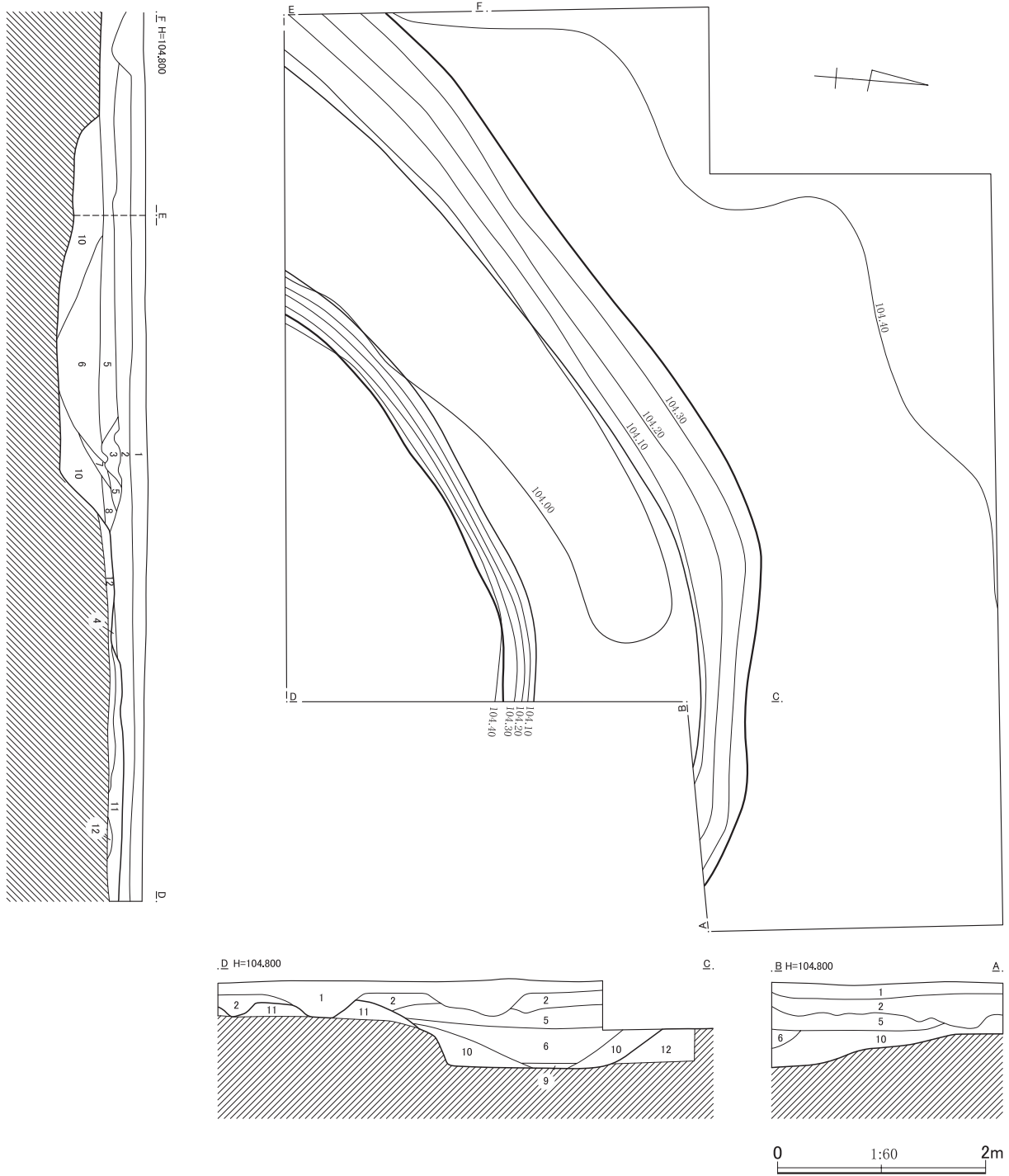


第3図 長沖古墳群第202号墳位置図



第4図 長沖古墳群第202号墳全測図

長沖古墳群Ⅱ



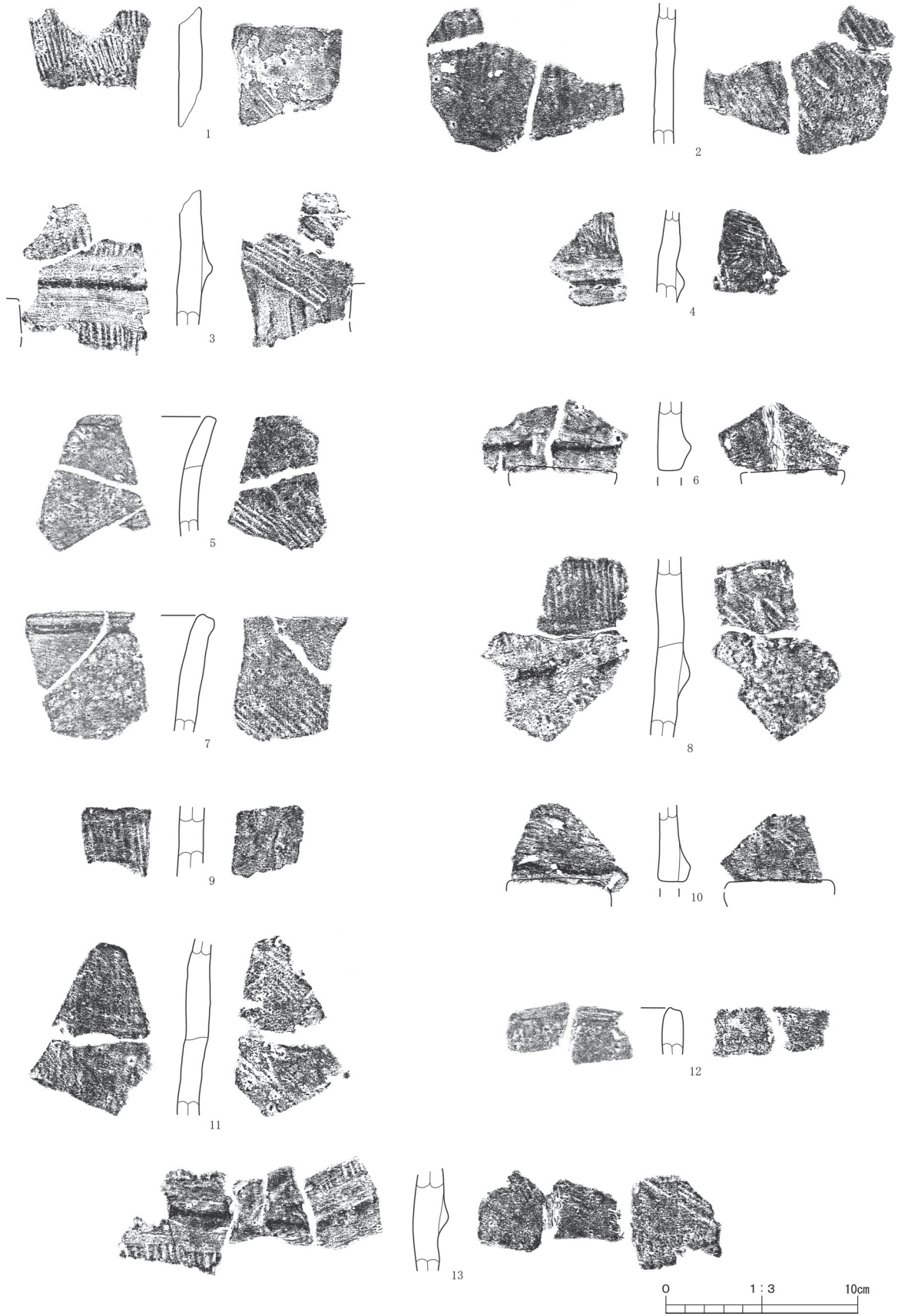
長沖古墳群第202号墳周溝土層説明

- 第1層：暗灰褐色土（現耕作土層）暗灰褐色土を主体とし、As-Aを多量に含む。縮り弱い。粘性無し。
- 第2層：暗黄灰褐色土（旧耕作土層）暗黄灰褐色土を主体とし、As-Aを多量に含む。縮り弱い。粘性無し。
- 第3層：黒黄灰褐色土 2層土を主体とし、5層土をブロック状に含む。
- 第4層：暗黄灰褐色土 2層土を主体とし、11層土をブロック状に含む。
- 第5層：黒褐色粘質土 黒褐色粘質土を主体とし、As-Bを多量に含む。埴輪を多く含む。縮りやや弱い。粘性高い。
- 第6層：暗灰褐色粘質土 暗灰褐色粘質土を主体とし、径1cm以下の小礫、径2mm以下の炭化物粒子を少量含む。縮りやや弱い。粘性高い。
- 第7層：暗灰褐色粘質土 11層土+6層土+10層土。
- 第8層：暗灰褐色粘質土 11層土+6層土。
- 第9層：暗灰褐色粘質土 6層に近いがやや砂質である。
- 第10層：黄褐色粘質土 黄褐色粘質土を主体とし、径1cm以下の小礫、径2mm以下の炭化物粒子を少量含む。縮りやや弱い。粘性高い。
- 第11層：淡暗褐色粘質土 淡暗褐色粘質土を主体とし、径1cm以下の小礫、径2mm以下の炭化物粒子を少量含む。縮りやや有り。粘性高い。
- 第12層：明黄褐色粘質土 明黄褐色粘質土を主体とし、径1cm以下の小礫、径2mm以下の炭化物粒子を少量含む。縮りやや有り。粘性高い。

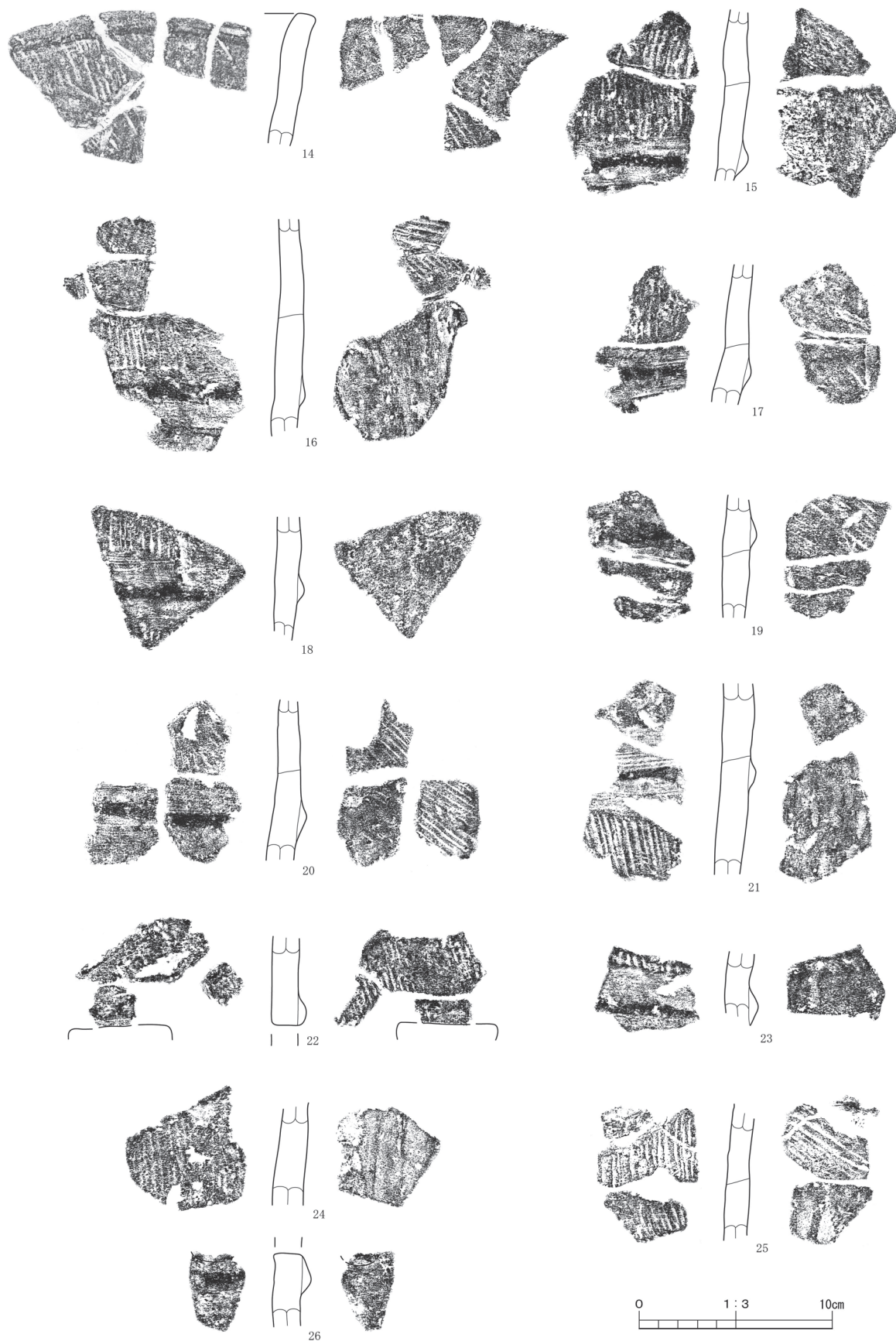
第5図 第202号墳平面図・断面図



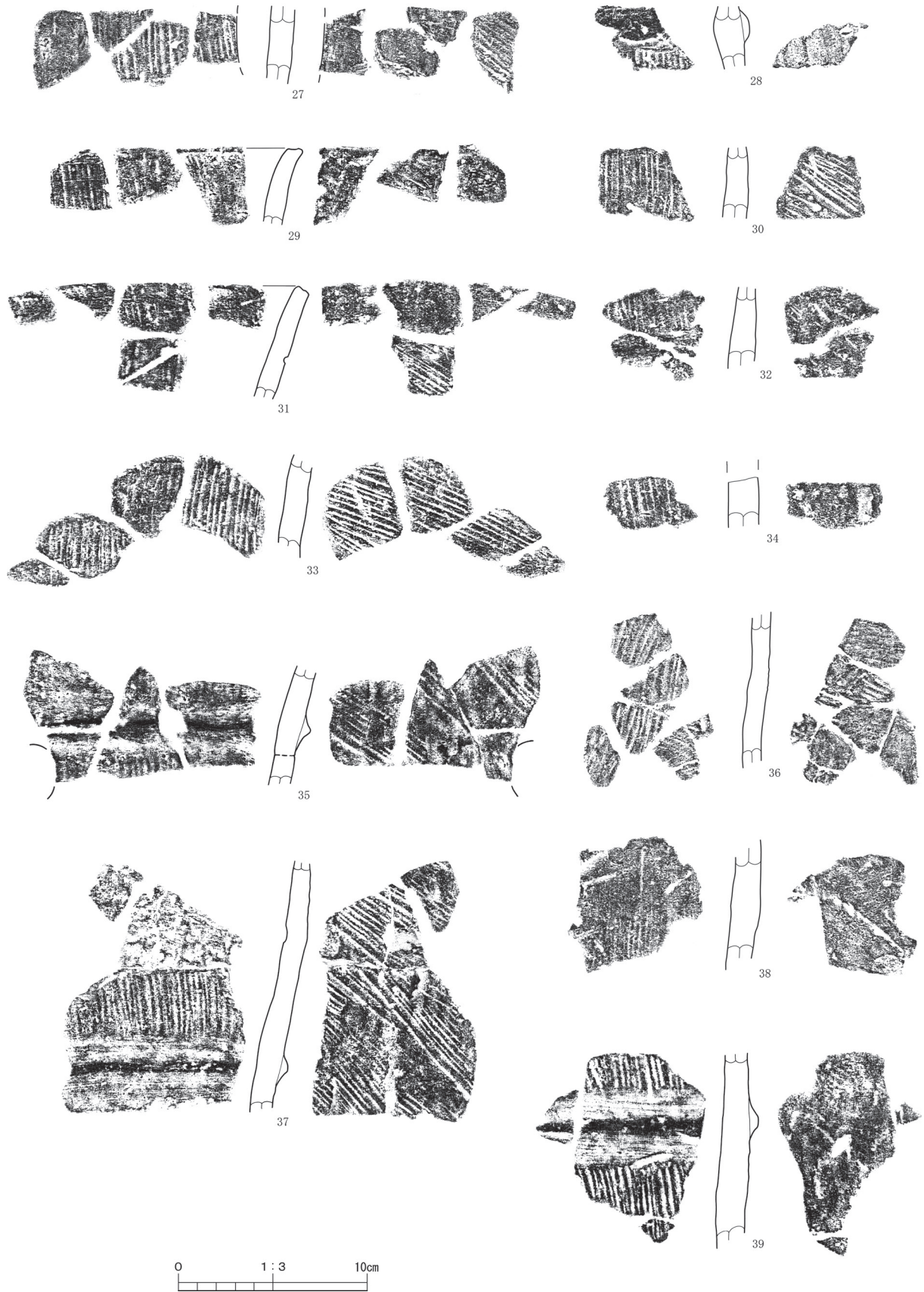
第6図 第202号墳遺物出土位置図



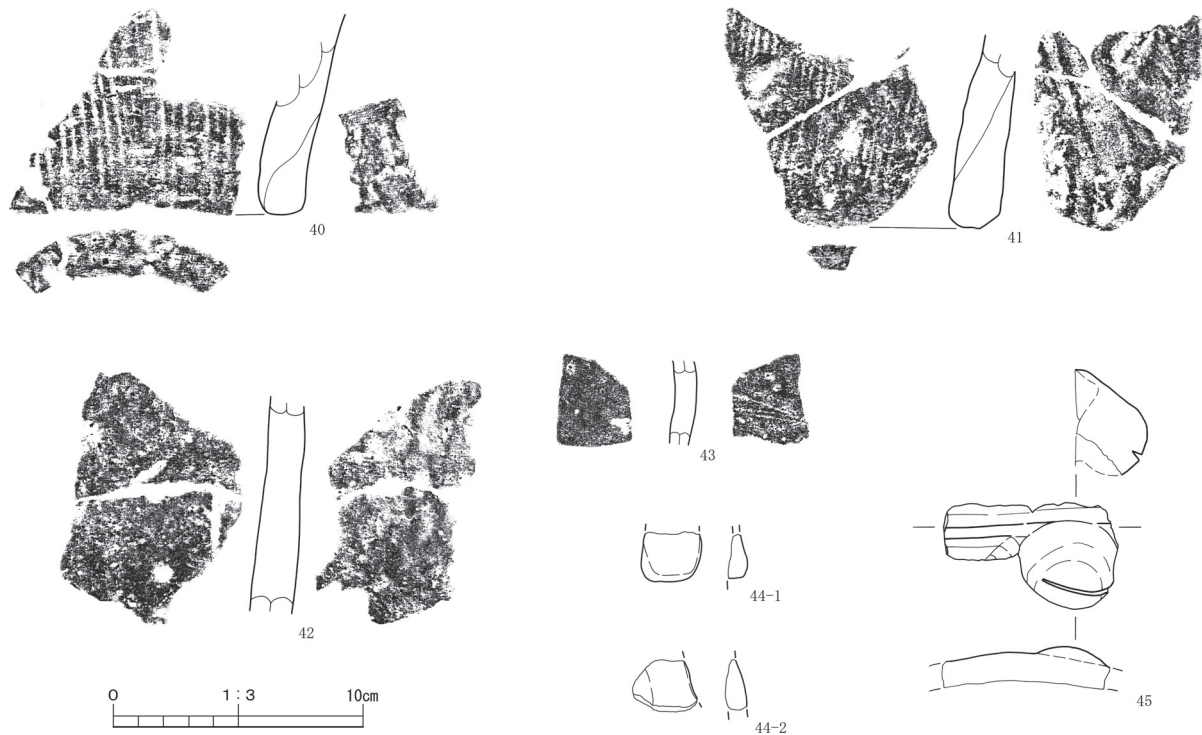
第7図 第202号墳出土遺物(1)



第8図 第202号墳出土遺物(2)



第9図 第202号墳出土遺物(3)



第10図 第202号墳出土遺物（4）

側の方が標高は高いが、実際に現地で感じられる程ではない。遺構確認面からの深さは40cm程度である。断面は逆台形に近い形状である。覆土は現表土を含め11層に分層した。現地表面直下の1～4層は耕作土であり、いずれも江戸時代の浅間山の噴火下降物であるAs-Aを多量に含んでいる。5層は周溝掘り込み部分の最終埋没土であり、同時に周溝の周辺も含め古墳の痕跡を完全に覆い隠した層である。本遺跡での出土遺物である埴輪はほぼすべてがこの土層から出土している。西暦1108年に浅間山が噴火した際の噴火下降物であるAs-Bを含んでいる。6～10層は周溝の覆土である。そのうち6層は古墳墳丘の崩れたものが堆積した層と考えられ、また、最初の周溝内埋没土である10層は地山である12層が崩落したものであろうか。11層は前述したように古墳時代の表土層もしくは若干の盛土層の可能性があり、古墳墳丘の最下層であると考えられる。12層は、土層断面C-Dラインで実施した深掘り調査の結果から古墳築造以前の地山層であると考えられる。

3. 出土遺物（第7～10図、第1表）

出土した遺物はほぼすべてが埴輪である。既に述べたように、全ての遺物は周溝の底面からかなり浮いた状態で出土している。堆積土層との対比では、埴輪はAs-Bを多く含む第5層中に含まれていて、それ以外の土層からはほぼ皆無と言える。類似の出土状況の例として、同じ長沖古墳群内の前方後円墳である長沖古墳群第32号墳の発掘調査でも、同様にAs-Bを多く含む層から埴輪片が集中して出土している様子が確認されている（恋河内・大熊 2006）。同報告によれば、「本墳の築造から古代を通しては、本古墳は比較的安定しており、周囲に立て並べられた埴輪も周溝内に落ち込むことなく元位置を保ち」（p.9）、「祖霊の眠る奥津城である古墳、或いは群構成をとる一定の範囲が、燃料としての薪や堆肥原料の獲得地としての機能をも付加されていくとするならば、本源的か擬制的かは

長沖古墳群Ⅱ

第1表 長沖202号墳出土遺物観察表

番号	種別	突帯		口縁部調整	外面調整			内面調整		焼成	胎土	色調	備考
		幅	高さ		調整	ハケ本数(2cm)	基部	調整	基部				
1	円筒	-	-	-	1次タテハケ	12本	-	磨滅著しいがナナメハケ	-	良好	片岩・チャート・白色針状粒	橙色 5YR6/8	
2	円筒	-	-	-	磨滅著しいが1次タテハケ	4~5本	-	磨滅著しいがナナメハケ・ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	
3	円筒	2.9	0.6	-	1次タテハケ	6本	-	ナナメハケ後、タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート・白色針状粒	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。半円形の透孔か。
4	円筒	2.0	0.6	-	1次タテハケ	6~7本	-	ナナメハケ後、ナデ	-	良好	片岩・チャート・白色針状粒	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。
5	円筒	-	-	不明	磨滅著しいが1次タテハケ	不明	-	ナナメハケ・ナデ	-	良好	角閃石安山岩粒	明赤褐色 5YR5/6	外面に線刻あり。
6	円筒	2.1	0.6	-	磨滅のため不明	-	-	磨滅著しいがハケ後、ナデ	-	良好	片岩・チャート・白色針状粒	橙色 5YR6/8	突帯断面は三角形。半円形の透孔か。
7	円筒	-	-	不明	磨滅著しいが1次タテハケ	不明	-	ナナメハケ後、ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	
8	円筒	2.5	0.5	-	1次タテハケ	6本	-	ナナメハケ後、タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。
9	円筒	-	-	-	1次タテハケ	6本	-	ハケ後、タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート・石英	明赤褐色 5YR5/6	
10	円筒	-	0.6	-	磨滅のため不明	不明	-	ナナメハケ後、タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	突帯下に半円形と推定される透孔。
11	円筒	-	-	-	磨滅著しいが1次タテハケ	不明	-	ナナメハケ後、ナデ	-	良好	片岩・チャート・白色針状粒	明赤褐色 5YR5/8	
12	円筒	-	-	不明	磨滅のため不明	不明	-	磨滅のため不明	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	
13	円筒	2.2	0.5	-	1次タテハケ	5本	-	ハケ後、ナデ	-	良好	片岩・チャート・白色針状粒	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。
14	円筒	-	-	ヨコナデ	1次タテハケ	5本	-	ナナメハケ後、タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート・白色針状粒	赤褐色 5YR4/6	
15	円筒	2.2	0.5	-	1次タテハケ	5本	-	磨滅著しいがハケ後、ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。
16	円筒	-	-	-	1次タテハケ	6本	-	ハケ後、タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート・白色針状粒	明赤褐色 5YR5/6	
17	円筒	1.8	0.3	-	磨滅著しいが1次タテハケ	5本	-	ナナメハケ後、ナデ	-	良好	片岩・チャート・白色針状粒	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。
18	円筒	1.6	0.3	-	1次タテハケ	5本	-	磨滅著しいがハケ後、ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/8	突帯断面は三角形。
19	円筒	1.8	0.3	-	磨滅のため不明	不明	-	ナナメハケ後、ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。
20	円筒	2.4	0.4	-	磨滅のため不明	不明	-	ナナメハケ後、ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。
21	円筒	1.8	0.4	-	1次タテハケ	7本	-	タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。
22	円筒	-	0.5	-	磨滅・ガジリのため不明。	不明	-	ナナメハケ後、ナデ。	-	良好	片岩・チャート	にぶい赤褐色 5YR4/4	突帯下に半円形と推定される透孔。
23	円筒	2.0	0.5	-	1次タテハケ	5本	-	ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。朝顔形か。
24	円筒	-	-	-	1次タテハケ	6本	-	タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	
25	円筒	-	-	-	1次タテハケ	7本	-	ナナメハケ後、タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート・白色針状粒	明赤褐色 5YR5/6	
26	円筒	2.0	0.4	-	磨滅のため不明	不明	-	ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は三角形。突帯上に小孔。

27	円筒	-	-	-	1次タテハケ	6本	-	ナナメハケ後、 タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	透孔あり。
28	円筒	2.0	0.4	-	1次タテハケ	6本	-	タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート・ 白色針状粒	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は 三角形。朝 顔形か。
29	円筒	-	-	ヨコナ デ	1次タテハケ	7本	-	ヘラナデ	-	良好	片岩・チャート	橙色 5YR6/6	
30	円筒	-	-	-	1次タテハケ	6本	-	ナナメハケ	-	良好	片岩・チャート・ 白色針状粒	明赤褐色 5YR5/6	
31	円筒	-	-	ヨコナ デ	1次タテハケ	6本	-	ナナメハケ後、 ナデ	-	良好	赤色粒	明赤褐色 5YR5/6	外面に線刻 あり。
32	円筒	-	-	-	1次タテハケ	5本	-	ナナメハケ後、 ナデ	-	良好	片岩・チャート・ 白色針状粒	明赤褐色 5YR5/6	
33	円筒	-	-	-	1次タテハケ	7本	-	ナナメハケ	-	良好	黒色粒・チャー ト	明赤褐色 5YR5/6	
34	円筒	-	-	-	1次タテハケ	6本	-	タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート・ 白色針状粒	明赤褐色 5YR5/6	
35	円筒	2.3	0.5	-	1次タテハケ	6本	-	ナナメハケ	-	良好	片岩・赤色粒・ 海綿骨針	橙色 5YR6/6	突帯断面は 三角形。突 帯下に透孔 の一部が残 る。
36	円筒	-	-	-	1次タテハケ	6本	-	ナナメハケ後、 ナデ	-	良好	片岩・チャート	明赤褐色 5YR5/6	
37	円筒	2.0	0.4	-	1次タテハケ	7本	-	ナナメハケ	-	良好	片岩・黒色粒・ チャート	明赤褐色 5YR5/6	突帯断面は 三角形。
38	円筒	-	-	-	1次タテハケ	6本	-	ナデ	-	良好	片岩・チャート	にぶい黄 褐色 10YR6/4	色調が他と 異質。
39	円筒	2.4	0.4	-	1次タテハケ	6本	-	ナナメハケ後、 指ナデ	-	良好	片岩・赤色粒・ 石英	赤褐色 5YR4/6	突帯断面は 三角形。
40	円筒	-	-	-	1次タテハケ	5本	-	タテ指ナデ	-	良好	片岩・チャート	橙色 5YR6/6	
41	円筒	-	-	-	1次タテハケ 下端部にヨコ ヘラケズリ	6本	-	タテ指ナデ	-	良好	片岩・赤色粒・ チャート	明赤褐色 5YR6/6	
42	円筒	-	-	-	ナデ	-	-	タテ指ナデ	-	良好	片岩・赤色粒	橙色 5YR5/6	
43	形象	外面ナデ、内面ハケ後ナデ。形象埴輪と思われるが器種・部位は不明。								良好	片岩・チャート	橙色 5YR6/8	
44-1	形象	形象埴輪本体から剥落した部品小片。全体をナデ。器種・部位は不明。								良好	片岩・チャート	橙色 5YR6/8	
44-2	形象	形象埴輪本体から剥落した部品小片。全体をナデ。器種・部位は不明。								良好	片岩・チャート	橙色 5YR6/8	
45	形象	外面ナデ、ヨコナデ。帯部の剥離面にハケメの圧着痕あり。鈴付 革帯部分。(馬形?)。								良好	白色細粒	にぶい赤 褐色 5YR5/4	

ともあれ、古代におけるその子孫達により占有・管理された、合目的に植生に覆われた空間としての景観が想起されるものである。」(同)とある。長沖古墳群第202号墳の埴輪の出土状況の意味合いは、以上の様な長沖古墳群第32号墳の古墳墳丘および埴輪の状況と類似したものと言えようか。

出土遺物のうち、1～42は円筒埴輪であり、43～45は形象埴輪と思われる。円筒埴輪に関しては、10cm以下の小片が多く、器表面も磨滅しているものが多いため、出土した位置等から樹立していた埴輪の様子の復元は困難であろう。外面調整はそのほとんどがタテハケのみであり、ヨコハケのものは見られない。突帯は断面三角形のものが多く、幅は2cm程度、高さは0.5cm程度と共に小さいものである。透孔と思われる造作のある個体が6点程度見られるが、小片のため透孔の全体は不明である。突帯の下端を若干切り込む様子や一部の直線的な形状から、半円形透孔と推定される。また、5と31で直線状の線刻の一部と推定される刻みが見られる。いずれも円筒埴輪の最上段にあたる破片に、右

長沖古墳群Ⅻ

上から左下への直線的な表現であり、×印などの一部であろうか。他に朝顔形埴輪と思われる破片も見られるが、小片のため判然としない。

43は形象埴輪の可能性のある破片である。外面にハケ目は見られない。器厚や他の埴輪片との比較等から埴輪と思われるが、部位等は不明である。44-1、44-2はほぼ同一位置から出土した破片であり、形状・器厚等も類似しているため同一個体と思われる。形象埴輪の貼り付け部分が剥がれたものである可能性が高いが、種類・部位等は不明である。45は鈴の形状が明瞭である形象埴輪である。馬形埴輪の一部であろうか。



長沖古墳群第202号墳 試掘調査遺構確認状況

第Ⅳ章 女池遺跡E地点の調査

第1節 遺跡の概要

女池遺跡は、本庄市児玉町吉田林に所在し約3万㎡の範囲の遺跡である。遺跡の範囲自体は児玉条里遺跡（県遺跡No. 54-300）に含まれており、女池遺跡では過去にA～D地点において4回の発掘調査が行われている。A地点では、1600㎡の発掘調査が行われ、縄文時代後期・古墳時代後期の竪穴住居跡等の集落跡と、中世以降の屋敷跡が検出されている（恋河内 2004）。B地点・D地点は隣接する計410㎡の範囲であり、縄文時代中期末葉～後期・古墳時代後期の竪穴住居跡等の集落跡と中世以降の屋敷跡が検出されている（恋河内・増田・松澤 2001）。C地点では、70㎡の発掘調査が行われ、奈良時代の炭焼き土坑と推定される遺構が検出されている（太田・笠原 2009）。総体とすれば女池遺跡は、縄文時代中期末～後期・古墳時代後期の一般的な集落、および複数の溝を伴った中世館跡からなる複合遺跡といった様子が見られる。一方で、炭焼き土坑の存在や、羽口・鉄滓等の遺物といったやや特殊性のある遺構・遺物についても女池遺跡の特徴を考える上で注意が払われる必要がある。

なお、第Ⅰ章で触れたように第11図に示した遺跡の範囲の内、E地点の発掘調査が行われた平成23年以前は東側の約半分の範囲のみが認識されていたものであった。今後、遺跡範囲の西半についても開発が予想され、条里遺跡内における微高地上の遺跡のあり方が徐々に明らかになっていくであろう。

本章で報告するE地点は個人住宅建設予定地の発掘調査であり、約8m×12mの建物部分が調査の対象となった。排土置き場の都合により、東側の約半分の面積を先行して調査し、調査完了後に一旦埋め戻し、また西側半分の表土剥ぎと調査を行った。そのため、第18号住居跡等は一つの遺構が2度に分かれた調査となり、一部の重複を持たせた調査を行ったが、面的な精査等に関しては若干の不都合があった。

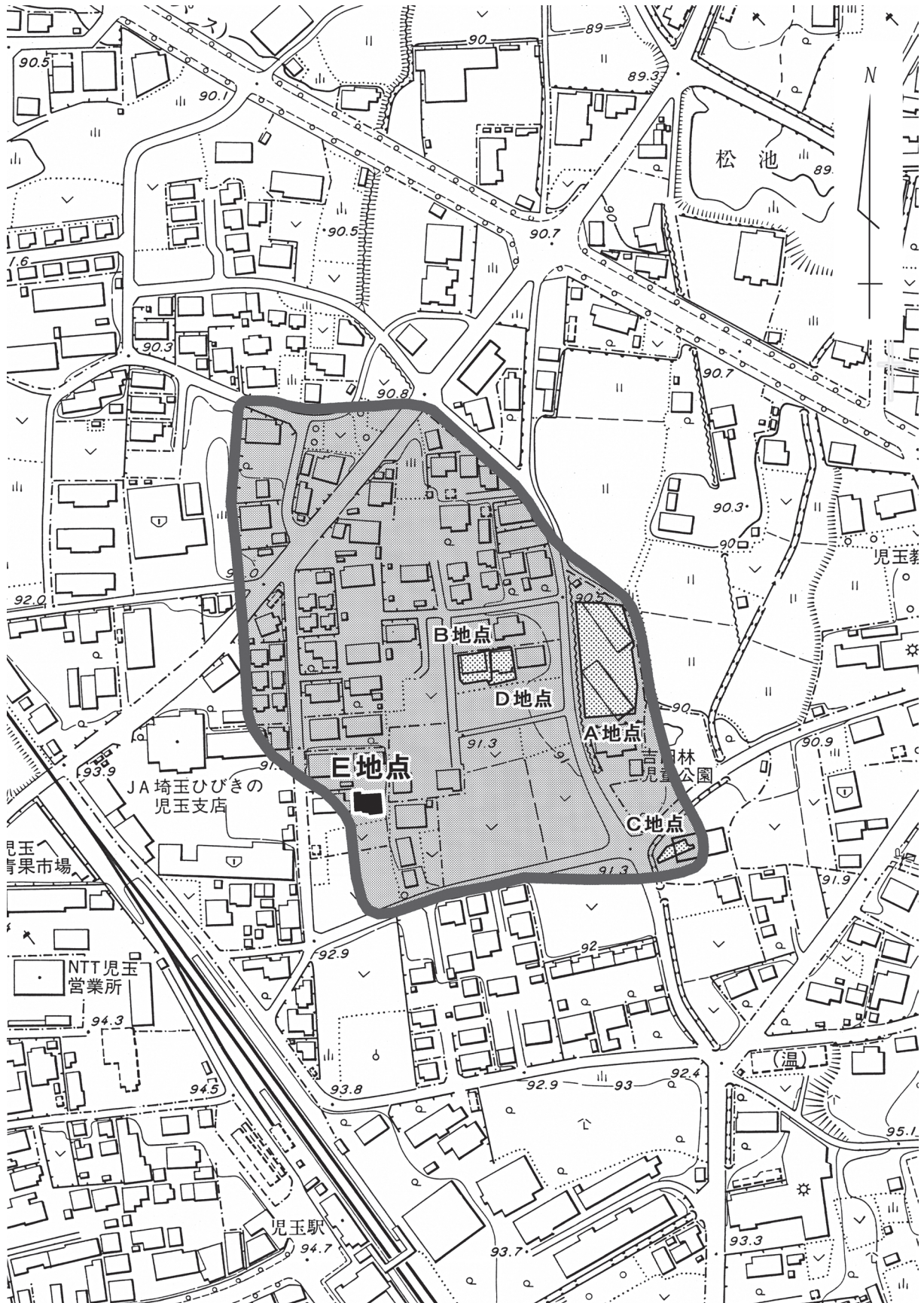
調査では、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒、平安時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代の溝跡1条、中世のものと思われる溝跡1条、縄文時代の土坑4基、古墳時代の土坑2基、中世の井戸跡1基等が検出された。調査範囲が狭いため、その全体が把握できた住居跡は無いが、第18号住居跡についてはカマドを含め大部分が調査対象となった。他の3軒の竪穴住居跡は、ピット・土坑・壁溝等が検出されたが、比較的遺存状態は悪い。また、縄文時代の遺構については土坑が検出されたが、縄文時代以外の遺構の覆土からも縄文土器の出土が目立つ。

第2節 検出された遺構と遺物

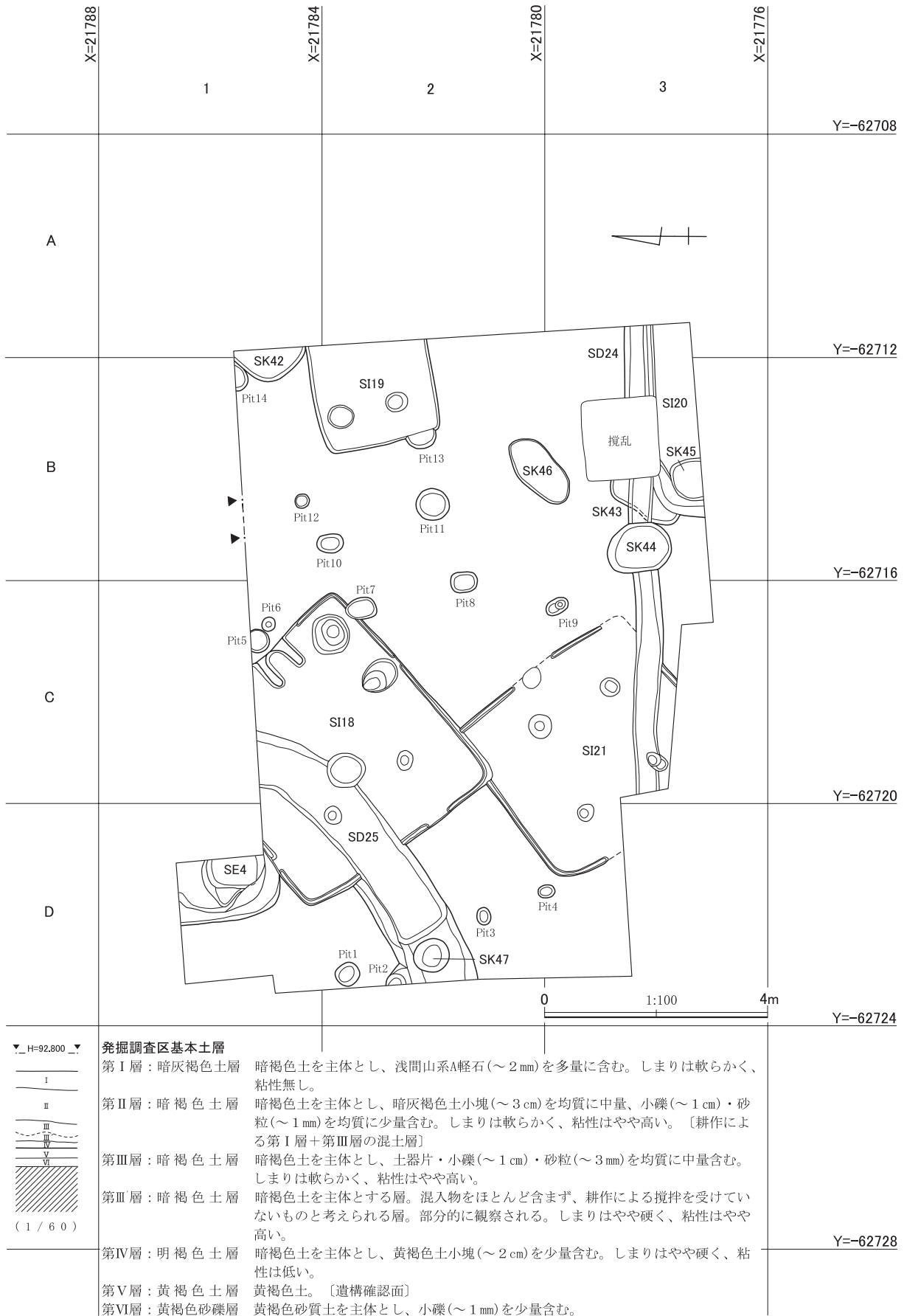
1. 竪穴住居跡

第18号住居跡（第13～15図、第2表）

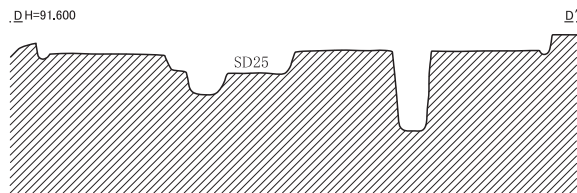
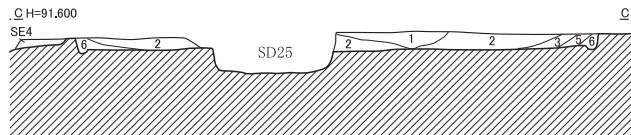
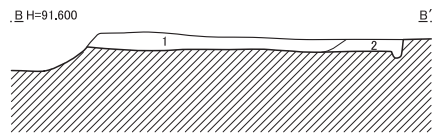
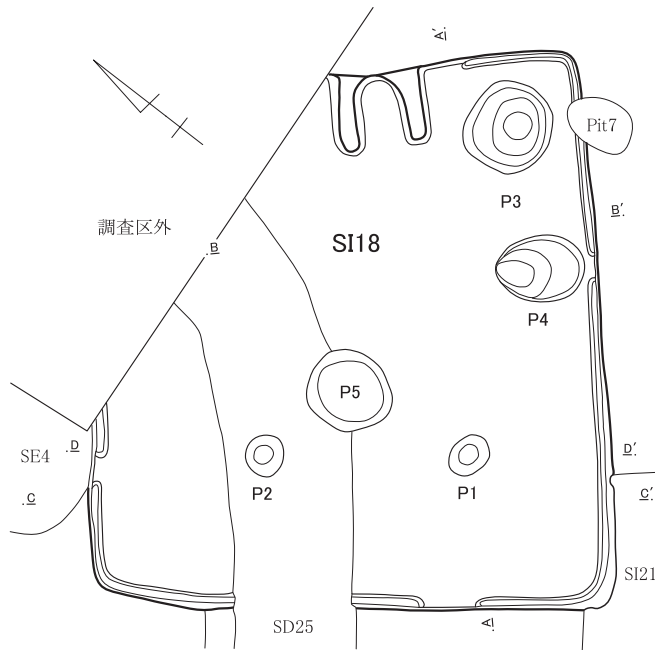
調査区の北辺付近で検出した遺構である。第21号住居跡の壁溝を切って造られ、第4号井戸跡、第25号溝跡、Pit 7に切られている。遺構確認面における平面形態はほぼ長方形を呈すると思われるが、やや歪んでいる可能性も考えられる。規模は北東-南西方向が440cm、北西-南東方向が420cm程度である。壁溝は幅10cm程度、深さ5cm程度で、ほぼ全周するが3ヶ所で小さく切れている。カマドは北東壁で検出された。覆土中に多くの焼土を検出したが、遺物はほとんど残っていなかった。両袖とも白色粘土を貼り付けて造られている。主柱穴の可能性のあるピットはP1、P2であるが、その深さも



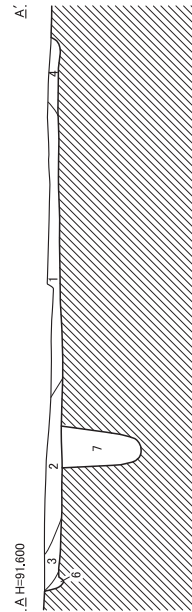
第11図 女池遺跡E地点位置図



第12図 女池遺跡E地点全測図



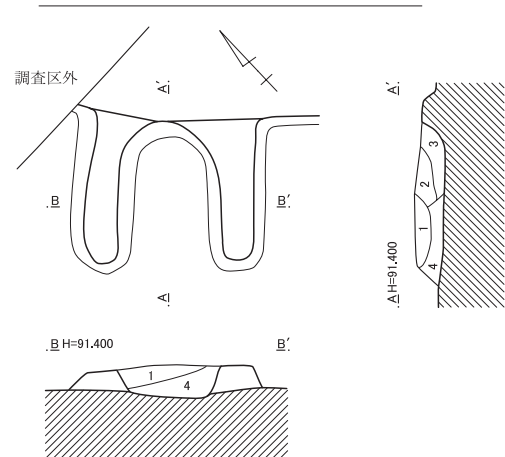
0 1:60 2m



第18号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～3cm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)・同粒子(～4mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)を中量、焼土粒子(～5mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

- 第5層：暗黄褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～2cm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)・同粒子(～6mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第7層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～2cm)・同粒子(～8mm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

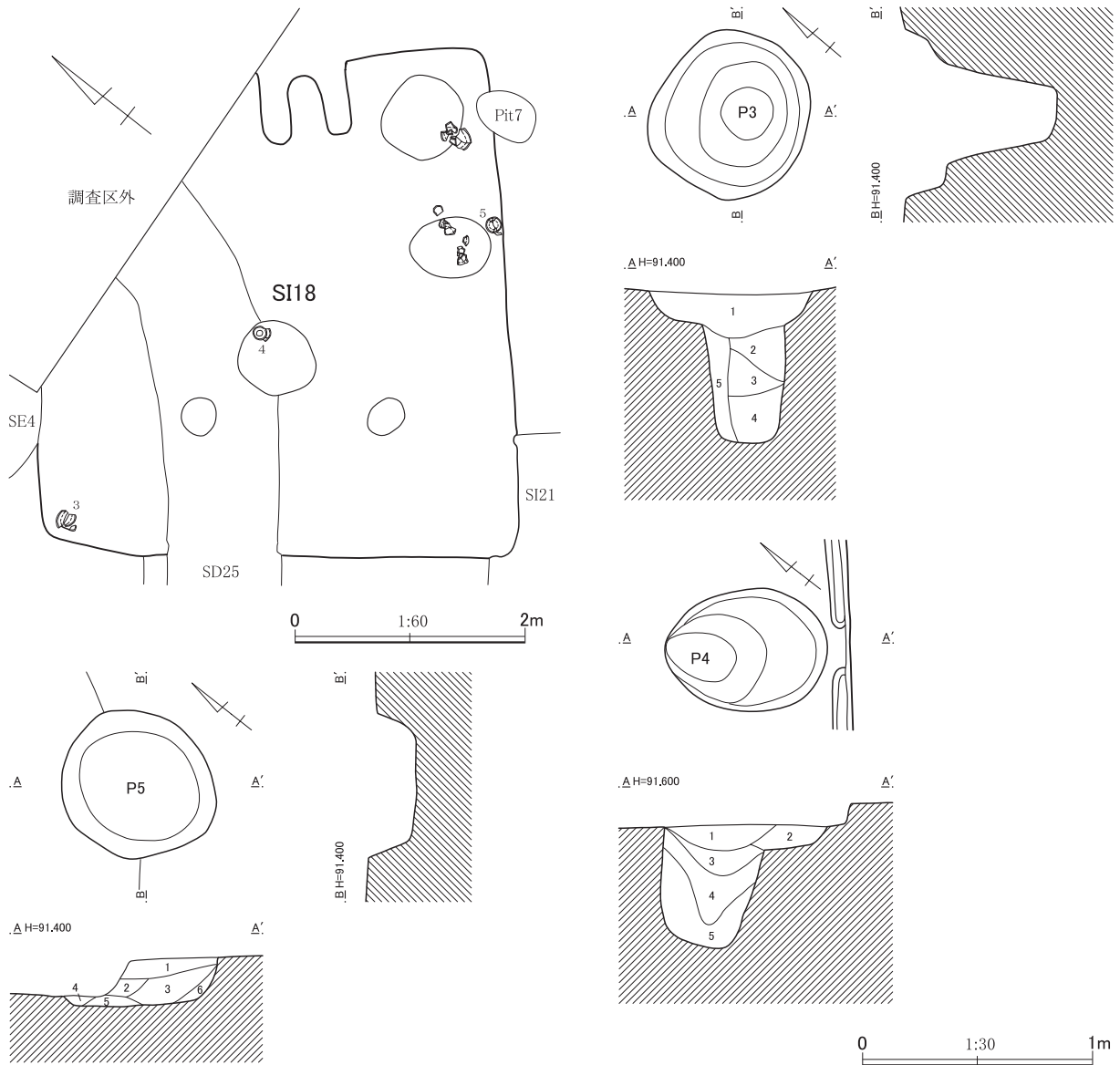


0 1:30 1m

第18号住居跡カマド土層説明

- 第1層：明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～2cm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。
- 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～4mm)・焼土粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。
- 第3層：赤褐色土層 焼土小塊(～2cm)・同粒子(～2mm)を主体とし、暗褐色土粒子(～8mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層：暗赤褐色土層 暗褐色土を主体とし、焼土小塊(～1cm)を少量、焼土粒子(～5mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第13図 第18号住居跡平面図・断面図



第18号住居跡貯蔵穴土層説明 (P3)

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～3cm)・同粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～5cm)を中量、黄褐色土粒子(～2mm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)・同粒子(～5mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層：暗黄褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～5cm)・同粒子(～1cm)を多量に含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。

第18号住居跡梯子ピット土層説明 (P4)

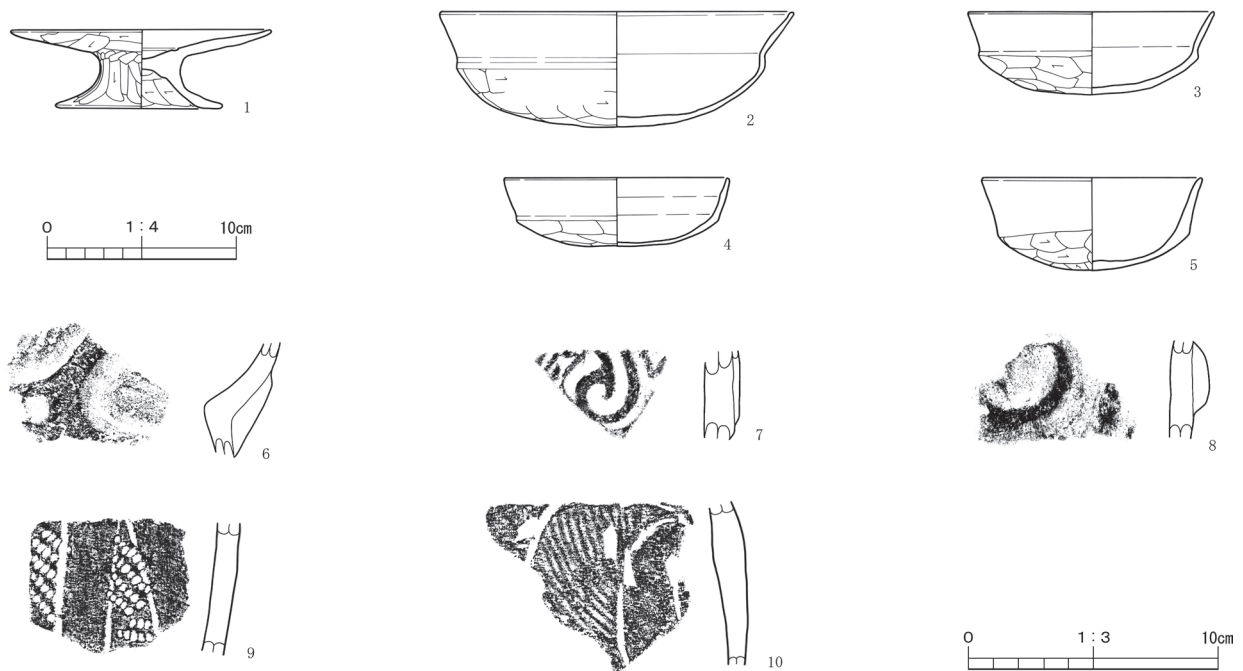
- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～3cm)・同粒子(～2mm)、焼土小塊(～4cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～4cm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～4mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層：明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～8cm)・同粒子(～5mm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層：暗黄褐色土層 黄褐色土小塊(～3cm)・同粒子(～4mm)を主体とし、暗褐色土粒子(～4mm)を少量含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。

第18号住居跡床下土坑土層説明 (P5)

- 第1層：暗黄褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～3cm)・同粒子(～2mm)、焼土小塊(～4cm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～8mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：暗黄褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)を少量、黄褐色土粒子(～4mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～1mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層：暗黄褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～2mm)を多量に含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。
- 第6層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)・同粒子(～6mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第14図 第18号住居跡遺物出土状況図・ピット平面図・断面図

女池遺跡Ⅳ



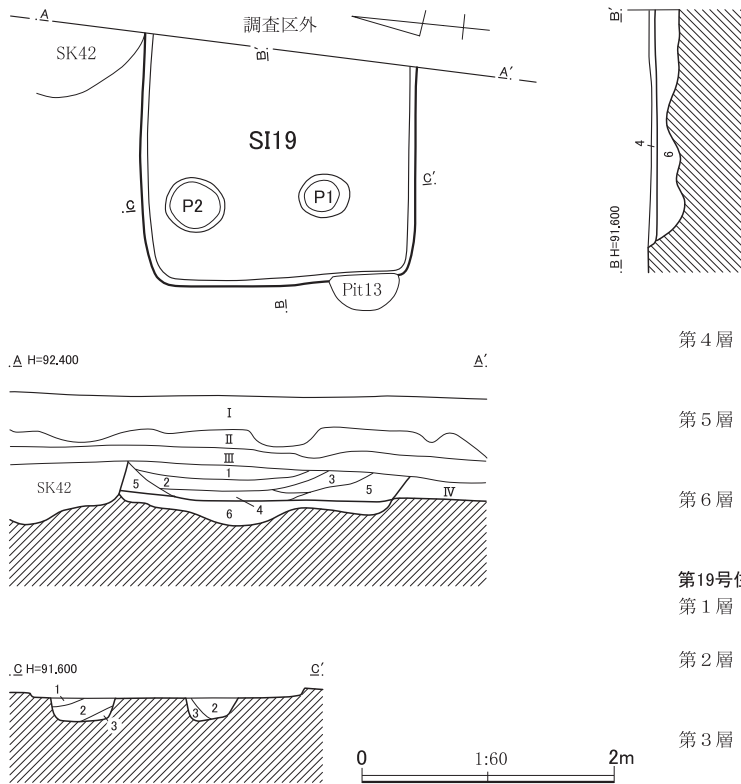
第15図 第18号住居跡出土遺物

第2表 第18号住居跡出土遺物観察表

1	高 坏	A. 口径(13.5)。器高4.2。底径8.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ヘラケズリ。内面ヨコナデ脚部内外面ヘラケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒・片岩・白色粒。E. 内外-明赤褐色。F. 坏部4/5欠損。H. №2。
2	坏	A. 口径(18.5)。器高6.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部ケズリ。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外-橙色。F. 1/2。H. 一括。
3	坏	A. 口径(13.0)。器高4.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部ケズリ。D. 赤色粒・片岩・白色粒。E. 内外-橙色。F. 1/3。H. №3。
4	坏	A. 口径11.8。器高3.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部ケズリ。D. 赤色粒・チャート・白色粒。E. 内外-橙色。F. ほぼ完形。H. №1。
5	坏	A. 口径11.4。器高5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部ケズリ。D. 赤色粒・角閃石・白色粒。E. 内外-にぶい黄橙色。G. 内外面の一部に黒色付着物が残る。F. 一部欠損。
6	縄文土器 浅 鉢 か	B. 粘土紐積み上げ。C. 頸部に隆帯による区画文。区画内に単節RLの縄文を充填。D. 砂粒・片岩・石英。E. 内-赤褐色。外-にぶい赤褐色。F. 頸部片。G. 加曾利E式。H. 一括。
7	縄文土器 深 鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部に隆帯によるJ字文。D. 砂粒・石英・角閃石。E. 内-灰黄褐色。外-にぶい黄橙色。F. 胴部片。G. 加曾利E式。H. 一括。
8	縄文土器 深 鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部に隆帯による文様区画文。D. 砂粒・片岩・石英。E. 内-橙色。外-褐灰色。F. 胴部片。G. 加曾利E式。H. 一括。
9	縄文土器 深 鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線で区画し、区画内に単節LRの縄文を充填。D. 砂粒・角閃石・片岩。E. 内-浅黄色。外-暗灰黄色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. 一括。
10	縄文土器 深 鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線で区画し、区画内に単節LRの縄文を充填。D. 砂粒・角閃石・片岩・石英。E. 内-灰黄褐色。外-橙色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. 一括。

異なり、検出されたのが2基のみであるため詳細は不明である。P3は貯蔵穴である。浅い掘り込みと深い掘り込みの二段構造となっており、浅い掘り込みの縁で土師器甕の胴部片が出土し、覆土中から少量の土器片が出土した。P4はいわゆる梯子ピットである。こちらも浅い掘り込みと深い掘り込みの二段構造であり、住居の床面レベルの覆土中で古墳時代の土師器坏等の遺物が出土した。また、床面中央付近でやや深い円形の床下土坑P5が検出され、覆土中からは土師器甕等の少量の土器片が出土した。

遺物は、古墳時代の土師器と縄文土器片が出土した。



第19号住居跡土層説明

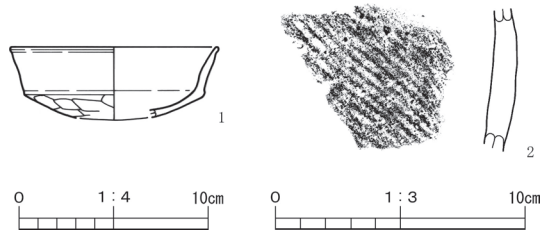
- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～6 cm)・焼土粒子(～8 mm)を中量、黄褐色土粒子(～4 mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～4 mm)・焼土粒子(～4 mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～4 cm)・同粒子(～2 mm)を少量、焼土粒子(～4 mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

- 第4層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～8 mm)・焼土粒子(～4 mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～2 cm)・同粒子(～5 mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層：明黄褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～8 cm)を多量に、同粒子(～1 mm)を中量含む。しまりは硬く、粘性は低い。〔貼り床〕

第19号住居跡ピット穴土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～4 mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～4 cm)・同粒子(～4 mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～2 mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第16図 第19号住居跡平面図・断面図



第17図 第19号住居跡出土遺物

第3表 第19号住居跡出土遺物観察表

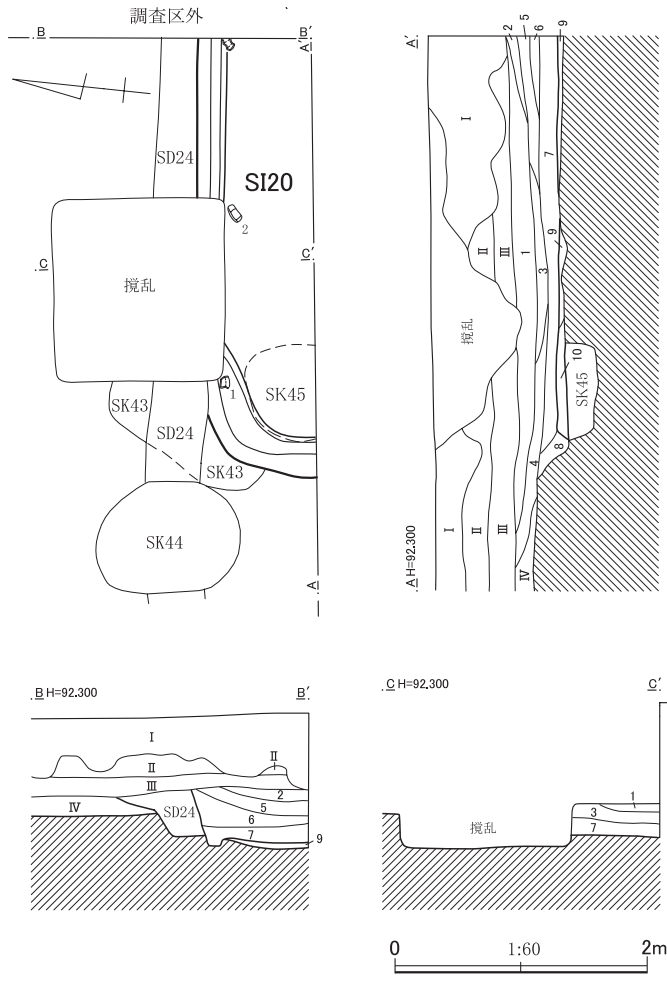
1	坏	A. 口径(10.8)。残存高3.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外-にぶい橙色。F. 1/3。H. 一括。
2	縄文土器深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 単節LRの縄文。D. 砂粒・チャート・角閃石。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 胴部片。H. 床下。

本住居跡の時期は出土遺物等から古墳時代後期と考えられる。

第19号住居跡 (第16・17図、第3表)

調査区の東辺付近で検出した遺構である。縄文土器が出土したPit13を切って造られている。遺構確認面の平面プランでは第42号土坑と接しているが、調査区壁面観察により第42号土坑の方が新しいことが分かる。住居跡の東側は調査区外へ延びており、遺構確認面における平面形態は方形を呈するものと考えられる。規模は、東西方向は200cm以上、南北方向は220cm程度である。壁溝は検出されな

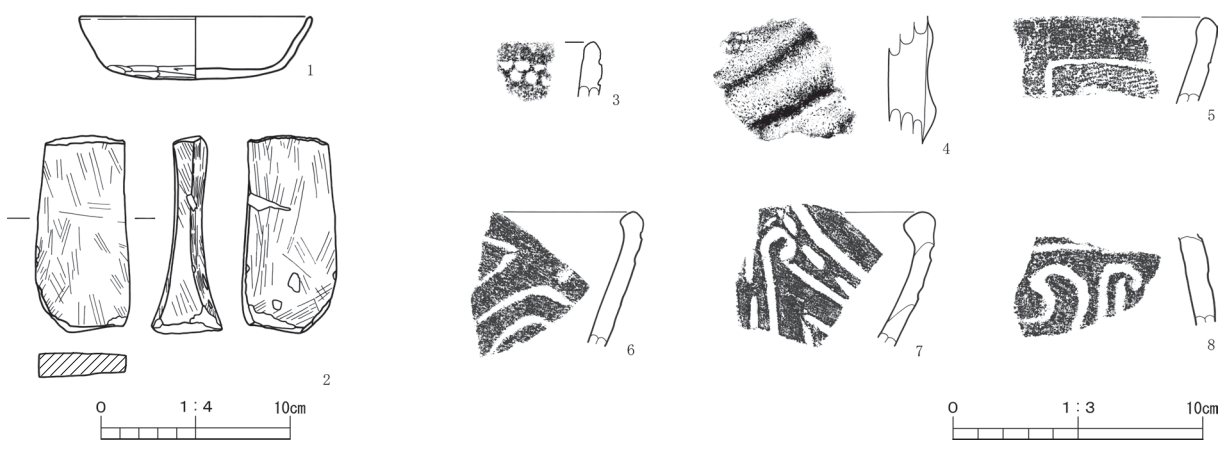
女池遺跡Ⅳ



第18図 第20号住居跡平面図・断面図

第20号住居跡土層説明

- 第1層:暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)を微量、黄褐色土粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層:暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層:暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～2cm)・同粒子(～4mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層:暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～2mm)を少量、焼土粒子(～4mm)、炭化物粒子(～8mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層:暗黄褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～4cm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層:暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～6mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第7層:暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)・同粒子(～4mm)を少量、焼土粒子(～4mm)、炭化物小片(～2cm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第8層:暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～2mm)中量、炭化物粒子(～5mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第9層:暗黄褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～2cm)・同粒子(～6mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第10層:暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～2cm)・同粒子(～8mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第19図 第20号住居跡出土遺物

かった。遺構確認面から床面までの深さは7～8cm程度である。主柱穴の可能性のあるピットはP1、P2であるが、いずれも深さが20cm程度であり詳細は不明である。他にカマド等の屋内施設は検出されなかった。床面は厚さ10～23cm程度の貼り床であった。

遺物は、覆土中・貼り床中共に古墳時代の土師器と縄文土器片が出土した。

本住居跡の時期は出土遺物等から古墳時代後期と考えられる。

第4表 第20a、20b号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口径(12.0)。器高3.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。D. 黒色鈹物(角閃石)。E. 内外-褐灰色。F. 1/4。G. 内外面黒色磨研(外面は磨滅著しい)。H. No.1
2	砥石	A. 長さ10.5。幅5.0。厚さ3.5。重さ155.38 g。H. No.2。
3	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 横位に2段に半裁竹管による連続刺突文。D. 砂粒・角閃石。E. 内外-にぶい褐色。F. 口縁部片。H. 一括。
4	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 2条の隆帯による区画文。区画内に単節RLの縄文を充填。D. 砂粒・角閃石・雲母。E. 内-にぶい黄橙色。外-灰褐色。F. 胴部片。G. 加曽利E式。H. 床下。
5	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による区画文。区画内に単節LRの縄文を充填。D. 砂粒・角閃石・石英。E. 内-にぶい褐色。外-にぶい黄褐色。F. 口縁部片。G. 称名寺式。H. 床下。
6	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による区画文。区画内に縄文を施文しているが不鮮明。D. 砂粒・角閃石・片岩・石英。E. 内-灰黄褐色。外-にぶい黄褐色。F. 口縁部片。G. 称名寺式。H. 床下。
7	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による区画文。沈線間には列点を施文。口縁端部及び内面に丁寧なヨコ方向のナデを施す。D. 砂粒・片岩。E. 内-にぶい赤褐色。外-黒褐色。F. 口縁部片。G. 称名寺式。H. 床下。
8	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線によるJ字文。沈線区画内に単節LRの縄文を充填。D. 砂粒・角閃石・片岩・石英。E. 内-灰黄褐色。外-にぶい黄褐色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. 床下。

第20a、20b号住居跡(第18・19図、第4表)

調査区の南東隅付近で検出した遺構である。当初の住居が一度火災により焼失し、その後、同住居を拡張し貼り床を施した上で再使用し、再び火災に遭い放棄されたものと考えられる。前者を第20a号住居跡、後者を第20b号住居跡とする。第24号溝跡と第45号土坑と第43号土坑を切って造られている。そのうち、縄文土器を多く含む第45号土坑は床面精査中に検出されたものである。また、住居北壁の一部は攪乱に切られている。住居跡の大部分は調査区外であるが、住居跡の平面プランは方形を呈するものであろうか。遺構の規模は、東西方向350cm以上、南北方向90cm以上である。検出された壁面では全ての範囲で壁溝が確認されたが、コーナー部付近ではその幅が多少広がっている。他にカマド等の屋内施設は検出されず、調査区外に存在するものと思われる。床面は第20b号住居を構築する際に、一部で5cm～8cm程度の厚さの貼り床が施されているが、確認された範囲が狭いため全体構造は不明である。第20a号住居跡の床面状況は不明だが、第45号土坑を大きく壊していないことから、それほど深い掘り方があったとは考えられない。

遺物は、1の土師器坏が壁溝の覆土上面の床面から3～4cm程浮いた状態で、2の砥石が攪乱範囲のすぐ脇で、床面から僅かに浮いた状態で出土した。他に縄文土器片が出土した。

本住居跡の時期は出土遺物等から奈良～平安時代と考えられる。

第21号住居跡(第20図)

調査区の南辺付近で検出した遺構である。第18号住居跡と第24号溝跡に切られている。検出された施設は壁溝とピット4基である。床面構造は検出されなかった。P1～P4の各ピットは深さ65cm～70cm程度であり、支柱穴と考えられる。また、北東壁の中ほどで焼土範囲が確認されており、カマドの痕跡と考えられる。平面形態はほぼ正方形を呈するものと思われる。規模は北東-南西方向が360cm、北西-南東方向が390cm程度である。壁溝は幅10～15cm、深さ5cm程度である。

本住居跡の時期は、遺構に伴う遺物は出土していないが、カマドの存在が推定されること、第18号住居跡より古いことと、同住居跡と主軸の方位がほぼ一致していること等から古墳時代中期～後期の可能性が高い。

女池遺跡Ⅳ



第20図 第21号住居跡平面図・断面図

2. 溝跡

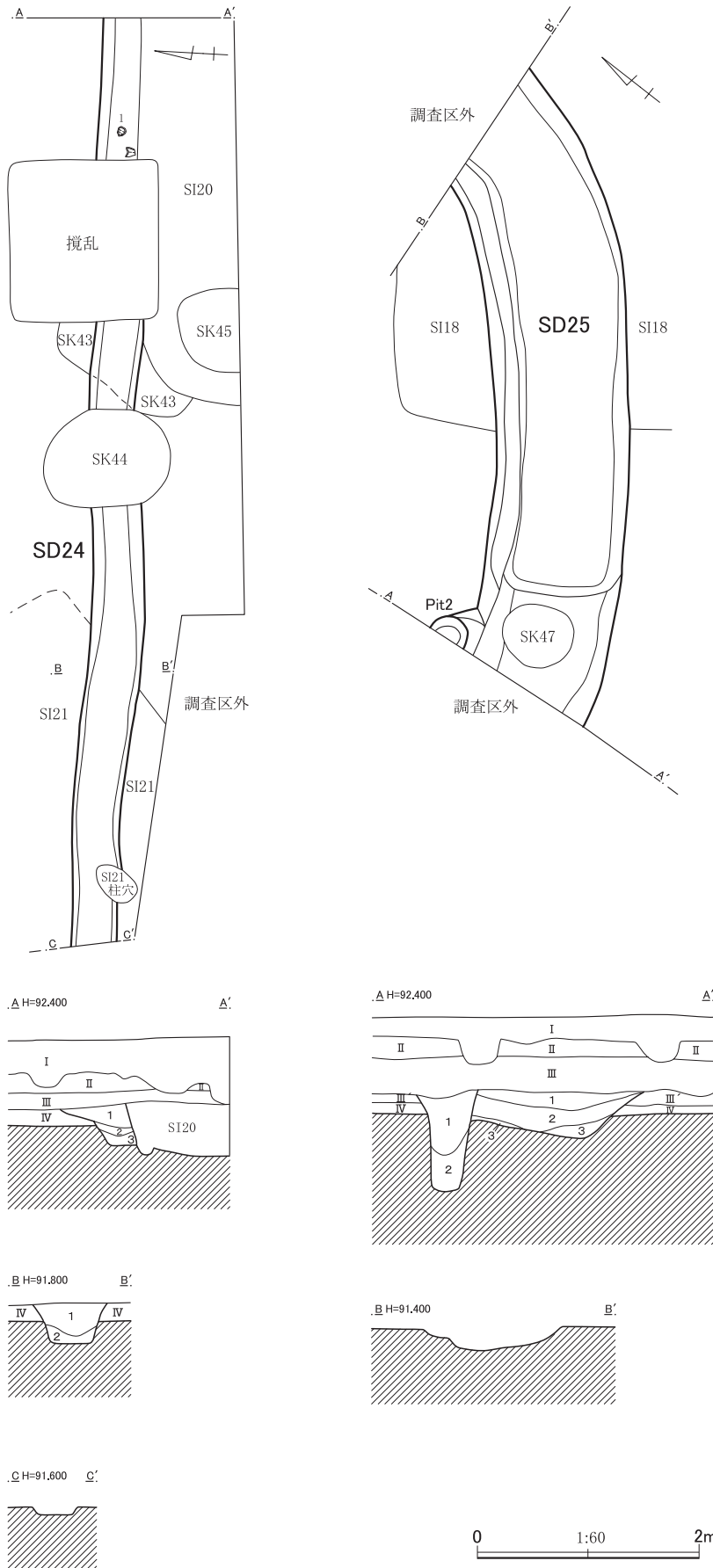
第24号溝跡 (第21・22図、第5表)

調査区の南辺付近で検出した遺構である。第21号住居跡、第43号土坑、第44号土坑を切って造られ、第20号住居跡に切られている。確認された全長は840cm、ほぼ一定の溝幅で直線状に概ね東西方向に走行している。断面形状は逆台形に近い。溝の上幅は40cm～50cmである。溝底はほぼ平坦で幅は20cm～35cm程度である。溝の底面の標高は東側で91.15m、西側で91.30mと、東へ向かって若干低くなっているが、流水等の痕跡はなく、用途・掘削目的は不明である。

実測可能な遺物は縄文土器しか出土していないが、他の出土遺物や切り合い関係等から本溝跡の時期は古墳時代と考えられる。

第25号溝跡 (第21・23図、第6表)

調査区の北西隅付近で検出した遺構である。第18号住居跡、第47号土坑を切って造られ、第4号井戸跡、Pit 2に切られている。確認された全長は最大で620cm、遺構確認面における平面形態は、概ね北東-南西方向の直線状ではあるが、緩やかに弧を描く。溝の全長のうち北東側の大部分では、しっかりした掘り込みになっており、深さ30cm、上幅90～100cmの箱型の形状である。一方、調査区西辺に近い付近では掘り込みがやや浅くなり、底面が平坦でなくなる。一連の溝でない可能性も検討したが、



第24号溝跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、明褐色土粒子（～4mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊（～4cm）・同粒子（～4mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：明褐色土層 黄褐色土を主体とし、暗褐色土粒子（～6mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

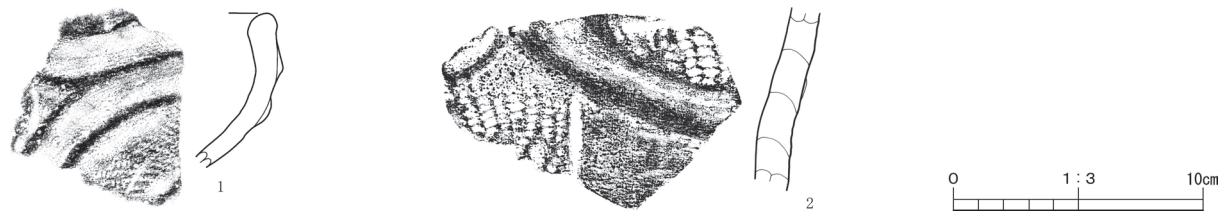
第25号溝跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、小礫（～1cm）・砂粒（～1mm）を中量、黄褐色土粒子（～4mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、小礫（～1cm）・砂粒（～1mm）・黄褐色土小塊（～2cm）・同粒子（～4mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊（～2cm）・同粒子（～6mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

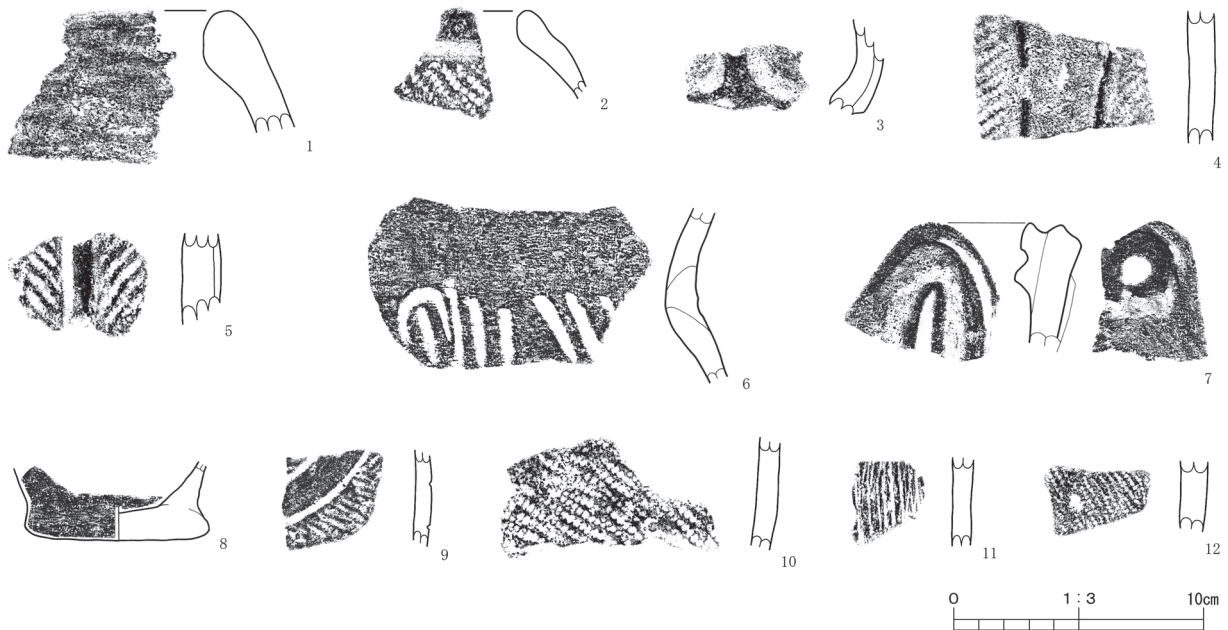
Pit 2 土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第21図 第24号・第25号溝跡平面図・断面図



第22図 第24号溝跡出土遺物



第23図 第25号溝跡出土遺物

第5表 第24号溝跡出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 波状口縁。口唇部から口縁部にかけて隆帯による文様区画。区画内に単節LRの縄文を充填。D. 砂粒・赤色粒・角閃石。E. 内外-にぶい橙色。F. 口縁部片。G. 加曽利E式。H. No.2。
2	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 隆帯と沈線により区画文を施す。区画内と胴部には単節LRの縄文を充填。胴部には懸垂文を施文。D. 砂粒・角閃石・片岩・石英。E. 内-明赤褐色。外-にぶい褐色。F. 胴部片。G. 加曽利E式。H. 一括。

第6表 第25号溝跡出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 平口縁。無文帯。D. 砂粒・赤色粒・石英。E. 内-灰黄褐色。外-にぶい黄橙色。F. 口縁部片。G. 加曽利E式。H. SK 47 付近。
2	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による区画。区画内に単節RLの縄文を充填。D. 砂粒・赤色粒・石英。E. 内外-にぶい橙色。F. 口縁部片。G. 加曽利E式。H. SK 47 付近。
3	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 隆帯による区画文。D. 砂粒・赤色粒・片岩。E. 内-にぶい橙色。外-橙色。F. 頸部片。G. 加曽利E式。H. SK 47 付近。
4	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 隆帯による懸垂文区画。区画内に単節RLの縄文を充填。D. 砂粒・石英・チャート・角閃石。E. 内-赤橙色。外-にぶい黄橙色。F. 胴部片。G. 加曽利E式。H. 一括。
5	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 隆帯による懸垂文区画。区画に単節LRの縄文を充填。D. 砂粒・赤色粒・石英。E. 内-にぶい黄橙色。外-灰白色。F. 胴部片。G. 加曽利E式。H. SK 47 付近。
6	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による懸垂文。D. 砂粒・角閃石・片岩。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 胴部片。G. 堀之内式。H. 一括。
7	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 突起端部で隆帯と沈線を施す。内面上端に隆帯でレンズ状装飾を施す。D. 砂粒・角閃石・片岩・石英。E. 内外-にぶい黄褐色。F. 口縁部片。G. 称名寺式。H. SK 47 付近。
8	縄文土器 深鉢	A. 底径(7.3)。残存高3.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 底部直上をヨコナデ。D. 砂粒・片岩。E. 内-にぶい黄褐色。外-浅黄色。F. 底部。G. 称名寺式。H. SK 47 付近。

9	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による区画。区画内に単節LRの縄文を充填。D. 砂粒・石英・片岩。E. 内外-灰色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. SK 47 付近。
10	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 単節LRの縄文。D. 砂粒・角閃石・チャート・雲母。E. 内-にぶい黄橙色。外-黒褐色。F. 胴部片。H. 一括。
11	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 縦位の集合沈線文。D. 砂粒・赤色粒・石英。E. 内外-にぶい橙色。F. 胴部片。H. 一括。
12	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 単節LRの縄文。D. 砂粒・赤色粒。E. 外-黒褐色。内-橙色。F. 胴部片。H. SK 47 付近。

平面形態の連続性等から一連の遺構と考えた。流水等の痕跡はなく、用途・掘削目的は不明である。

実測可能な遺物は縄文土器しか出土していないが、他の出土遺物や切り合い関係等から本溝跡の時期は中世と考えられる。なお、本溝跡中の第47号土坑付近で第23図1～3、5、7～9、12の縄文土器がまとまって出土している。周辺に縄文時代の遺構が存在する可能性が考えられる。

3. 土坑

第42号土坑（第24図）

調査区の北東隅で検出した遺構である。第19号住居跡とPit14を切って造られている。大部分が調査区外のため平面形態は不明である。実測可能な遺物は出土していないが、切り合い関係と覆土の様子等から、古墳時代の土坑である可能性がある。

第43号土坑（第24図）

調査区の南東側で検出した遺構である。第20号住居跡、第24号溝跡および攪乱によって切られている。第44号土坑とはわずかに接しているが新旧関係は不明である。平面形態は長円形であろうか。遺構確認面からの深さは10～15cm程度である。実測可能な遺物は出土していないが、切り合い関係等から本遺構の時期は縄文時代と考えられる。

第44号土坑（第24図）

調査区の南東側で検出した遺構である。第24号溝跡によって切られている。第43号土坑とはわずかに接しているが新旧関係は不明である。平面形態は楕円形である。遺構確認面からの深さは25cm程度である。実測可能な遺物は出土していないが、切り合い関係等から本遺構の時期は縄文時代と考えられる。

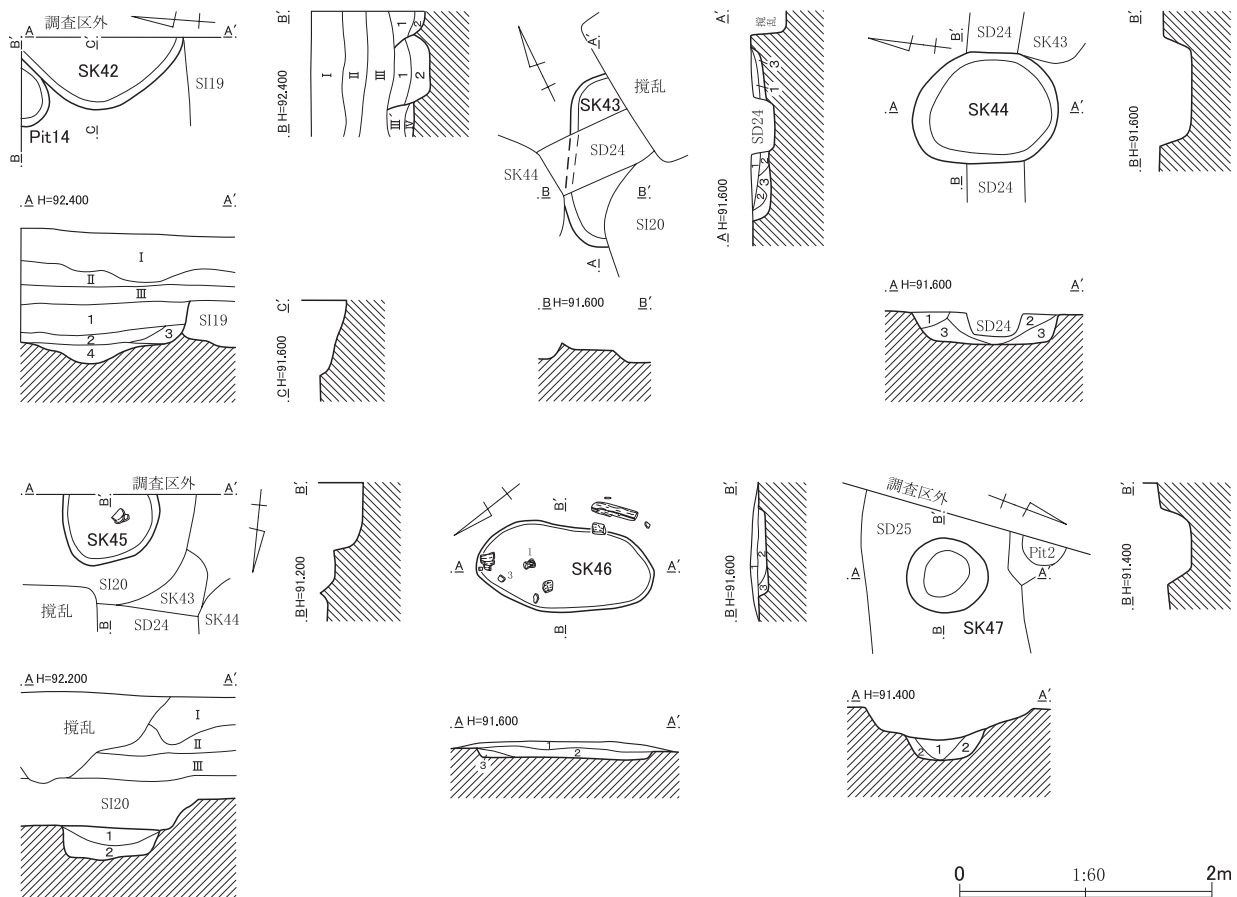
第45号土坑（第24・25図、第7表）

調査区の南東側で検出した遺構である。第20号住居跡の床面の精査中に確認されたもので、第20号住居跡より古い遺構である。平面形態は円形であろうか。第20号住居跡の床面からの深さは25cm程度である。遺物は縄文土器が出土した。本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

第46号土坑（第24・26図、第8表）

調査区の東側で検出した遺構である。他の遺構との切り合い関係は無い。平面形態は長円形である。遺構確認面からの深さは10cm程度であるが、覆土中および周辺に焼土粒子が比較的多く見られる。また、土坑周辺に縄文土器片と共に礫も散乱しており、縄文時代の住居跡の炉に相当する可能性が考えられる。周辺の調査区では、女池遺跡A地点の縄文時代後期第7号住居跡の炉で使われている礫と類似点が見られる。本土坑では、周囲に並ぶ小ピットも含め、積極的に住居跡と確定できなかったため、ここでは土坑として報告する。

女池遺跡Ⅳ



第42号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～3cm)・同粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)を少量、黄褐色土粒子(～2mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第3層：明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～4cm)・同粒子(～8mm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第4層：明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～3cm)・同粒子(～4mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

Pit14土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)・同粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。
 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～3cm)・同粒子(～4mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。

第43号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～1mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～8mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第3層：明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～2cm)・同粒子(～4mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。

第44号土坑土層説明

- 第1層：明褐色土層 明褐色土を主体とし、暗褐色土粒子(～1mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～5mm)、焼土粒子(～1mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第3層：明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)・同粒子(～2mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第45号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～4mm)を少量、焼土粒子(～1mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～8mm)、焼土粒子(～1mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

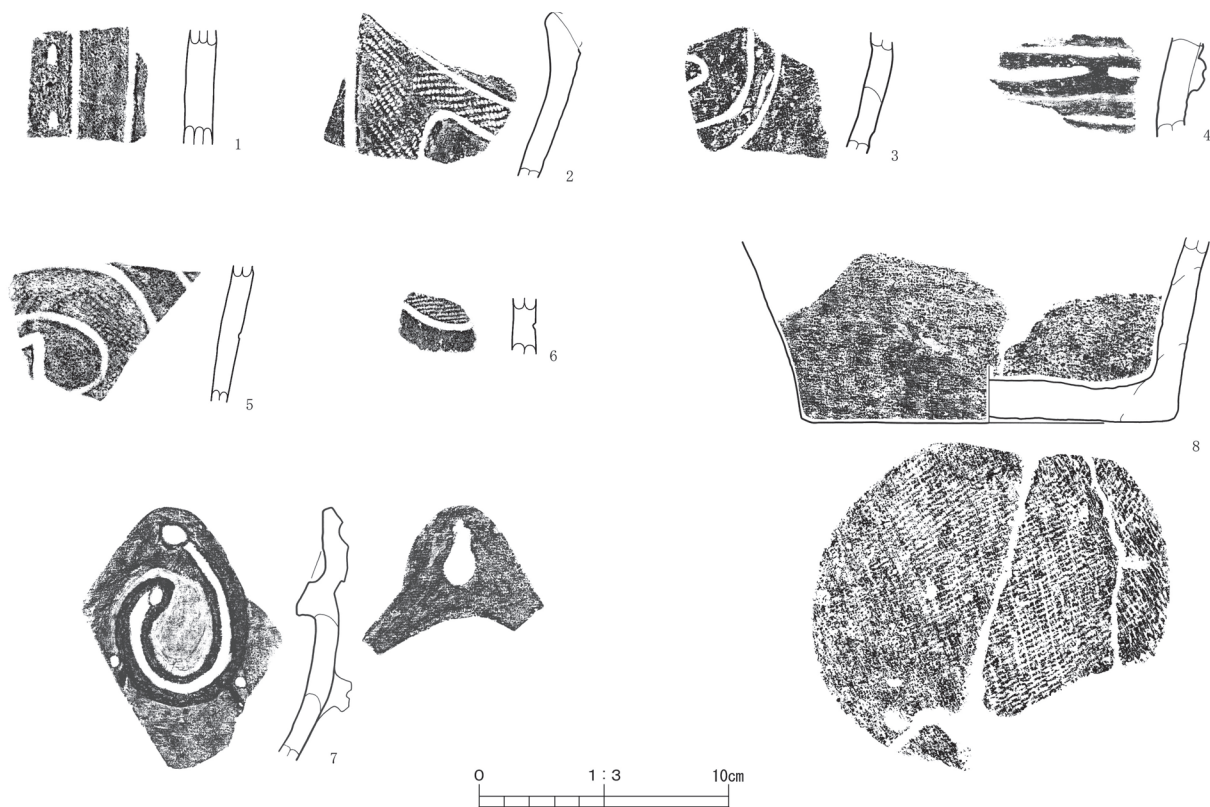
第46号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～2mm)、焼土粒子(～1mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～4mm)、焼土粒子(～1mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第3層：明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)・同粒子(～2mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

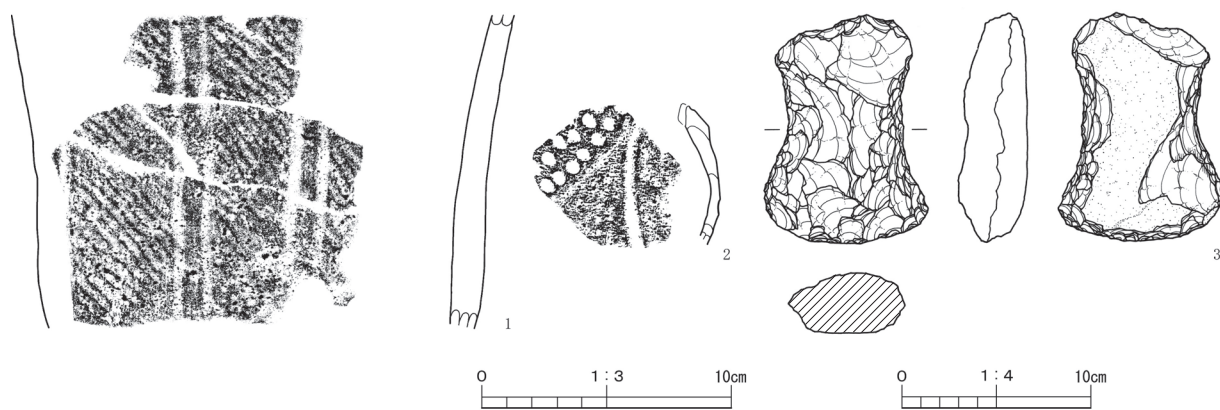
第47号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～8mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

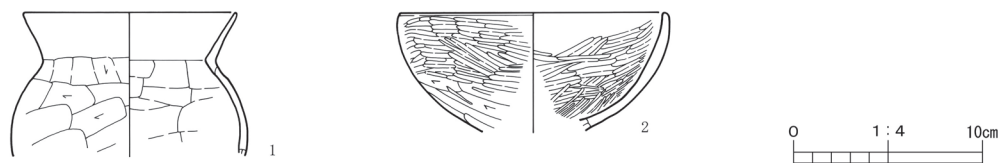
第24図 第42～47号土坑平面図・断面図



第25図 第45号土坑出土遺物



第26図 第46号土坑出土遺物



第27図 第47号土坑出土遺物

女池遺跡Ⅳ

第7表 第45号土坑出土遺物観察表

1	縄文土器鉢 深	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による懸垂文区画。懸垂文の横に縦位の列点文。D. 砂粒・石英・角閃石。E. 内-灰色。外-黄灰色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. 一括。
2	縄文土器鉢 深	B. 粘土紐積み上げ。C. 波状口縁。沈線で区画し、区画内に単節LRの縄文を充填。口縁端部わずかに内傾し、内面は丁寧なヨコ方向のナデを施す。D. 砂粒・角閃石・石英。E. 内-橙色。外-褐灰色。F. 口縁部片。G. 称名寺式。H. 一括。
3	縄文土器鉢 深	B. 粘土紐積み上げ。C. 突起で隆帯と沈線位による文様を創出。J字状沈線の始点と終点に円形刺突。内面上部には水滴状の刺突を施す。内面はヨコ方向のナデ。D. 砂粒・角閃石・片岩(雲母)。E. 内-黒褐色。外-にぶい黄橙色。F. 口縁部片。G. 称名寺式。H. 一括。
4	縄文土器鉢 深	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による区画文。沈線間には列点を施文。D. 砂粒・角閃石・片岩。E. 内外-明褐色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. 一括。
5	縄文土器鉢 深	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線によるJ字文。J字文間に単節RLの縄文を充填。D. 砂粒・角閃石・雲母。E. 内-にぶい橙色。外-にぶい黄橙色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. 一括。
6	縄文土器鉢 深	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による区画文。区画内にLRの縄文を充填。D. 砂粒・角閃石・石英。E. 内-にぶい赤褐色。外-褐灰色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. 一括。
7	縄文土器鉢 深	B. 粘土紐積み上げ。C. 隆帯と沈線により施文し隆帯上に沈線を施す。D. 砂粒・片岩。E. 内-褐灰色。外-明黄褐色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. 一括。
8	縄文土器鉢 深	A. 残存高7.4。底径14.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 底面に網状痕。内面立ち上がり部はヨコ方向のナデを施す。外面は無文。D. 砂粒・角閃石・片岩。E. 内-にぶい黄橙色。外-橙色。F. 底部。G. 称名寺式?。H. No.1・一括。

第8表 第46号土坑出土遺物観察表

1	縄文土器鉢 深	A. 残存高12.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による懸垂文区画。区画内に単節LRの縄文を充填。D. 砂粒・片岩・赤色粒・チャート。E. 内-にぶい橙色。外-橙色。F. 胴部1/5。G. 加曽利E式。H. No.1。
2	縄文土器鉢 深	B. 粘土紐積み上げ。C. 波状口縁。口縁端部に円形刺突文を連続して施す。口縁部頂部から沈線で懸垂文を施文。D. 砂粒・角閃石片岩。E. 内-にぶい黄橙色。外-黄灰色。F. 口縁部片。G. 加曽利E式。H. 一括。
3	打製石斧	A. 長さ9.05。幅6.55。厚さ2.80。重さ168.68g。C. 割礫の両側縁に両面調整施す。刃部や両側縁はやや磨耗している。D. 頁岩。F. 完形。G. 分銅形。H. No.3。

第9表 第47号土坑出土遺物観察表

1	小型甕	A. 口縁部(11.2)。残存高7.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ内面ヘラナデ。D. 細砂粒・片岩・チャート・石英。E. 内外-橙色。F. 胴部1/5。H. 一括。
2	高坏	A. 口径(14.0)。残存高6.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外ミガキ。体部ケズリ後ミガキ。D. 赤色粒・片岩・石英。E. 内外-にぶい橙色。F. 坏部1/4。H. 一括。

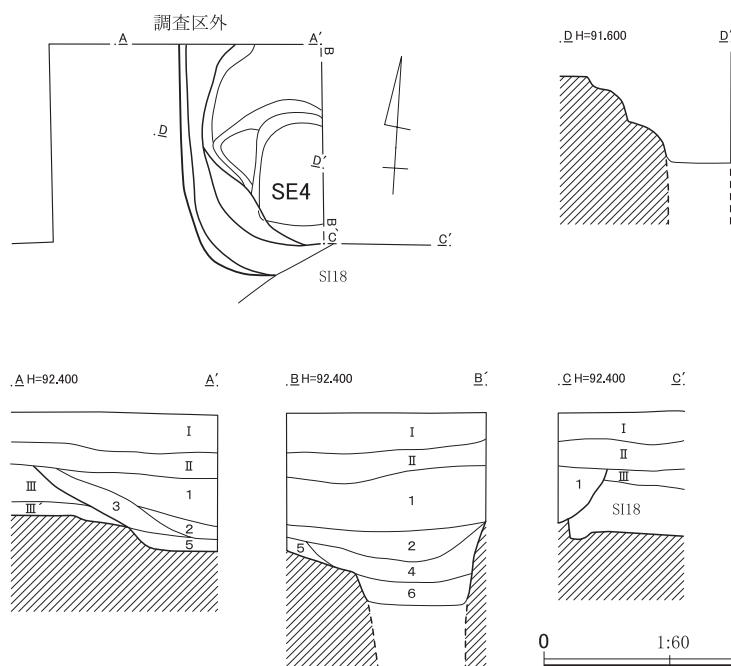
第47号土坑 (第24・27図、第9表)

調査区の西辺中央付近で検出した遺構である。中世の溝である第25号溝跡の底面付近に位置しており、第25号溝跡より古い遺構である。平面形態は円形である。溝底からの深さは25cm程度である。遺物は縄文土器と土師器が出土しているが、覆土の様子等から古墳時代の遺構と思われる。また、本遺構付近で第23図に示した縄文土器等が多数出土している。周辺に縄文時代の遺構が存在するものと思われる。

4. 井戸跡

第4号井戸跡 (第28・29図、第10表)

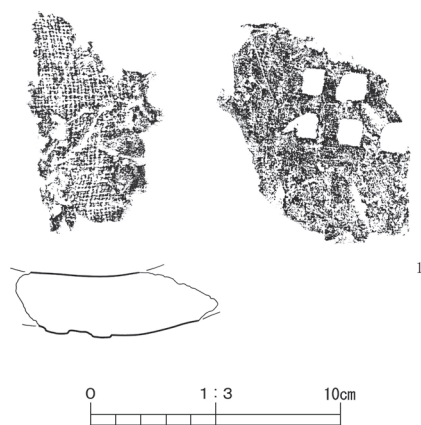
調査区の北西隅付近で検出した遺構である。第18号住居跡、第25号溝跡を切って造られている。平面形態は不整形であり、北側の中段には若干の平場が造られている。使用状態で何らかの施設があった可能性があるが、壁等が崩落した結果の可能性もあろう。調査区際で検出されたため、安全のため井戸底までの完掘は行わなかった。調査した深さは遺構確認面から約70cm程度である。掘削した底面付近には現在でも水分を多く含んでいるため十分な観察は困難であるが、井戸枠の痕跡等は観察されなかったため地山素掘りの井戸と思われる。



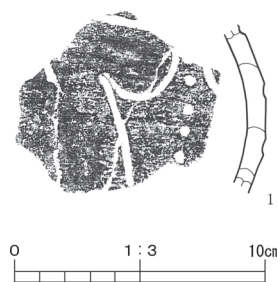
第4号井戸跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～2cm)を微量、黄褐色土粒子(～8mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～1cm)・同粒子(～4mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～5cm)を微量、黄褐色土粒子(～2mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層：暗黄褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～4cm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層：暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、黄褐色土小塊(～4cm)・同粒子(～6mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第28図 第4号井戸跡平面図・断面図



第29図 第4号井戸跡出土遺物



第30図 Pit13出土遺物

第10表 第4号井戸跡出土遺物観察表

1	平瓦	A. 残存長8.6。残存幅6.2。厚さ2.4。C. 凸面ナデの後文様叩き。凹面糸きり後未調整。D. 赤色粒・片岩。E. 凸凹面-にぶい橙色。F. 破片。G. 凹面側は布目圧痕を残す。H. 覆土。
---	----	---

第11表 Pit13出土遺物観察表

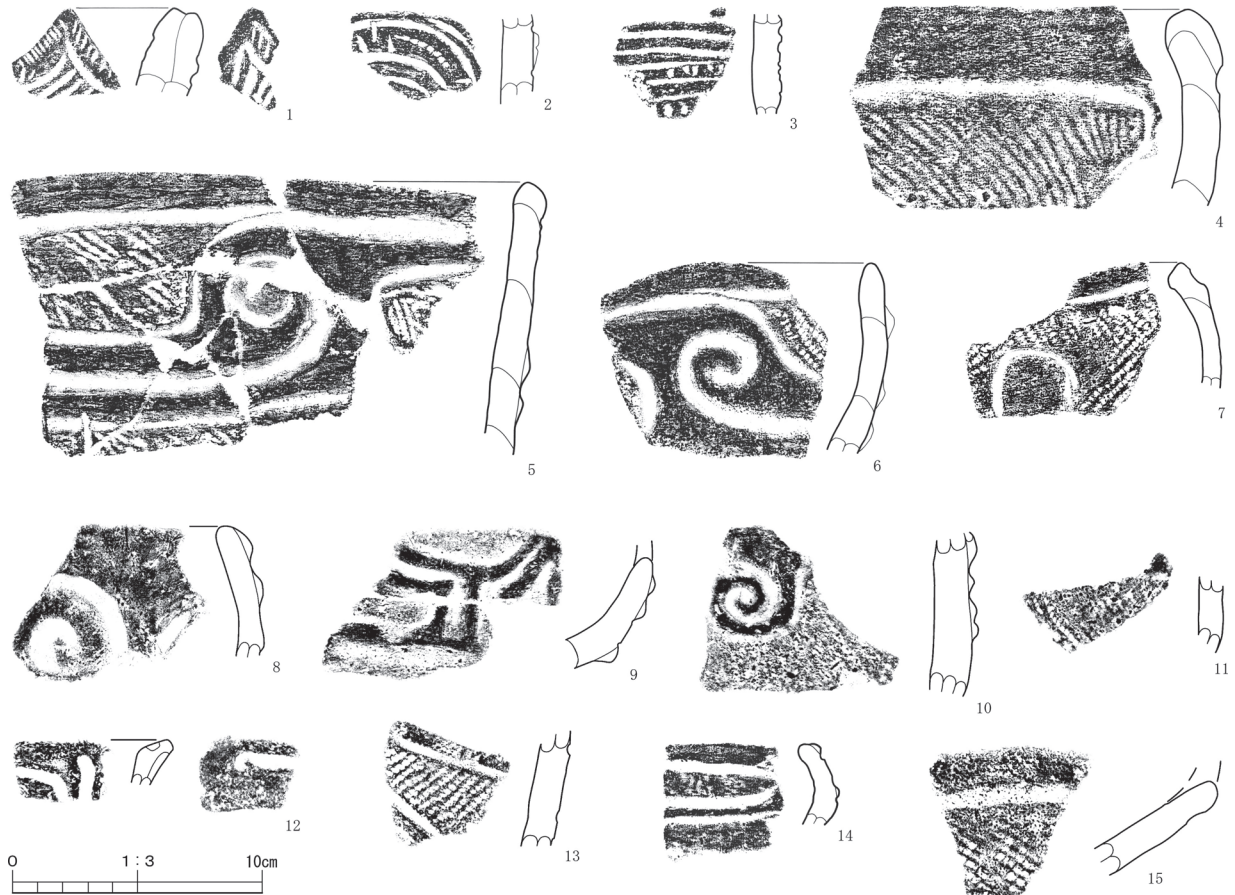
1	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線で区画し区画内を丁寧に磨消している。円形刺突文を縦位に連続して施す。D. 砂粒・角閃石・石英・赤色粒・片岩。E. 内-橙色。外-にぶい赤褐色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. 一括。
---	------------	--

出土遺物は大半が縄文土器・土師器であるが、瓦片が1点出土している。この瓦片については、この井戸から約130m東北東方向に離れた女池遺跡A地点の第5号溝跡から龍泉窯系青磁碗と共に、特徴が酷似した瓦片が出土している。更に第5号溝跡は、A地点から約40m離れたD地点でも延長部分が検出され西南西方向に、すなわちこの井戸の方向に向かって走っており、E地点の近傍まで延びている可能性もあろう。瓦葺きの同一の遺構から両地点へ分かれて出土したものとも考えられる。

本井戸跡の時期は、中世と考えられる。

5. その他の遺構・遺物（第30・31図、第11・12表）

第19号住居跡を切っているピット13から縄文土器が出土している。また、遺構外からも多くの縄文土器が出土している。主なものを図に示した。



第31図 遺構外出土遺物

第12表 遺構外出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 突起端部で外面周囲の隆帯上に斜位の刻みを有し、その内側と内面に沈線を施す。D. 砂粒・角閃石。E. 内-褐灰色。外-にぶい橙色。F. 口縁部片。G. 勝坂式。H. 一括。
2	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部隆帯上に交互刺突文と三角押文を隆帯脇に沈線を施す。D. 砂粒・角閃石・片岩。E. 内-にぶい黄褐色。外-にぶい褐色。F. 胴部片。G. 勝坂式。H. 一括。
3	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 横位沈線と沈線間に刻みを施す。D. 砂粒・片岩。E. 内-黄褐色。外-灰黄色。F. 胴部片。G. 勝坂式。H. 一括。
4	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による楕円区画内に単節RLの縄文を充鎮填。口縁部を肥厚させている。D. 砂粒・片岩・石英。E. 内-にぶい黄橙色。外-橙色。F. 口縁部片。G. 加曾利E式。H. 一括。
5	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 隆帯と沈線により渦巻文と楕円区画文を施す。区画内には縄文を充填。胴部には沈線による懸垂文を施文。D. 砂粒・角閃石・片岩。E. 内外-橙色。F. 口縁部~胴部片。G. 加曾利E式。H. 一括。
6	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 隆帯と沈線により渦巻文と区画文を施す。区画内には単節RLの縄文を充填。D. 砂粒・角閃石・片岩。E. 内外-にぶい黄褐色。F. 口縁部片。G. 加曾利E式。H. 一括。
7	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁端部とその下位に沈線を施す。地文は単節RLの縄文を横位と縦位に施文し、沈線内は磨消している。D. 砂粒・角閃石・石英。E. 内-にぶい黄褐色。外-にぶい黄橙色。F. 口縁部片。G. 加曾利E式。H. 一括。
8	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に隆帯による渦状の区画文。D. 砂粒・片岩・赤色粒・石英。E. 内-灰褐色。外-にぶい橙色。F. 口縁部片。G. 加曾利E式。H. 一括。

9	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に隆帯による区画文。D. 砂粒・片岩・石英。E. 内- 橙色。外- にぶい黄橙色。F. 頸部片。G. 加曽利E式。H. 一括。
10	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部に隆帯による渦文。D. 砂粒・石英・片岩。E. 内外- にぶい黄橙色。F 胴部。G. 加曽利E式。H. 一括。
11	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 隆帯による区画文。区画内に単節RLの縄文。D. 砂粒・片岩・チャート。E. 内- にぶい橙色。外- にぶい赤褐色。F. 胴部片。G. 加曽利E式。 H. 一括。
12	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部に沈線による区画文。内面、口唇部に沈線文。D. 砂粒・石英・片岩。E. 内外- 明褐色。F. 口縁部。G. 堀之内式。H. 一括。
13	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による区画文。区画内に単節RLの縄文を充填。D. 砂粒・石英・角閃石。E. 内外- にぶい黄褐色。F. 胴部片。G. 称名寺式。H. 一括。
14	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 隆帯と沈線による区画文。区画内に縄文を施文しているが不鮮明。D. 砂粒・角閃石・石英。E. 内外- にぶい黄褐色。F. 口縁部片。G. 加曽利E式。H. 一括。
15	縄文土器 深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 沈線による区画。区画に単節LRの縄文を充填。D. 砂粒・石英・片岩。E. 内外- にぶい褐色。F. 頸部片。H. 一括。



女池遺跡E地点 試掘調査遺構確認状況

第Ⅴ章 西富田新田遺跡C地点の調査

第1節 遺跡の概要

西富田新田遺跡は、JR高崎線本庄駅の南西約2.3kmの地点にあり、本庄台地北西部の平坦地に位置し、台地の北縁を形成する段丘崖からは約2.2kmの距離である。遺跡の範囲としては、西北西を長軸に取る楕円形に近く、長軸径270m、短軸径150m程度となっている。近年、住宅開発に伴って埋蔵文化財試掘調査も多く行われており、遺跡範囲の中央を東西に走る市道（第32図）を境に、北側は比較的遺構が多く、南側は遺構が少ない傾向が判明している。かつては西富田新田遺跡の範囲は南西側に100m程広がったが、試掘調査の結果等から遺構の存在しない範囲が確定し、遺跡の範囲は現在のものに縮小されている。遺跡付近の標高は65.4～66.0mを測り、南西から北東に向けてわずかに低くなる。遺跡の周辺に目を上げると、県道23号線（南大通り線）や国道462号線（金鑽通り線）の開発に先立ち、発掘調査等が行われ、古墳時代中期以降の大集落が検出されている。この地区全体の遺構密度の高さは特筆すべきであり、西富田新田遺跡もこの遺跡群の中で重要な位置を占めている。また、現在ではほぼ平坦なこの地域にも、埋没した河川の存在が推定されており、集落分布の偏在状況についても今後の調査により明らかになるだろう。西富田新田遺跡では過去に2度の発掘調査が行われている。昭和46年3月20日～5月16日にかけて分譲地造成工事に先立ってA地点として発掘調査が実施され、竪穴住居跡13軒等が検出された（本庄市史編集室 1976）。また、平成22年12月21日～平成23年1月5日にかけて分譲地造成工事に先立ってB地点として発掘調査が実施され、竪穴住居跡1棟等が検出された（太田・大熊 2011）。A・B地点いずれも、遺跡の範囲の西端に近い所である。

今回報告対象となるC地点では、個人住宅建設予定地の発掘調査であり、約8m×9mの建物部分と、約2m×1.4mの浄化槽部分の2箇所が調査対象となった。調査では、古墳時代中期の竪穴住居跡3軒と、古墳時代以降と考えられる溝跡2条、時期不明の土坑2基が検出された。住居跡はいずれもその大部分が調査区外となっているが、面積の割には出土土器は多い。カマド・貯蔵穴・支柱穴等の住居内施設は、第16号住居跡で貯蔵穴の一部が検出された以外には一切検出されなかった。2条検出された溝跡は古墳時代の住居跡を切っているため、それ以後のものと考えられるが、時期を特定する遺物は出土しなかった。土坑はいずれも他の遺構と切り合いがなく、時期を特定する遺物も出土しなかった。

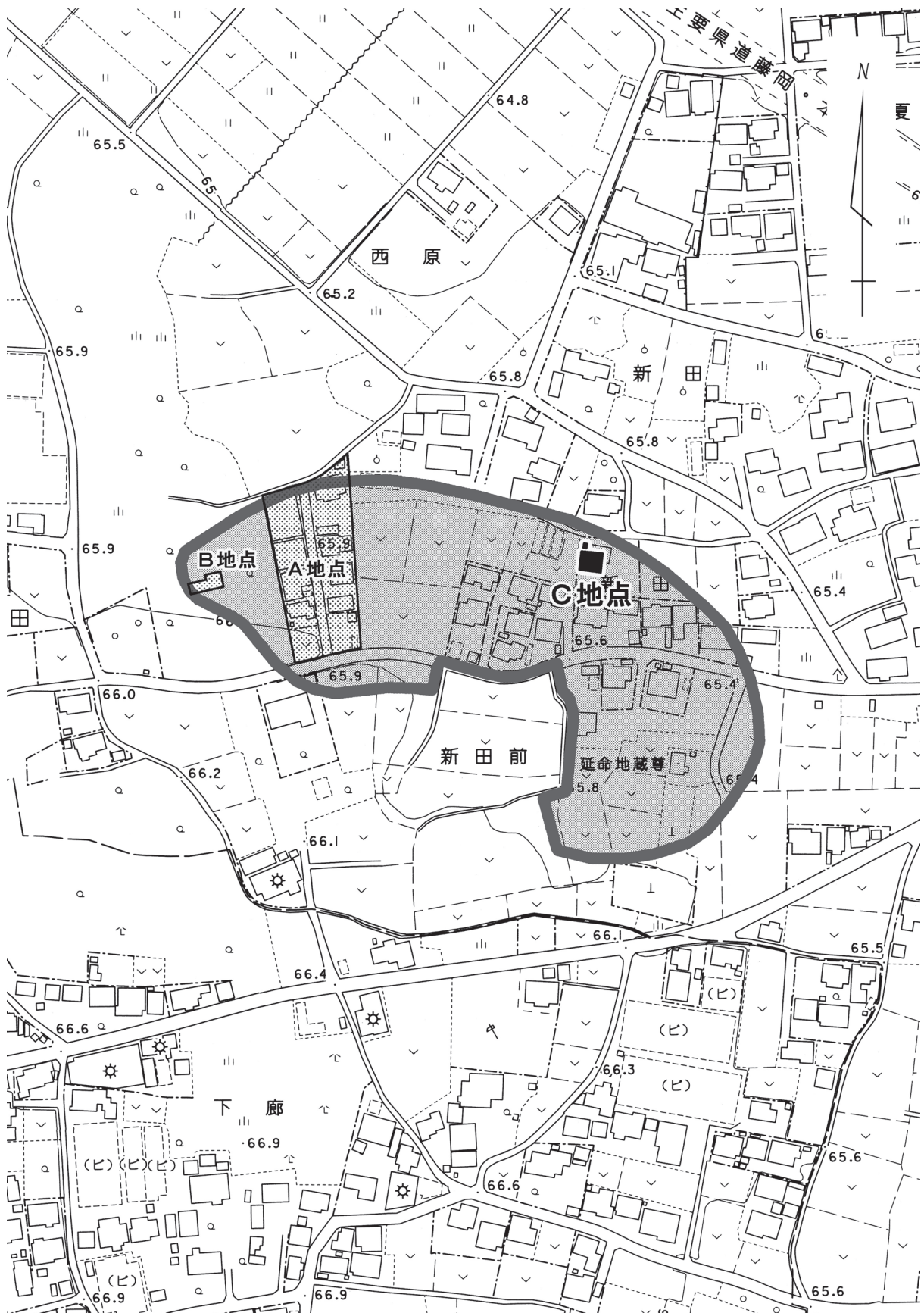
西富田新田遺跡C地点は、遺跡の範囲の北東境界に近い所であるが、小面積にもかかわらず過去の調査地点と比較しても遺構・遺物密度の高さが示され、西富田地区の遺跡の動態を明らかにする資料となろう。

第2節 検出された遺構と遺物

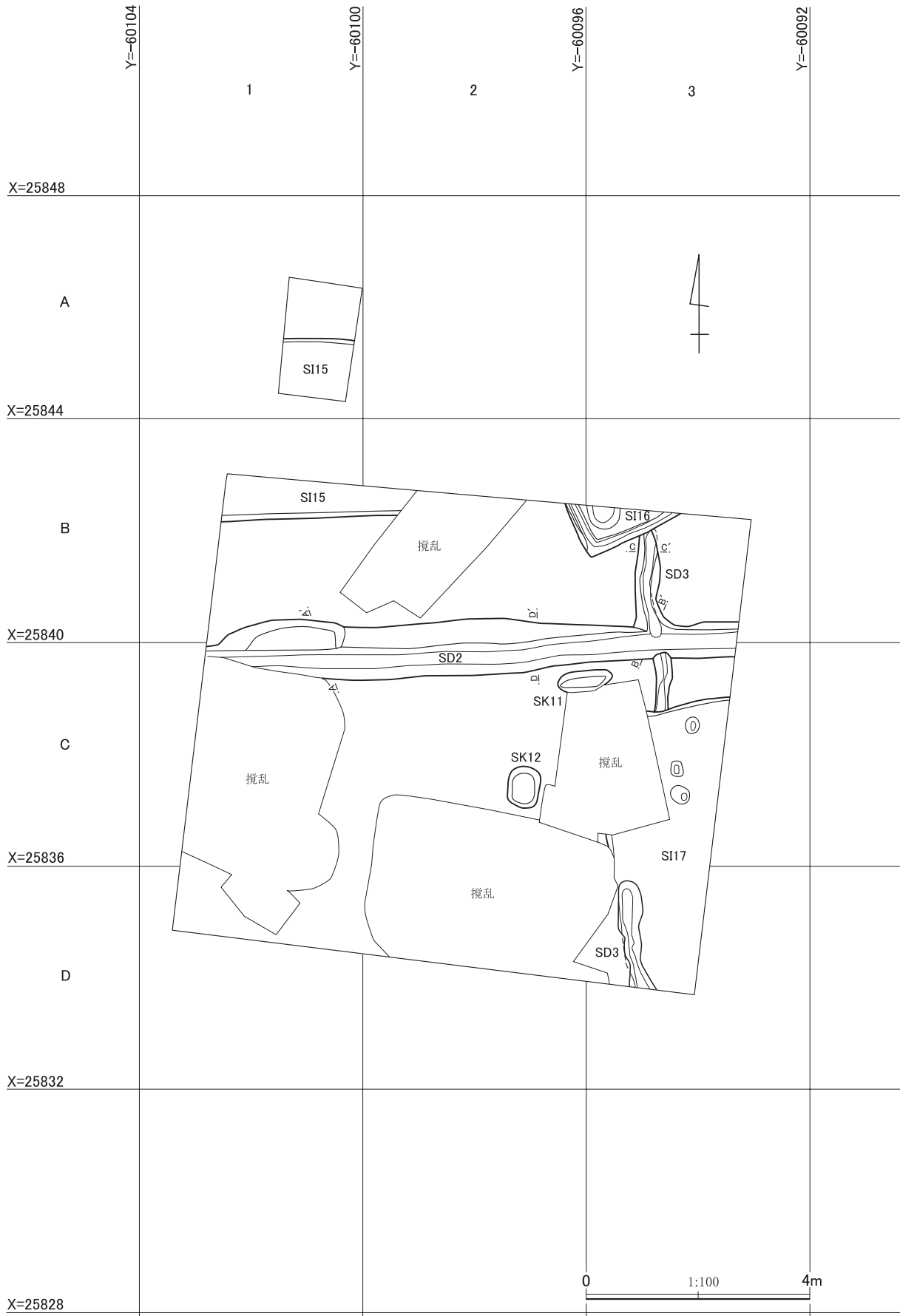
1. 竪穴住居跡

第15号住居跡（第34・35図、第13表）

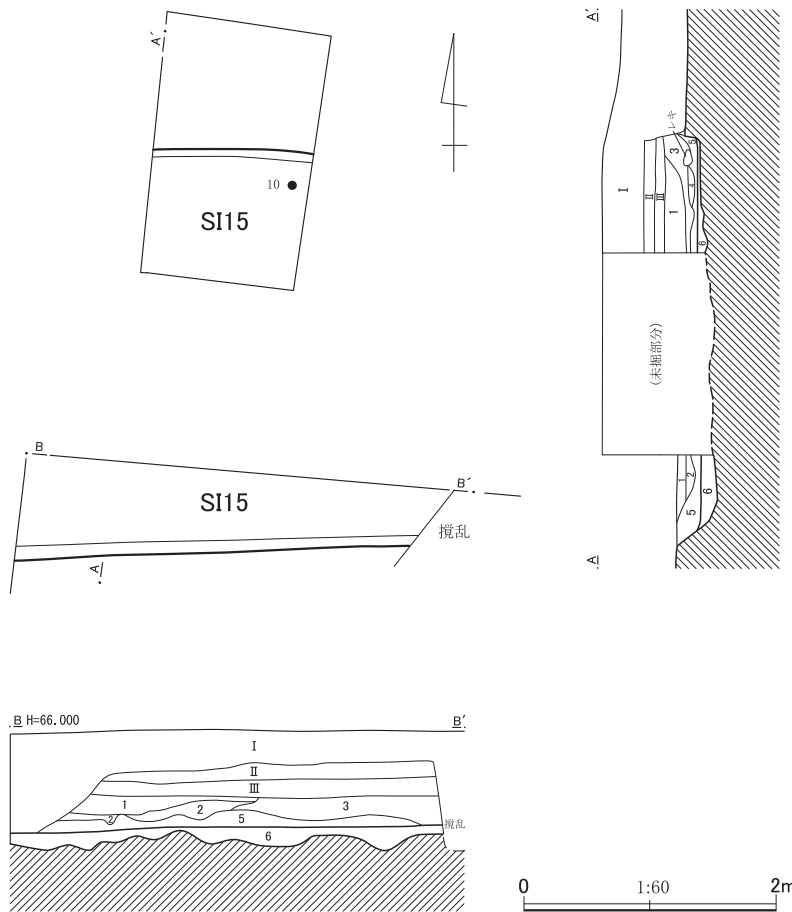
調査区の北西側、二つに分かれた調査区のうち、建物部分と浄化槽部分の両方にまたがって検出した遺構である。他の遺構と切り合いはなく、住居の南東隅と西側は攪乱に壊されている。北壁は浄化槽部分でのみ検出され、南壁は建物部分でのみ検出された。遺構確認面における平面形態は東西方向



第32図 西富田新田遺跡C地点位置図



第33図 西富田新田遺跡C地点全測図



基本土層説明

- 第Ⅰ層：平成時代に以前の建物を解体した際に攪乱された土層。
- 第Ⅱ層：暗褐色土層 江戸時代以降の耕作土層。As-Aを多く含む。縮まり有り。
- 第Ⅲ層：暗褐色土層 Ⅱ層以前の耕作土層。土器片を含む。色調はⅡ層よりやや暗い。
- 第Ⅳ層：にぶい黄褐色～暗褐色土層。縮まりやや有り。粘性普通。径1～2cmのローム土を含む。ローム層への漸移層。

第15号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 Ⅲ層に似るが、やや多くローム土を含む。
- 第2層：黒褐色土層 全体に黒味の強い層で2～5cm大の斑状の黒色土部分を多く含む。縮まりやや弱い。粘性やや有り。
- 第3層：暗褐色土層 Ⅱ・Ⅲ層よりやや黄色味強い。全体に斑状のローム土を含む。縮まりやや有り。粘性やや有り。
- 第4層：黒褐色土層 2層と同様。2～4層はほぼ同時期に堆積したもののか。
- 第5層：暗褐色土層 ベース土は3層に似る。径0.5～2cmのローム土を多く含む。
- 第6層：暗褐色土層 径1～3cmのローム土を多く含む。木の根の攪乱多い。縮まり有り。粘性有り。
[貼り床]

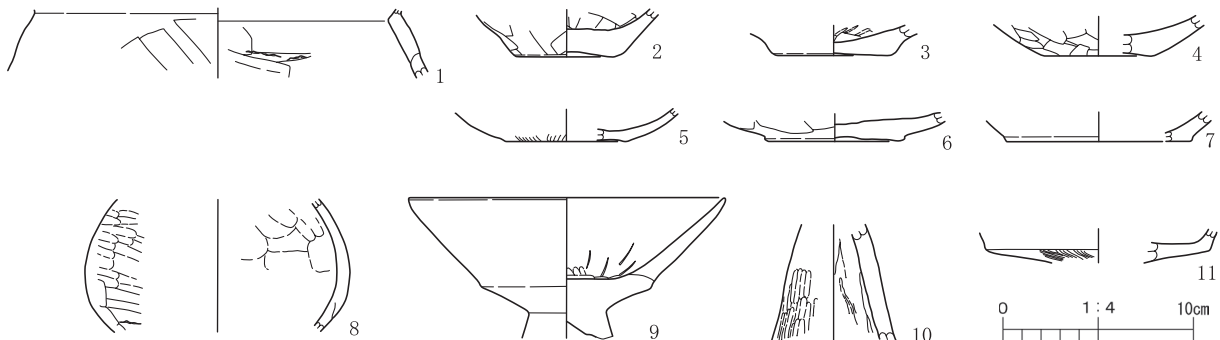
第34図 第15号住居跡平面図・断面図

に長い長方形を呈するものと考えられる。規模は南北が320cm、東西が340cm以上である。

壁溝は無く、床面の貼床はほぼ全体で厚さ3～18cm程度が確認されたが、調査範囲が狭いため溝状・土坑状等の掘り込みの有無は不明である。支柱穴・カマド・貯蔵穴等も検出されなかった。覆土は5層に分層され、人為的な埋め戻しの様子は見られなかった。

遺物は10が床面出土の高坏であり、他は覆土中より出土した。

本住居跡の時期は出土遺物等から古墳時代中期と考えられる。



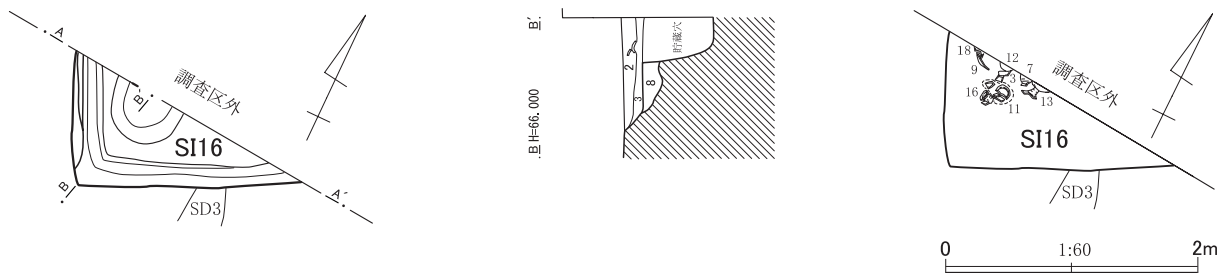
第35図 第15号住居跡出土遺物

第13表 第15号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 頸部径(19.4)。残存高 3.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ヘラケズリ。内面、板ナデ。D. 白色粒・石英・チャート。E. 外-にぶい赤褐色。内-赤褐色。F. 1/8。H. 南区。
2	甕	A. 底径 5.2。残存高 2.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ヘラケズリ。内面、ヘラケズリ。D. 黒色粒・石英。E. 外-にぶい橙色。内-赤褐色。G. 内底面に炭化物。H. 南区。
3	甕	A. 底径(6.0)。残存高 1.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ナデ。内面、ヘラケズリ。D. 石英・チャート。E. 外-橙色。内-明赤褐色。F. 1/5。H. 南区。
4	甕	A. 底径(6.0)。残存高 2.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ヘラケズリ。内面、ヘラケズリか。D. 軽石・赤色粒・石英・角閃石。E. 外-にぶい黄褐色。内-黒褐色。F. 1/5。H. 北区。
5	甕	A. 底径(6.4)。残存高 1.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ハケメ後ナデ。内面、ヘラナデ。D. 赤色粒・軽石。E. 外-暗赤褐色。内-明赤褐色。F. 1/4、2片有り。G. 内外面に炭化物。H. 南区。
6	壺	A. 底径(7.0)。残存高 1.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ヘラケズリ。内面、ヘラケズリか。D. 赤色粒・石英・軽石。E. 内外-にぶい橙色。F. 1/3。G. 断面~内底面に多量の炭化物。H. 南区。
7	壺	A. 底径(9.8)。残存高 1.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 内面、ナデか。D. 軽石・角閃石。E. 外-にぶい黄褐色。内-橙色。F. 1/8。G. 断面~外面に少量の炭化物。H. 南区。
8	埴	A. 残存高 7.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、胴上半ヨコヘラミガキ。胴下半ヨコヘラケズリ。内面、ユビナデ。D. 赤色粒・角閃石・雲母。E. 外-暗褐色。内-にぶい褐色。F. 胴部 1/5。G. 外面に炭化物。H. 南区。
9	高 坏	A. 口径(16.6)。残存高 7.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部一部ヘラケズリ。内面、口縁部ヘラナデ後ヨコナデ。体部ヘラミガキ。D. 赤色粒・軽石・角閃石・石英。E. 外-赤褐色。内-橙色。F. 口縁部~体部 1/4。H. 北区。
10	高 坏	A. 残存高 6.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、タテヘラミガキ。内面、シボリ目。D. 角閃石・石英・軽石・片岩。E. 外-明赤褐色。内-赤褐色。F. 脚柱部 1/4。H. №1(床直)。
11	高 坏	A. 体部径(11.8)。残存高 1.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ハケメ。内面、ヨコナデ。D. 石英・黒色粒。E. 内外-にぶい赤褐色。F. 1/8。H. 南区。

第16号住居跡 (第36・37図、第14表)

調査区の北辺東寄りで見出した遺構である。第3号溝跡が平面的には接しているが土層の切り合いは確認できなかった。確認できた範囲が狭いため平面形態は不明であるが、方形を呈するものと考えられる。

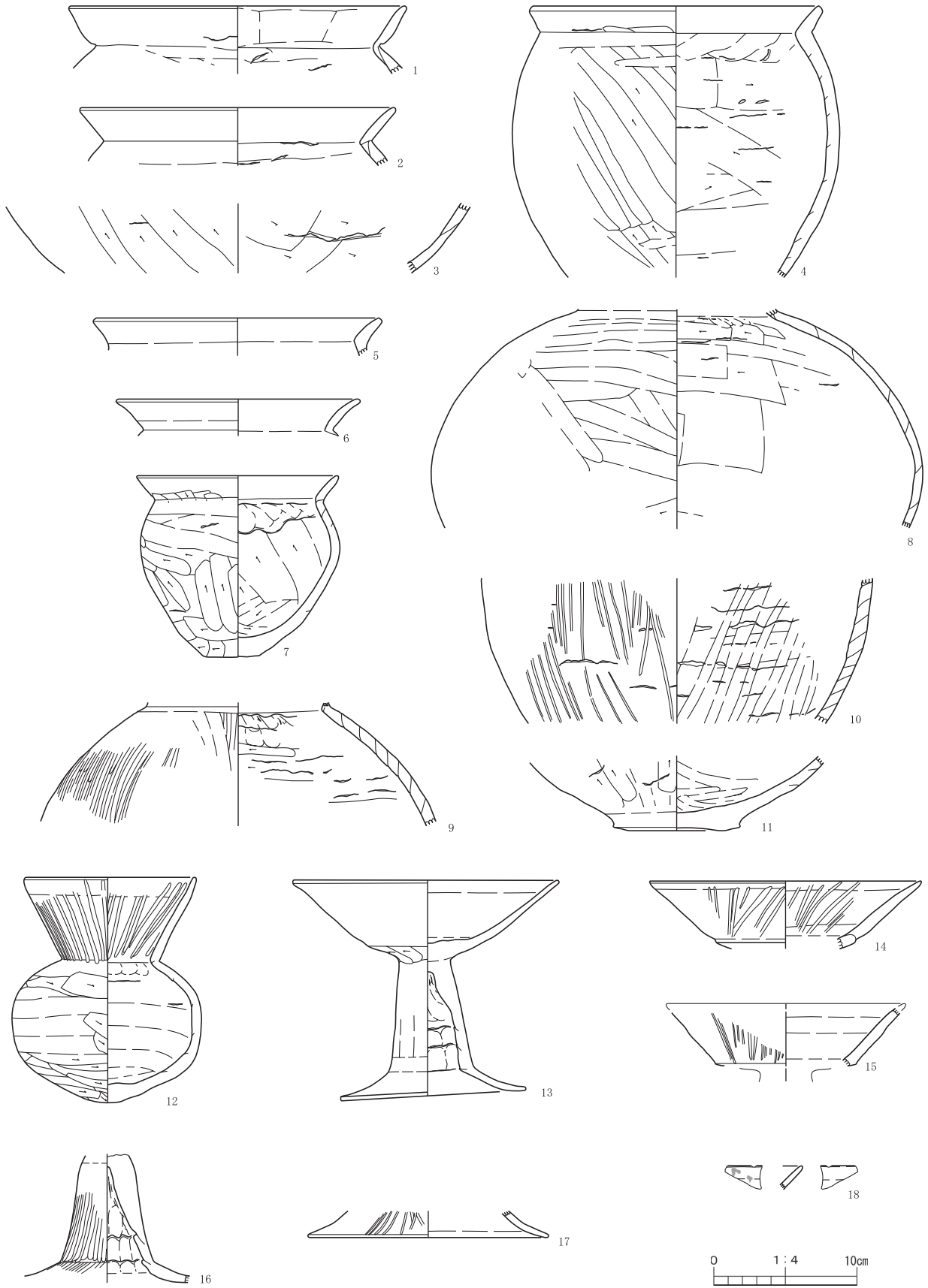


第16号住居跡土層説明

- 第A層：暗褐色土層 溝状遺構か。径0.5~1cmローム土を少量含む。締まり弱い。粘性普通。
- 第B層：黒褐色土層 溝状遺構か。第3号溝跡の一部の可能性あり。径2cmの礫1点含む。締まりやや有り。粘性やや有り。
- 第1層：暗褐色土層 径1~1.5cmローム土を均一に多く含む。締まり有り。粘性やや有り。
- 第2層：暗褐色土層 径1cmローム土少量含む。締まり有。粘性やや有り。
- 第3層：暗褐色土層 径1cmローム土を多く含む。締まり有り。粘性やや有り。

- 第4層：暗褐色土層 やや黒味強い。締まり有り。粘性有り。壁溝裏込めか。
- 第5層：暗褐色土層 径1~1.5cmローム土少量含む。締まりやや有り。粘性有り。
- 第6層：暗褐色土層 1~3cm大の炭化物含む。径1cm程度の棒状炭化物が複数か。締まりやや有り。粘性有り。
- 第7層：暗褐色土層 径0.5cmのローム土を少量含む。締まりやや有り。粘性有り。
- 第8層：暗褐色土層 径2~4cmローム土多く含む。締まり有り。粘性やや有り。[貼り床]

第36図 第16号住居跡平面図・断面図



第37図 第16号住居跡出土遺物

第14表 第16号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口径(23.6)。残存高4.8。B. 輪積み。C. 内外面口縁ヘラナデ。内外面磨滅。D. 片岩、赤色粒。E. 内外-橙色。F. 口縁破片。H. 確認面。
2	甕	A. 口径(22.0)。残存高4.1。B. 輪積み。C. 内外面口縁ヘラナデ。内外面磨滅。D. 片岩、赤色粒。E. 内外-橙色。F. 口縁破片。H. 一括。
3	甕 カ	A. 残存高4.9。B. 輪積み。C. 内外面胴部ケズリ。D. チャート、赤色粒。E. 外-明赤褐色。内-にぶい赤褐色。F. 胴部下位破片。H. №7。
4	甕	A. 口径(19.6)。残存高17.9。B. 輪積み。C. 外面口縁ナデ、胴部ナナメケズリ。内面口縁ナデ、胴部ヘラナデ。内外面磨滅。D. 赤色粒、絹雲母。E. 内外-明赤褐色。F. ほぼ完形。H. 東カクラン。
5	甕	A. 口径(20.0)。残存高2.7。B. 輪積み。C. 内外面口縁ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 外-明褐色。内-明赤褐色。F. 口縁破片。H. 一括。
6	甕	A. 口径(17.0)。残存高2.6。B. 輪積み。C. 内外面口縁ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-明褐色。F. 口縁破片。H. 確認面。
7	小型甕	A. 口径14.2。器高12.8。底径3.9。B. 輪積み。C. 外面口縁~胴部上位ナデ、胴部中~下位ケズリ。内面口縁ナデ、胴部ヘラナデ。D. 白色粒、赤色粒、絹雲母。E. 内外-橙色。F. ほぼ完形。H. №10。
8	壺	A. 残存高15.4。B. 輪積み。C. 外面胴部ナデ、内面胴部ヘラナデ。D. 白色粒、黒色粒、赤色粒。E. 内外-橙色。F. 胴部1/6。H. 一括。
9	壺	A. 頸部径(13.0)。残存高8.9。B. 輪積み。C. 外面胴部タテミガキ、内面胴部ヘラナデ、一部ケズリ。内外面磨滅。D. 黒色粒、赤色粒。E. 内外-橙色。F. 頸~胴部破片。H. №8、確認面。
10	壺	A. 残存高10.3。B. 輪積み。C. 外面胴部ナデ後タテミガキ、内面胴部ヨコケズリ後タテナデ。D. 片岩、赤色粒。E. 内外-明赤褐色。F. 胴部破片。H. 確認面。
11	壺	A. 底径(9.0)。残存高5.2。B. 輪積み。C. 外面胴部ナデ、タテケズリ、内面胴部指ナデ、底部ケズリ。D. 赤色粒、海綿骨針。E. 内外-明褐色。F. 底部破片。H. №1・2・5、一括。
12	罎	A. 口径12.0。器高15.9。B. 輪積み。C. 外面口縁~頸部タテミガキ、胴部ヨコケズリ・ヨコナデ、内面口縁~頸部タテミガキ、胴部ヨコナデ。D. 白色粒、赤色粒、絹雲母。E. 外-橙色。内-明赤褐色。F. ほぼ完形。H. №9。
13	高 坏	A. 口径18.6。器高15.2。底径13.0。B. 輪積み。C. 坏部外面ナデ、坏部下位ケズリ、内面横方向ヘラナデ。脚部外面タテナデ、内面指ナデ。内外面磨滅。D. 白色粒、絹雲母。E. 内外-橙色。F. 口縁~底部7/10。H. №11。
14	高 坏	A. 口径(19.0)。B. 輪積み。C. 内外面ナデ後タテ方向ミガキ。D. 黒色粒、赤色粒、絹雲母、海綿骨針。E. 内外-橙褐色。F. 坏部破片。H. 一括。
15	高 坏	A. 残存高4.1。B. 輪積み。C. 外面ナデ後タテ方向ミガキ、内面横方向ナデ。内外面磨滅。D. 黒色粒、赤色粒、絹雲母。E. 内外-明赤褐色。F. 坏部破片。H. 一括。
16	高 坏	A. 残存高9.1。B. 輪積み。C. 外面ナデ後タテ方向ミガキ、内面指ナデ。内外面磨滅。D. 白色粒、黒色粒、赤色粒。E. 内外-にぶい橙色。F. 坏部。H. №3、確認面。
17	高 坏	A. 底径(17.0)。残存高1.9。B. 輪積み。C. 外面ナデ後タテ方向ミガキ、内面横方向ナデ。D. 白色粒、絹雲母。E. 内外-明赤褐色。F. 口縁破片。G. 脚部裾の可能性あり。H. 一括。
18	(高) 坏カ	A. 残存高1.7。B. 輪積み。C. 内外面横方向ナデ。外面赤彩一部残存。D. 黒色粒、絹雲母。E. 内外-明赤褐色。F. 口縁部破片。H. №8。

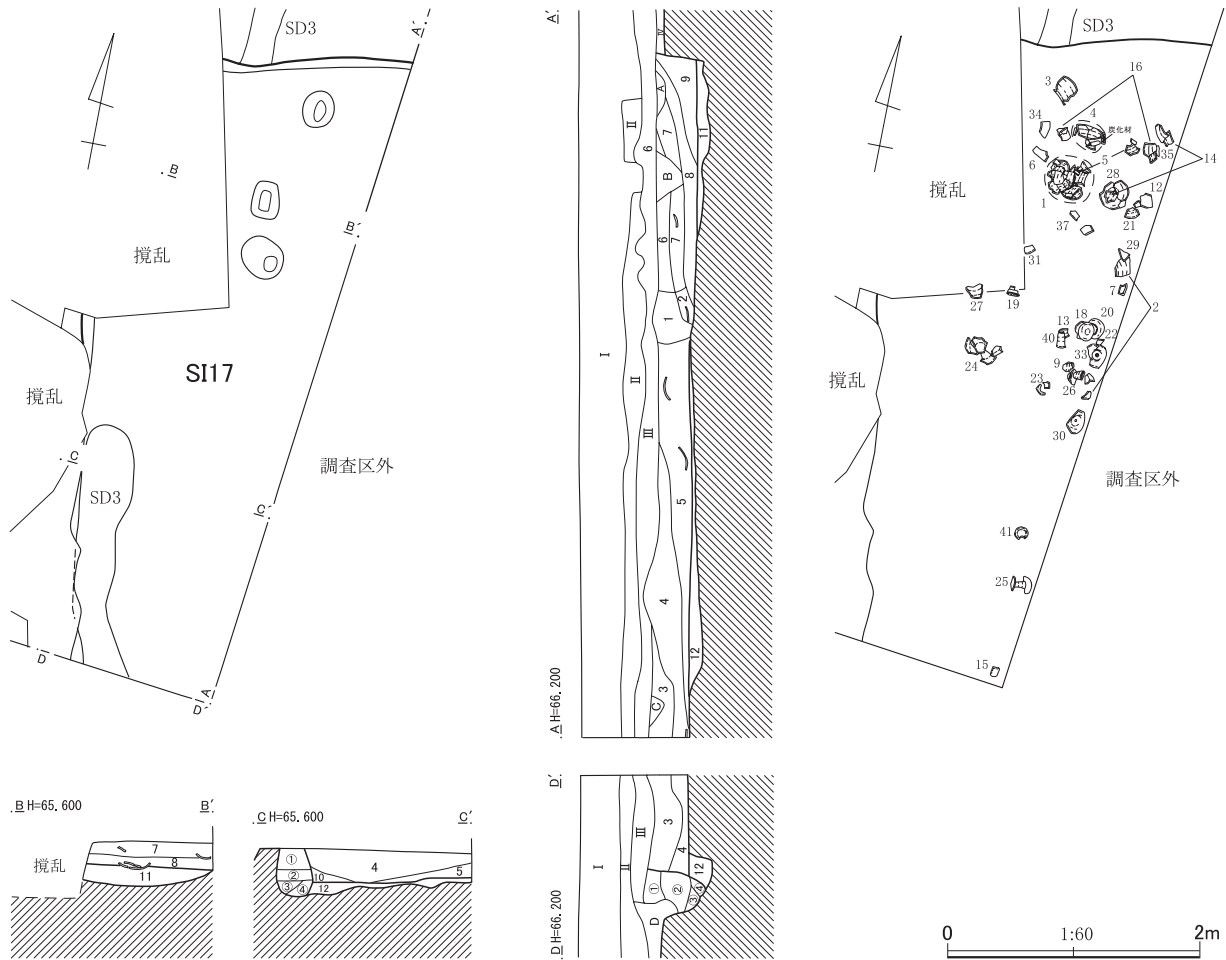
壁溝は確認できた範囲全体で検出され、その断面形状は箱型、底面はほぼ水平である。床面の貼り床はほぼ全体で厚さ10~15cm程度が確認されたが、調査範囲が狭いため溝状・土坑状等の掘り込みの有無は不明である。確認された床面のほぼ中央に貯蔵穴と考えられる掘り込み1基が検出された。貯蔵穴の規模は、一部が調査区外に出ているため全体は不明であるが、床面からの深さ55cm、直径60cm程度の円形であろうか。住居の覆土は7層に分層され、人為的な埋め戻しの様子は見られなかった。

遺物は、3、7、9、11~13、16、18が貯蔵穴中の、床面に近い高さで検出され、貯蔵穴に落ち込む様な状況であったと考えられる。他の遺物は貯蔵穴ごく近傍の住居覆土中より多く出土した。貯蔵穴中からは大型破片は出土しなかった。

本住居跡の時期は出土遺物等から古墳時代中期と考えられる。

第17号住居跡 (第38~41図、第15表)

調査区の東壁南寄りで検出した遺構である。攪乱に大きく切られている他に、第3号溝跡に北壁の一部および西壁の南側を切られている。遺構確認面における平面形態は方形を呈するものと思われる。



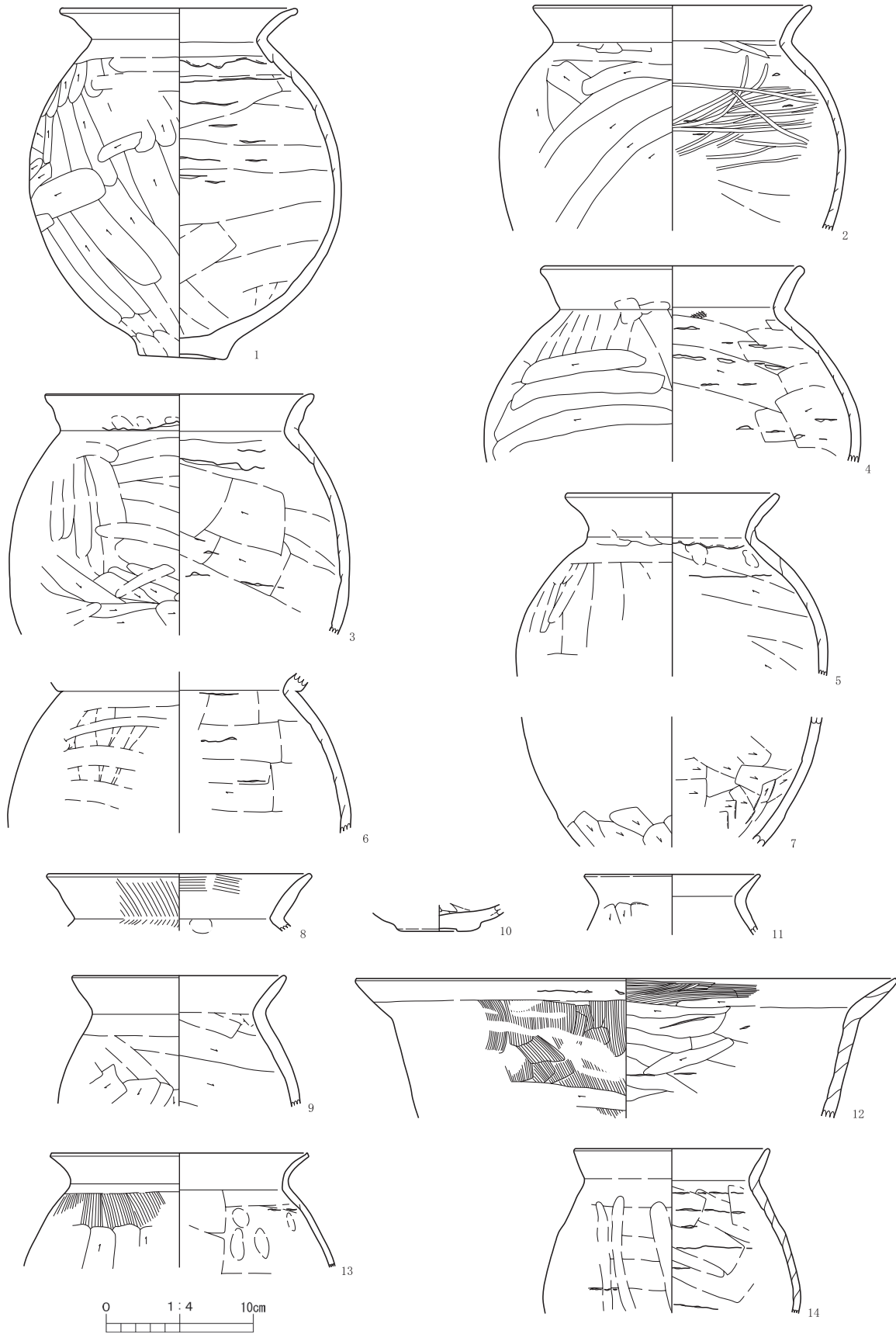
第17号住居跡土層説明

- 第A層：暗褐色土層 径0.1cmローム土を含む。締まりやや有り。粘性普通。
- 第B層：暗褐色土層 径0.5～1cmローム土を少量含む。径1～2cm黒色土を少量含む。締まりやや弱い。粘性やや有り。
- 第C層：暗褐色土層 径0.1cmローム土を含む。径1.5cm礫1点含む。締まり普通。粘性やや有り。
- 第D層：暗褐色土層 木の根による攪乱と思われる。
- 第1層：黒色～黒褐色土層 径0.1cmローム土を少量含む。径0.2cm炭化物を少量含む。締まりやや弱い。粘性有り。
- 第2層：暗褐色土層 径0.1～0.3cmローム土を含む。径0.5cm大の1層土を少量含む。
植物による攪乱の可能性あり。1層と8層は同一層の可能性あり。
- 第3層：褐色～暗褐色土層 径0.2～1cmローム土を多く含む。締まりやや強い。粘性有り。遺物は少ない。
- 第4層：暗褐色土層 径0.5～1.5cmローム土を少量含む。締まりやや有り。粘性有り。遺物は少ない。
- 第5層：暗褐色土層 全体に粉状のローム土を多く含む。径1cmローム土を少量含む。締まりやや弱い。粘性有り。
- 第6層：暗褐色～黒褐色土層 径1～3cm暗褐色土を含む。径0.1cmローム土を含む。締まり普通。粘性普通。
- 第7層：黄褐色土層 径0.5cm以下のローム土を極めて多く含む。土器は少ない。埋戻しの可能性もあるか。
- 第8層：黒褐色土層 径0.1cmローム土を少量含む。北側ではやや色調が薄い。南側では床面の直上に堆積。
土器を多く含む。5cm大の炭化物を含む（土器の下）。他に1cm以下の炭化物含む。
- 第9層：暗褐色土層 径0.1cmローム土を含む。締まり有り。粘性普通。
- 第10層：暗褐色土層 全体に粉状のローム土を多く含む。径0.5cmローム土を多く含む。締まりやや有り。粘性普通。
- 第11層：暗褐色土層 ローム土が多いが、径3～5cm黒色土を含む。炭化物を少量含む。締まり有り。粘性有り。[北側貼り床]
- 第12層：暗黄褐色土層 ローム土を主体とする。木の根等の暗褐色土を少量含む。締まり有り。粘性有り。[南側貼り床]

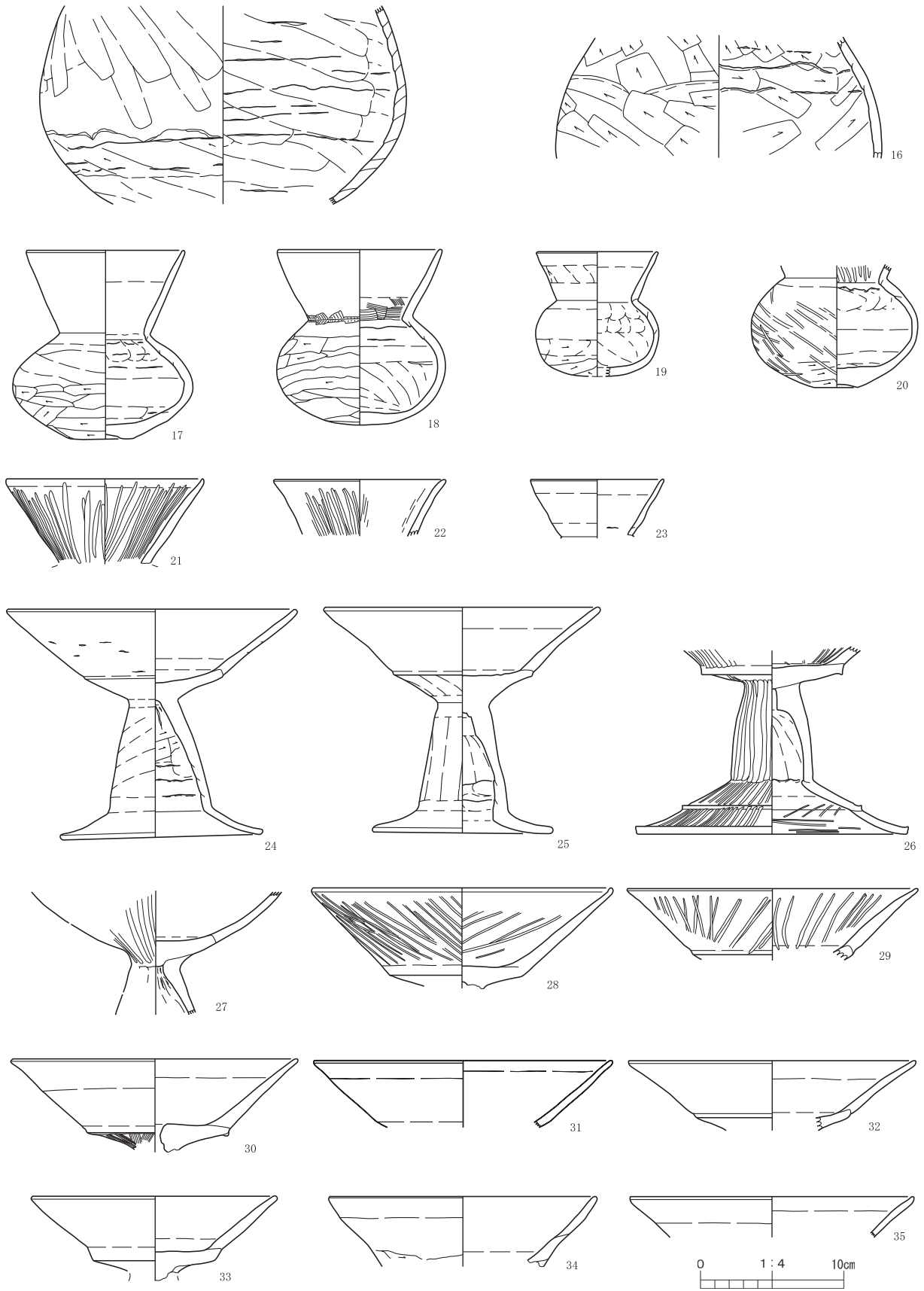
第3号溝跡土層説明

- 第①層：暗褐色土層 全体に粉状のローム土を多く含む。径1cmローム土を少量含む。径1～2cmの黒色土含む。締まりやや有り。粘性普通。
- 第②層：暗褐色土層 ①層より黒味強い。径0.2～0.5cmローム土を含む。締まりやや有り。粘性普通。
- 第③層：暗褐色～黄褐色土層 径0.5～2cmローム土を多く含む。明確に強く締まっており、ローム土を入れて踏み締めたような感じ。粘性有り。
- 第④層：暗褐色土層 径0.5cmローム土を少量含む。①～③層に比べて明確にローム土の混入が少ない。締まり有り。粘性有り。

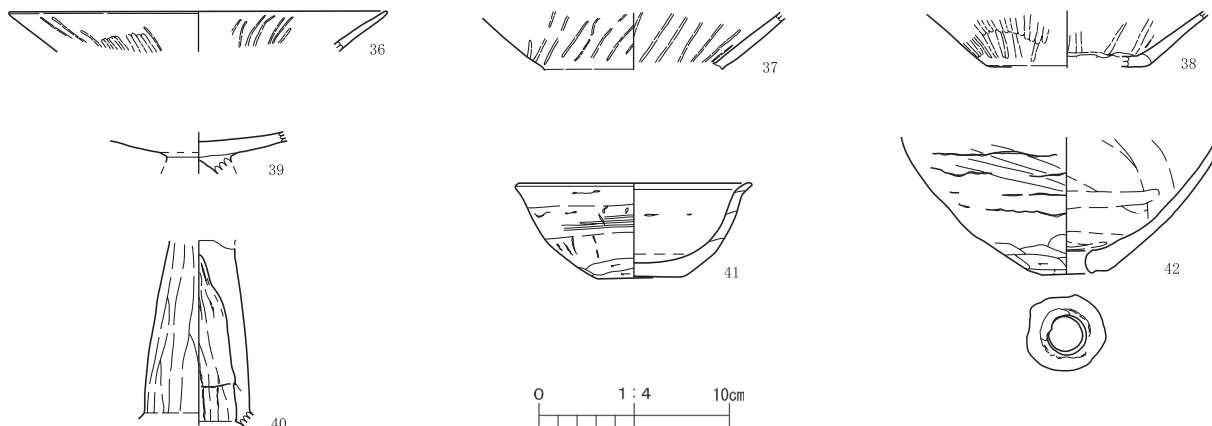
第38図 第17号住居跡平面図・断面図



第39図 第17号住居跡出土遺物（1）



第40図 第17号住居跡出土遺物（2）



第41図 第17号住居跡出土遺物（3）

規模は不明である。壁溝は検出されなかった。西壁の一部で溝状の掘り込みが見られたが、覆土の様子等から、この部分は第3号溝跡の延長部分である。

カマド・貯蔵穴等は検出されなかった。小ピットが3基検出されたが、いずれも浅いため主柱穴とは考えられない。

第15表 第17号住居跡出土遺物観察表

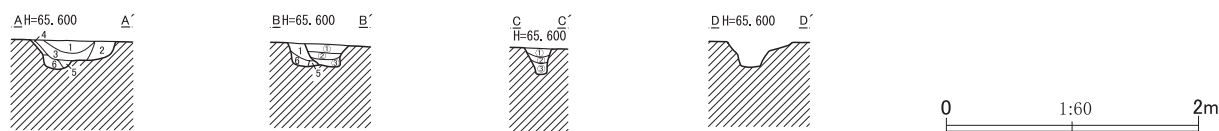
1	甕	A. 口径16.1。器高23.8。底径5.9。B. 輪積み。C. 外面口縁ナデ、胴部ナナメケズリ。底部ケズリ。内面口縁ヨコナデ、体部ナナメ方向ヘラナデ。D. 白色粒、黒色粒、赤色粒。E. 内外-明赤褐色。F. ほぼ完形。H. No.18。
2	甕	A. 口径(18.8)。残存高15.4。B. 輪積み。C. 外面口縁ナデ、胴部ナナメケズリ。内面口縁ヨコナデ、体部ナナメ方向ヘラナデ後ヨコ・ナナメミガキ。D. 白色粒、赤色粒。E. 内外-橙色。F. 口縁~胴部1/8。H. No.22・38、中央区。
3	甕	A. 口径(18.0)。残存高16.4。B. 輪積み。C. 外面口縁ナデ、胴部上位タテ・ヨコナデ、下位ヨコ・ナナメケズリ。内面口縁ヨコナデ、体部ナナメ方向ヘラナデ。D. 黒色粒、赤色粒。E. 内外-にぶい橙色。F. 口縁~胴部1/4。H. No.1、東カクラン。
4	甕	A. 口径(17.6)。残存高13.3。B. 輪積み。C. 外面口縁ナデ、胴部ナデ後ヨコケズリ。内面口縁ヨコナデ、体部ヨコ方向ヘラナデ。D. 白色粒、赤色粒。E. 外-橙色。内-にぶい赤褐色。F. 口縁~胴部1/7。G. 内面頸部に布目圧痕。H. No.16。
5	甕	A. 口径14.3。残存高12.5。B. 輪積み。C. 外面口縁ナデ、胴部縦方向ヘラナデ。内面口縁ヨコナデ、体部ナナメ方向ヘラナデ。D. 結晶片岩、白色粒。E. 内外-にぶい赤褐色。F. 口縁~胴部1/8。H. No.7・18。
6	甕	A. 残存高11.0。B. 輪積み。C. 外面タテ・ヨコ方向ナデ。内面ヨコ方向ヘラナデ。D. 黒色粒、赤色粒。E. 外-黒褐色。内-明赤褐色。F. 口縁部破片。G. 小片のため径は不確定。H. No.3。
7	甕	A. 残存高8.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、下部ヘラケズリ。内面、ヘラケズリ。D. 赤色粒・石英・チャート。E. 内外-黒褐色。F. 1/4。H. No.23ほか。
8	甕	A. 口径(18.0)。残存高3.9。B. 輪積み。C. 外面タテハケ後ナデ。内面口縁ヨコハケ後ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-橙色。F. 口縁部破片。G. 小片のため口径は不確定。H. 中央区。
9	甕	A. 口径(14.4)。B. 輪積み。C. 外面口縁~胴部上位ナデ、胴部ナナメケズリ。内面口縁ヨコナデ、体部横方向ヘラナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-橙色。F. 口縁~胴部1/8。H. No.36、中央区、南区、東カクラン。
10	甕	A. 底径5.7。残存高1.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 内面、ナデ。D. 白色粒・石英・片岩。E. 外-褐色。内-黒褐色。H. 黒色土層南区。
11	小型甕	A. 口径(11.8)。残存高3.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヨコヘラケズリ。D. 赤色粒・軽石・角閃石。E. 内外-黒褐色。F. 1/5。G. 口縁部に少量の炭化物。H. 黒色土層南区。
12	甗	A. 口径(37.0)。残存高9.5。B. 輪積み。C. 外面タテ・ナナメハケ、ヨコケズリ。内面口縁ヨコハケ、体部ヨコケズリ。D. 白色粒、絹雲母。E. 内外-明赤褐色。F. 口縁部破片。G. 小片のため口径は不確定。H. No.12。
13	壺	A. 口径(17.4)。残存高7.8。B. 輪積み。C. 外面口縁ナデ、胴部タテハケ・タテケズリ。内面口縁ヨコナデ、体部横方向ヘラナデ。D. 結晶片岩、黒色粒。E. 内外-にぶい橙色。F. 口縁~胴部1/8。H. No.30、北区黒色土層。

14	壺	A. 口径(13.0)。残存高11.2。B. 輪積み。C. 外面口縁ナデ、胴部ヨコナデ後一部タテナデ。内面口縁ヨコナデ、体部ナナメ方向ヘラナデ。輪積み痕顕著。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外- 橙色。F. 口縁~胴部1/6。H. No.9・16・27。
15	壺	A. 胴径(10.6)。残存高13.9。B. 輪積み。C. 外面口縁部ナナメ方向ヘラナデ、胴部下位接合部剥落。内面ナナメ方向ヘラナデ、輪積み痕顕著。D. 結晶片岩、黒色粒、白色粒。E. 内外- 赤褐色。F. 胴部1/5。H. No.34。
16	壺	A. 残存高8.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ヘラケズリ。内面、輪積み痕をヘラケズリ。D. 白色粒・石英・角閃石。E. 内外- 赤褐色。F. 1/2。G. 外面に少量炭化物。H. No.5、No.10、2片有り。
17	罎	A. 口径(11.0)。器高13.5。底径4.5。B. 輪積み。C. 外面口縁~胴部ナデ、胴部下位ヨコケズリ、内面口縁ナデ、胴部指ナデ。内外面磨滅。D. 白色粒、黒色粒、赤色粒。E. 内外- にぶい橙色。F. 口縁~底部3/4。H. 中央区、黒色土層試掘分。
18	罎	A. 口径11.4。器高12.4。底径4.6。B. 輪積み。C. 外面口縁~胴部上位ナデ、頸部ハケ一部あり、胴部ヨコケズリ、内面口縁ナデ、頸部ヨコハケ、胴部指ナデ。D. 結晶片岩、白色粒、赤色粒。E. 内外- にぶい黄橙色。F. ほぼ完形。H. No.31。
19	罎	A. 口径(8.4)。器高8.8。丸底。B. 輪積み。C. 外面口縁~胴部ナデ、胴部下位ヨコケズリ、内面口縁ナデ、胴部指ナデ。内外面磨滅。D. 結晶片岩、白色粒、赤色粒。E. 内外- 橙色。F. 口縁~底部4/5。H. No.25、中央区。
20	罎	A. 底径3.0。残存高8.7。B. 輪積み。C. 外面胴部ケズリ後ナナメミガキ、内面頸部ナデ後タテミガキ、胴部指ナデ。外面磨滅。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外- にぶい黄褐色。F. 頸部~胴部3/4。H. No.32。
21	罎	A. 口径(13.8)。残存高6.0。B. 輪積み。C. 内外面ナデ後タテミガキ。D. 黒色粒、赤色粒。E. 内外- 明赤褐色。F. 口縁部1/6。H. No.13。
22	罎	A. 口径(12.0)。残存高4.0。B. 輪積み。C. 外面ナデ後タテミガキ、内面ナデ後タテミガキ(不明瞭)。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外- にぶい橙色。F. 口縁部破片。H. No.34。
23	罎	A. 口径9.2。残存高4.1。B. 輪積み。C. 内外面ナデ。D. 赤色粒。E. 内外- 橙色。F. 口縁部破片。H. No.40。
24	高 坏	A. 口径20.3。器高16.1。底径(14.0)。B. 輪積み。C. 坏部外面ナデ、内面横方向ヘラナデ。脚部外面ナナメ方向指ナデ、内面ヨコケズリ、指ナデ。D. 白色粒、黒色粒、赤色粒。E. 内外- 赤褐色。F. 口縁~底部4/5。H. No.28、中央区、北区黒色土層。
25	高 坏	A. 口径(19.2)。器高15.9。底径12.5。B. 輪積み。C. 坏部外面ナデ、内面横方向ヘラナデ。脚部外面タテナデ、内面指ナデ。D. 白色粒、黒色粒、赤色粒。E. 内外- 橙色。F. 口縁~底部3/5。H. No.42、中央区、南区。
26	高 坏	A. 底径(19.0)。残存高13.2。B. 輪積み。C. 外面坏部~脚部タテミガキ、内面坏部タテミガキ、脚部指ナデ、裾部ナデ、一部横方向ミガキ。D. 白色粒、黒色粒、赤色粒。E. 外- にぶい橙色。内- 赤褐色。F. 坏部体~底部1/2。H. No.8・35。
27	高 坏	A. 残存高8.8。B. 輪積み。C. 外面タテミガキ、内面ナデ。内外面磨滅。D. 結晶片岩、赤色粒。E. 内外- 明赤褐色。F. 坏底部~脚部2/3。H. No.26、中央区。
28	高 坏	A. 口径(21.0)。残存高7.1。B. 輪積み。C. 内外面ナデ後ナナメ方向ミガキ。内外面磨滅。D. 結晶片岩、白色粒。E. 外- 明赤褐色。内- 橙色。F. 坏部1/2。H. No.17。
29	高 坏	A. 口径(20.4)。残存高5.0。B. 輪積み。C. 内外面ナデ後タテ方向ミガキ。D. 赤色粒、絹雲母。E. 内外- 明赤褐色。F. 口縁破片。H. No.21。
30	高 坏	A. 口径(20.0)。残存高6.6。B. 輪積み。C. 外面ヨコナデ、坏部底面ハケ、内面ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒、赤色粒。E. 外- にぶい橙色。内- 明赤褐色。F. 坏部1/3。G. 坏部中央に穿孔あり。H. No.39。中央区。
31	高 坏	A. 口径(21.0)。残存高5.7。B. 輪積み。C. 内外面ヨコナデ。D. 黒色粒、赤色粒。E. 外- にぶい明赤褐色。内- 赤褐色。F. 口縁破片。H. No.24。
32	高 坏	A. 口径(20.4)。残存高4.9。B. 輪積み。C. 内外面ヨコナデ。D. 白色粒、赤色粒。E. 内外- 明赤褐色。F. 口縁破片。H. 中央区、南区黒色土層。
33	高 坏	A. 口径17.1。残存高6.0。B. 輪積み。C. 内外面ヨコナデ。D. 結晶片岩、白色粒。E. 内外- 橙色。F. 坏部1/3。H. No.33。
34	高 坏	A. 口径(18.8)。残存高4.9。B. 輪積み。C. 外面体部ナデ、下位ケズリ、内面ヨコナデ。D. 結晶片岩、白色粒。E. 内外- 明赤褐色。F. 口縁破片。H. No.2。
35	高 坏	A. 口径(19.8)。残存高2.9。B. 輪積み。C. 内外面ヨコナデ。D. 結晶片岩、黒色粒。E. 内外- 明赤褐色。F. 口縁破片。H. No.11。
36	高 坏	A. 口径(20.0)。残存高2.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ヨコナデ後ヘラミガキ。内面、ヨコナデ後ヘラミガキ。D. 黒色粒・赤色粒・石英。E. 内外- にぶい赤褐色。F. 1/8。H. 中央区。
37	高 坏	A. 残存高3.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ヨコナデ後ヘラミガキ。内面、ヨコナデ後ヘラミガキ。D. 石英・白色粒。E. 内外- 赤褐色。F. 体部1/5。H. No.19。
38	高 坏	A. 残存高3.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ヘラミガキ。内面、ヘラナデ。D. 赤色粒・白色粒・石英。E. 内外- にぶい褐色。F. 体部1/5。G. 外面に少量の炭化物。H. 中央区。
39	高 坏	A. 残存高2.2。B. 輪積み。C. 内外面ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 外- 明赤褐色。内- にぶい赤褐色。F. 坏底部~脚部破片。H. 一括。
40	高 坏	A. 残存高9.8。B. 輪積み。C. 外面タテ方向ヘラナデ、内面指ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外- 明赤褐色。F. 脚部1/3。H. No.29。
41	坏	A. 器高5.1。口径12.2。底径4.5。B. 輪積み。C. 外面口縁~体部ナデ一部ヨコミガキ、体部下位ヨコケズリ、底部ケズリ後ナデ。内面ナデ。D. 白色粒、絹雲母。E. 内外- にぶい橙色。F. 完形。H. No.41。
42	有 孔 鉢	A. 底径4.6。残存高7.4。B. 輪積み。C. 外面胴部ナデ、胴部下位ヨコケズリ、輪積み痕顕著。内面ヘラナデ。底部穿孔。D. 結晶片岩、白色粒、海綿骨針。E. 内外- にぶい橙色。F. 胴~底部1/5。H. 中央区、北・南区黒色土層。

覆土は概ね10層に分層され、他にA～Dの攪乱と思われる土層が見られた。堆積の特徴としては、主に北から自然堆積で埋まり、ほぼ埋まり切ったところで新たに土坑状もしくは溝状の掘削が行われ、その後1, 2層が堆積したものと考えられる。あるいは1, 2層は第3号溝の分岐部分の可能性もあろうか。なお、5層と7層は色調が似通っており、1, 2層に切られてはいるが同一の層とも考えられる。

遺物は、5層の下層部分と8層中で多く出土している。総体としては、住居北半の8層中の遺物は床面より3～10cm程度浮いており、破片遺物が多いため、これらの遺物は8, 9層が埋まる頃に投げ込まれたものと考えられる。住居南半の5層中の遺物は床面に近く、形が遺存しているものが多い。完形に近い土器の中には住居廃絶時に遺されたものも含まれるかもしれないが、出土状況から明確に床面直上と捉えられるものはほとんどなかった。また、北側の8層中には炭化材・炭化粒子群が、主に土器の下側で数か所で検出された。意図的なものかどうかは不明だが、9層が埋まり始めた後に、土器が投げ込まれる直前に炭化物が散布されたものと推定される。

本住居跡の時期は、出土遺物等から古墳時代中期と考えられる。



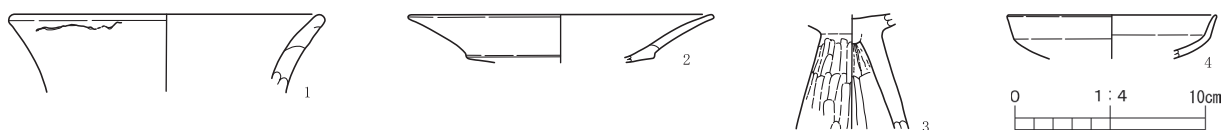
第2号溝跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層 径0.5～1cmのローム土を少量含む。縮まりやや有り。粘性普通。
- 第2層：暗褐色土層 径1～3cmローム土を多く含む。植物の攪乱か。縮まりやや弱い。粘性普通。
- 第3層：暗褐色土層 径0.1cmローム土を多く含む。縮まり普通。粘性やや有り。
- 第4層：暗褐色～黄褐色土層 径1cmローム土を含む。5層に似る。同一層か。縮まり有り。粘性やや有り。
- 第5層：黄褐色土層 径1～3cmのローム土を主体とする。6層土が隙間に入る。縮まり有り。粘性やや有り。
- 第6層：暗褐色土層 径0.1cmローム土を少量含む。縮まりやや有り。粘性やや有り。

第3号溝跡土層説明

- 第①層：暗褐色土層 径0.5cmローム土を含む。縮まり普通。粘性やや弱い。
- 第②層：黒褐色土層 径0.3cmローム土を少量含む。縮まりやや弱い。粘性やや弱い。
- 第③層：暗褐色土層 径1～2cmローム土を多く含む。縮まり普通。粘性普通。

第42図 第2・3号溝跡断面図



第43図 第2号溝跡出土遺物

第16表 第2号溝跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口径(16.2)。残存高4.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面、ヨコナデ。D. 赤色粒・チャート・軽石。E. 外-にぶい赤褐色。内-明赤褐色。F. 1/8。H. 中央区。
2	高 坏	A. 口径(16.0)。残存高2.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。D. 石英・角閃石・片岩・軽石。E. 内外-橙色。F. 1/8。H. 中央区。
3	高 坏	A. 残存高6.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、タテヘラミガキ。内面、シボリ目後ヨコヘラケズリ。D. 軽石・チャート・角閃石。E. 外-赤褐色。内-にぶい橙色。H. 中央区。
4	坏	A. 口径(11.0)。残存高2.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリか。内面、ヨコナデか。D. 赤色粒・石英・角閃石。E. 内外-橙色。F. 1/10。H. 中央区。

2. 溝跡

第2号溝跡（第33・42・43図、第16表）

調査区中央やや北寄りで検出した遺構である。第3号溝と攪乱に切られている。ほぼ東西方向に走行しており、東西の調査区外へ延びている。溝幅は60cm～100cm程度、長さは950cm以上である。覆土の観察からは一度埋まった後に掘り直した痕跡が認められる。先に掘られた溝は、比較的狭く深いもので、断面は逆台形である。その溝が埋まった後に、やや浅い丸底の溝が掘り直されている。両者はほぼ同じ経路であり、地割目的等の意図的な掘り直しであろう。流水の痕跡は認められなかった。溝内施設は検出されなかったが、西側の調査区際に近い所では、掘り直しの溝が浅いため結果的にテラス状になっている。古墳時代の土器片が出土するが、周辺の住居跡からの流れ込みと考えられ、遺構の時期は古墳時代以降としか言えない。

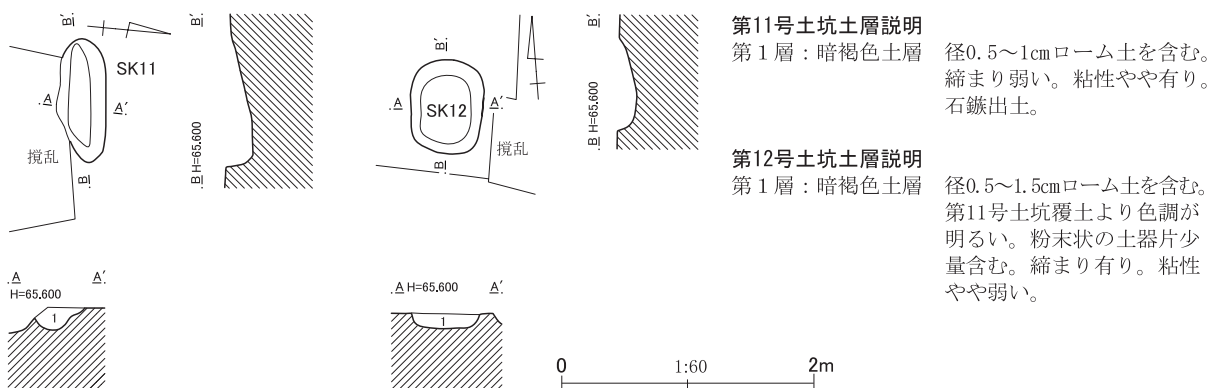
第3号溝跡（第33・42図）

調査区中央やや東寄りで検出した遺構である。第2号溝跡と第17号住居跡を切っている。なお、第16号住居跡の壁面や貼床下には溝の痕跡が全く見られないことから、第16号住居跡とは切り合い関係が無いことが確実である。ほぼ南北方向に走行しており、南側の調査区外へ延びている。溝幅は30cm～50cm程度、長さは800cm以上である。本溝跡も第2号溝跡と同じく掘り直しが行われており、特に北側については第③層が堆積した後に掘り直され、その後に第①層・第②層が堆積した可能性がある。また、南側の西壁と北側の東壁と北端については明瞭にオーバーハング状に掘り込まれている。覆土中にはローム土のブロックをやや多く含むが、オーバーハング部分の地山が崩れたためであろう。また、その結果であろうか、地山に含まれる1～2cm大の小礫がやや多く含まれる点が特徴的である。第2号溝との関係については、底面の深さや溝幅がほぼ等しいことと、ほぼ東西・南北に方位を取っているが、高い精度で直交していることなどから比較的近い時期に掘削された溝の可能性はある。

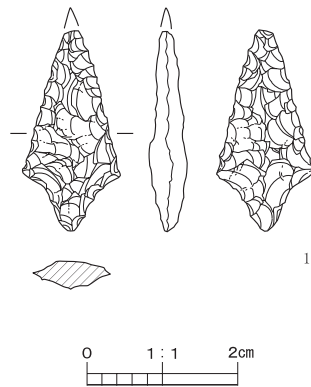
3. 土坑

第11号土坑（第44・45図、第17表）

調査区中央の東寄りで検出した遺構である。南側の縁を攪乱に切られている。遺構確認面における平面形態は東西方向に長い不整形である。規模は東西が100cm、南北が40cm程度である。遺物は石鏃が1点出土したが、遺構の時期は不明である。



第44図 第11・12号土坑平面図・断面図



第45図 第11号土坑出土遺物

第17表 第11号土坑出土遺物観察表

1	石 鏃	A. 長さ(2.66)。幅(1.3)。厚さ(0.5)。重さ1.08。B. 凹基無茎。D. チャート。F. 先端部欠損。
---	-----	---

第12号土坑 (第44図)

調査区中央付近で検出した遺構である。遺構確認面における平面形態は隅丸長方形である。規模は東西が75cm、南北が60cm程度である。遺構の時期は不明である。

4. その他の遺物 (第46図、第18表)

第17号住居跡の北西隅を切る攪乱から土器片が出土した。切り合い関係から、第17号住居跡の遺物が混入した可能性がある。



第46図 東攪乱出土遺物

第18表 東攪乱出土遺物観察表

1	甕	A. 底径(6.6)。残存高 2.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、胴部ヘラケズリか。底部ヘラケズリ。内面、放射状にヘラナデ。D. 角閃石・石英・片岩・軽石。E. 内外-赤褐色。F. 1/3。G. 外面に炭化物。H. 東カクラン内SK。
2	小型 甕	A. 口径(12.8)。残存高 2.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面、ヨコナデ。D. 石英・角閃石。E. 外-黒褐色。内-にぶい褐色。F. 1/12。H. 東カクラン。
3	壺	A. 底径(5.4)。残存高 3.0。B. 粘土紐積み上げ。焼成後に底部穿孔か。C. 外面、胴部タテヘラケズリ。内面、指ナデ。D. 赤色粒・角閃石・軽石。E. 内外-明赤褐色。F. 1/4。H. 東カクラン。

第Ⅵ章 まとめにかえて

長沖古墳群第202号墳は、今回新たに発見された古墳である。第3図に示したように、長沖古墳群第1号墳・第2号墳とはほぼ直線状に並んでいる。第1号墳は主体部が調査されており、竪穴系主体部の根石が記録されている。出土した土師器などから6世紀前半のものと判明した。また、出土した円筒埴輪は突帯断面形は三角形であり、透孔は半円形と推定されている。第2号墳は周溝が検出されたのみであるが、埴輪のほかに土師器・須恵器が出土しており、やはり6世紀前半とされる。今回調査した第202号墳は、出土遺物は円筒埴輪が中心であり、明確な時期決定はできないが、その立地や埴輪の類似性などからも、これらの古墳と大きな時期差はないと考えても良いだろう。また、この3古墳は現時点では周辺の古墳からやや離れて立地している様子がみられ、近年、埴輪棺が調査された第196号墳等が並ぶ群との間に、小さな谷が入っている可能性がある。本古墳周辺は区画整理事業地内であり、今後も個人住宅等の開発が予定されており、より詳細な古墳分布が明らかになるだろう。

女池遺跡は、過去に4次にわたる発掘調査が実施されており、今回報告のE地点とはほぼ同種の遺構が検出されている。したがって、かなりの範囲にわたり高い密度で遺構が存在すると推定できるものであるが、この原因の一つとして、本遺跡には水利上の利点があるものと思われる。当該地は南からの丘陵がなだらかに本庄台地へと移行した地点にあたり、水田地帯への変換線上である。遺跡名や地名にも残るように、古くから豊富な用水が確保できたと想定できる。その結果として、この累積的な遺跡が形成されたものだろう。今後、各時期の集落範囲が明確になれば、水利用のあり方も含め集落の様子が解明できよう。

西富田新田遺跡は、平成22年度にもB地点の発掘調査が実施され、本庄市街地周辺において近年急速に開発が進んでいる地区の一つである。試掘調査なども多く行われているが、同じ埋蔵文化財包蔵地の範囲内でも、遺構・遺物が皆無である範囲と、B地点やC地点の様に、多量の土器を持つ竪穴住居跡が検出される地点がある。今後の資料の増加によって、埋没河川の推定や小集落の立地など新たな古墳時代史が描けることを期待したい。

<引用・参考文献>

- 太田博之・大熊季広 2011『西富田新田遺跡Ⅱ—B地点の調査—』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第26集
太田博之・笠原仁史 2009『女池遺跡Ⅲ—C地点の調査—』本庄市遺跡調査会報告書 第26集
恋河内昭彦 2004『女池遺跡Ⅱ（A地点の調査）』児玉町遺跡調査会報告書 第16集
恋河内昭彦・大熊季広 2006『長沖古墳群Ⅵ—第32号墳の調査—』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第2集
恋河内昭彦・増田久江
・松澤浩一 2001『女池遺跡（B・D地点の調査）』児玉町文化財調査報告書 第35集
埼玉県 1921『埼玉縣誌 上巻』
菅谷浩之他 1980『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書 第1集
本庄市史編集室 1976『本庄市史 資料編』

写 真 图 版



調査区全景（1）南から



調査区全景（2）北から



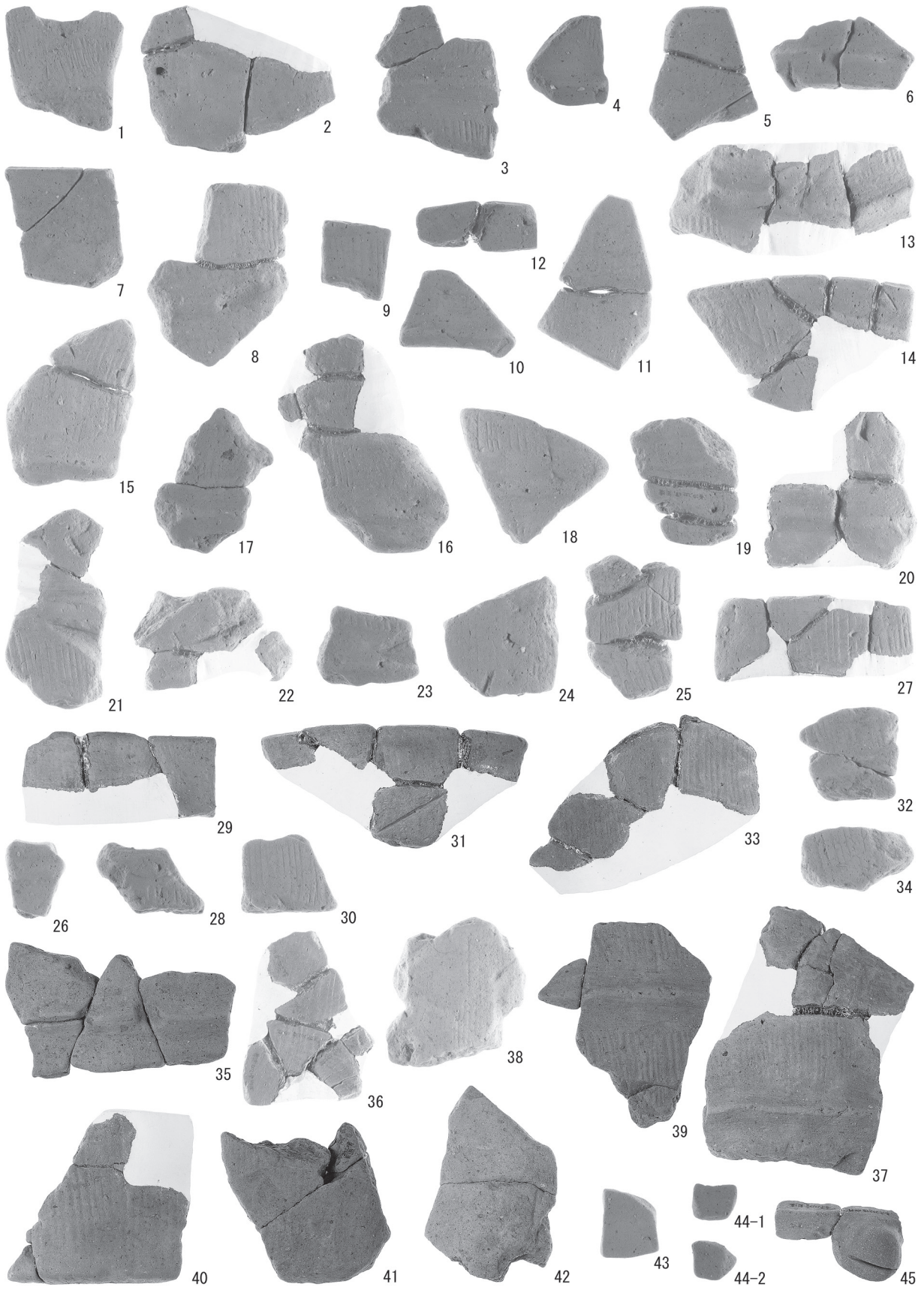
周溝土層堆積状況 西から



遺物出土状況（1）北から



遺物出土状況（2）北東から



第202号墳出土遺物



調査区東半全景 南から



調査区西半全景 南東から



SI18 東半完掘状況 南西から



SI18 西半完掘状況 北東から



SI18 東半土層堆積状況 南西から



SI18 西半土層堆積状況 南西から



SI18 遺物出土状況 北西から



SI18 カマド土層堆積状況 南西から



SI18 カマド完掘状況 南西から



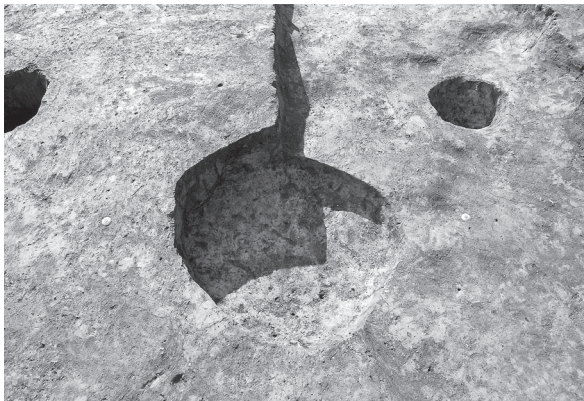
SI18 貯蔵穴土層堆積状況 南西から



SI18 貯蔵穴完掘状況 南西から



SI18 梯子ピット完掘状況 南西から



SI18 床下土坑完掘状況 北東から



SI19 完掘状況 西から



SI18 掘り方完掘状況 西から



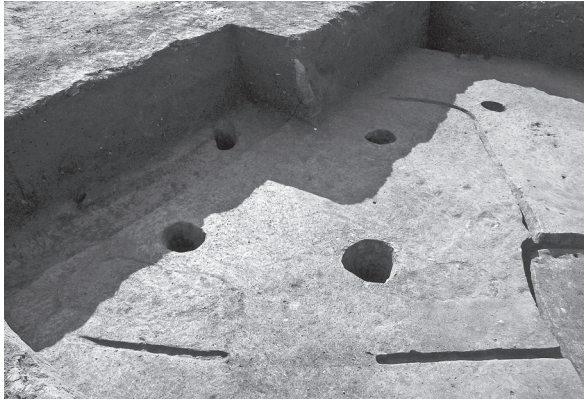
SI20 完掘状況 西から



SI20 遺物出土状況 (1) 西から



SI20 遺物出土状況 (2) 南西から



SI21 完掘状況 北東から



SI21 柱穴・SD24 重複部分 北東から



SD24 遺物出土状況 西から



SD24 遺物出土状況近接 西から



SD25 完掘状況 (1) 南西から



SD25 完掘状況 (2) 北西から



SK42 完掘状況 南から



SK43 完掘状況 北から



SK44 完掘状況 北から



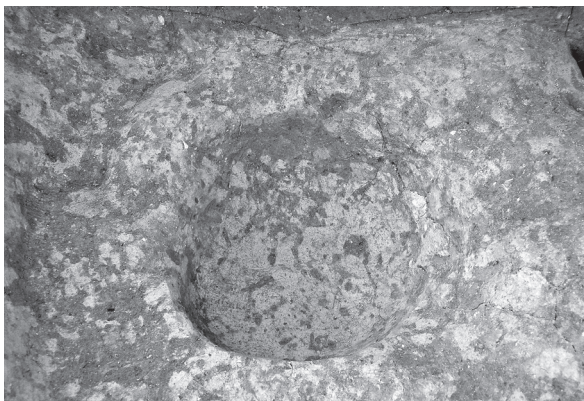
SK45 遺物出土状況 北から



SK46 土層堆積状況 南西から



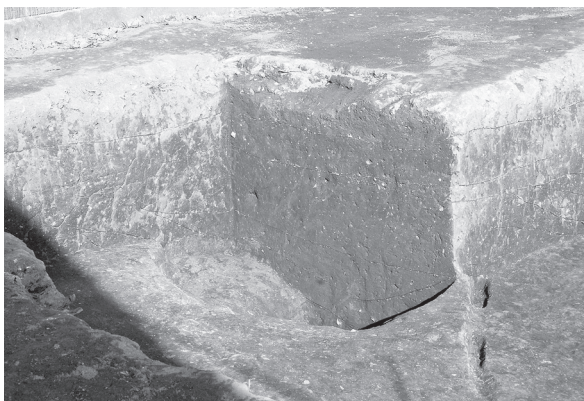
SK46 遺物出土状況 北西から



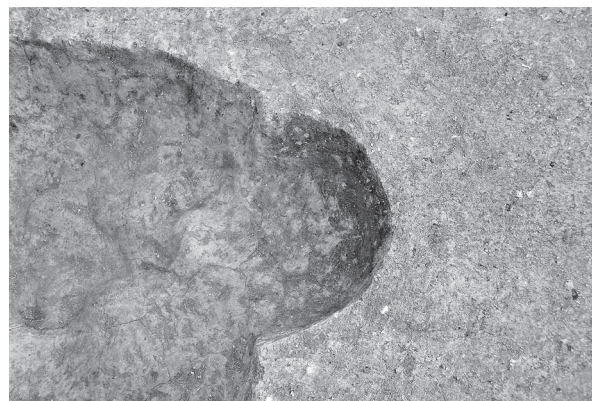
SK47 完掘状況 東から



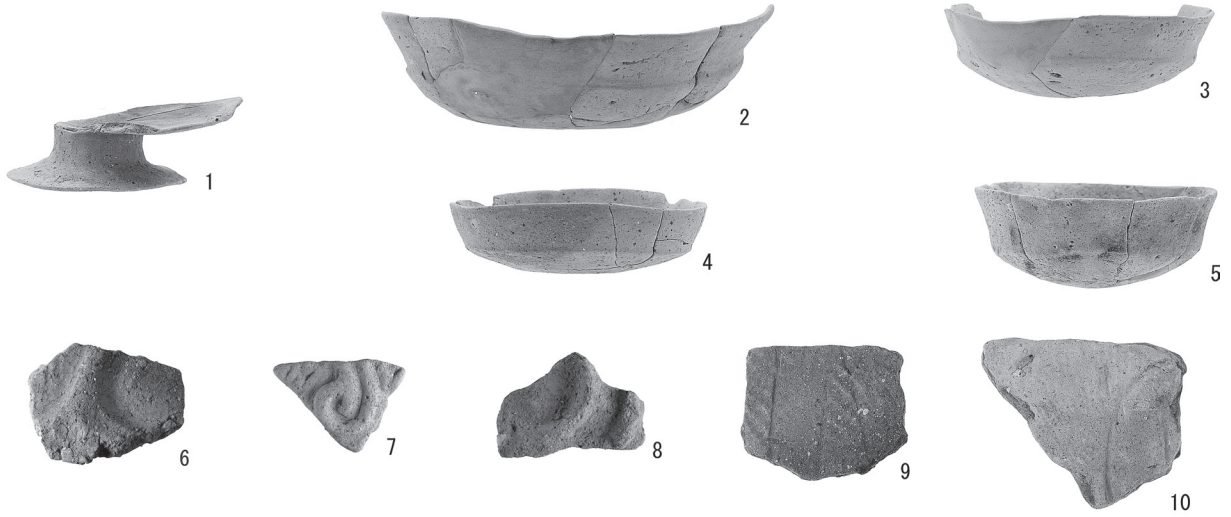
SE 4 完掘状況 東から



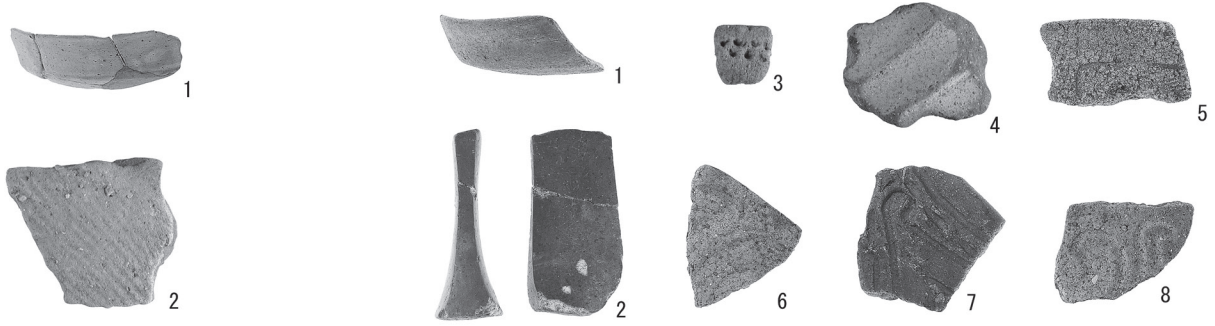
SE 4 土層堆積状況 南西から



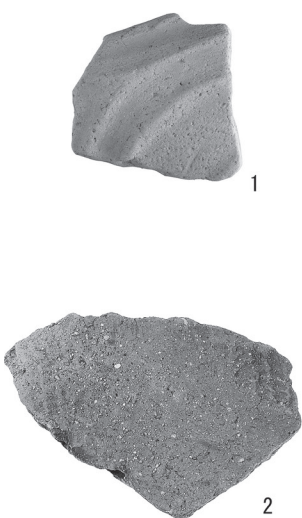
Pit13 完掘状況 北から



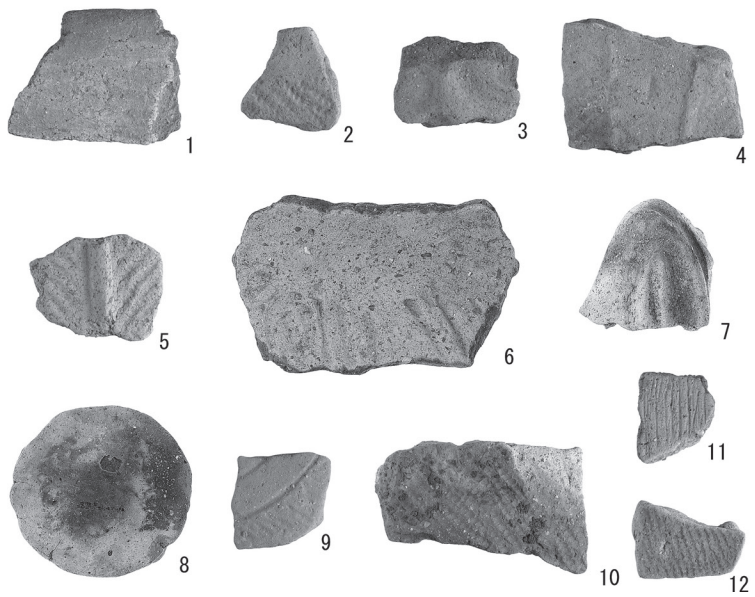
SI18 出土遺物



SI19 出土遺物



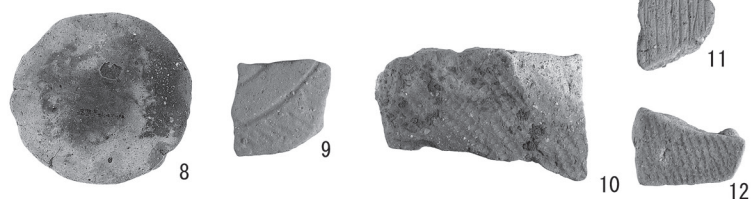
SI20 出土遺物

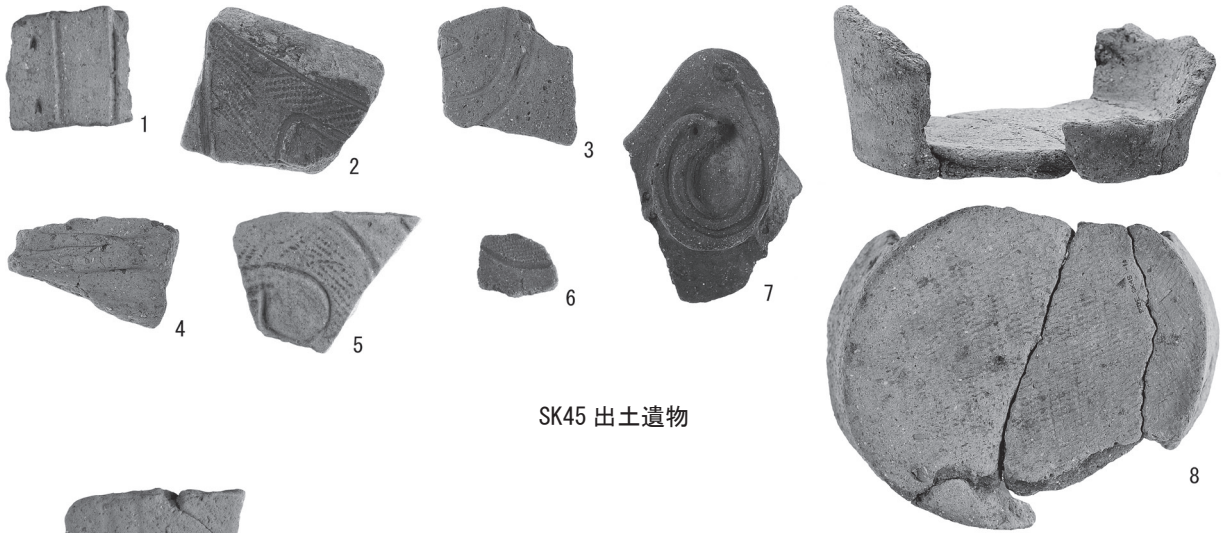


SD24 出土遺物



SD25 出土遺物



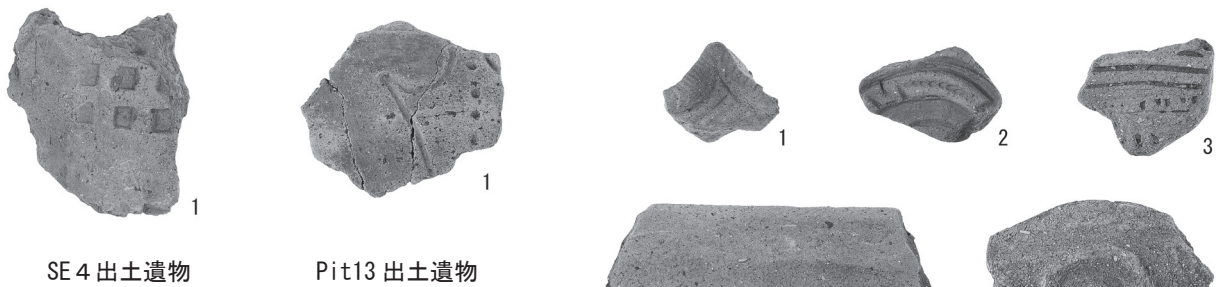


SK45 出土遺物



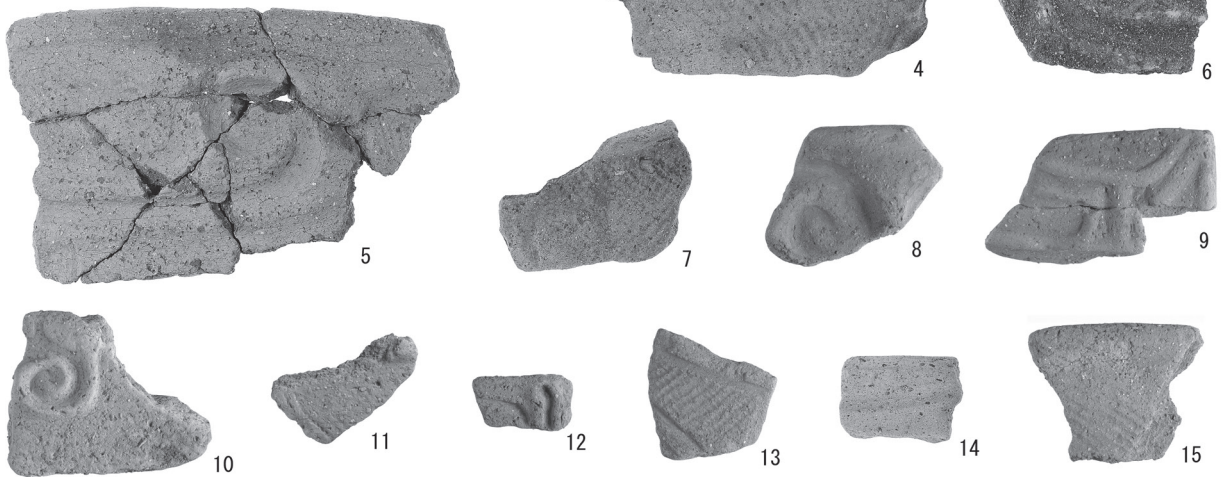
SK46 出土遺物

SK47 出土遺物



SE 4 出土遺物

Pit13 出土遺物



遺構外出土遺物



調査区全景（1）北西から



調査区全景（2）北東から



SI15 完掘状況 (1) 西から



SI15 完掘状況 (2) 東から



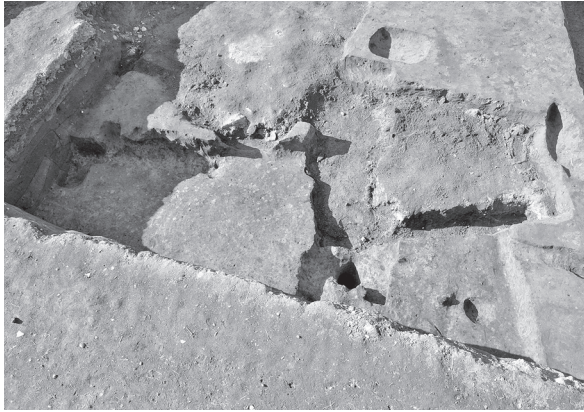
SI16 完掘状況 北から



SI16 土層堆積状況 南東から



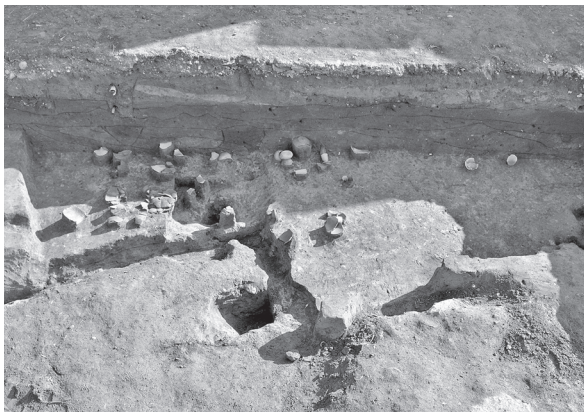
SI16 遺物出土状況 南東から



SI17 完掘状況 (1) 東から



SI17 完掘状況 (2) 南から



SI17 遺物出土状況 (1) 西から



SI17 遺物出土状況 (2) 北から



SI17 遺物出土状況 (3) 東から



SD 2 完掘状況 (1) 西から



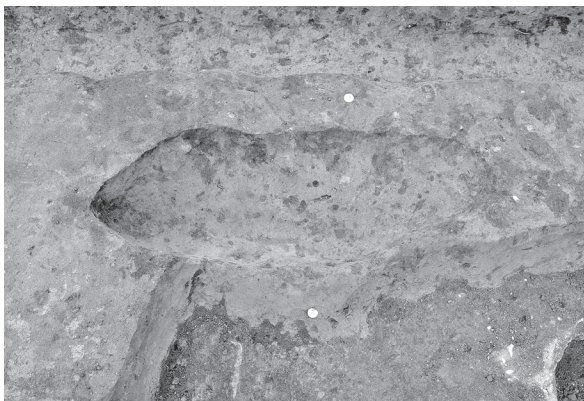
SD 2 完掘状況 (2) 東から



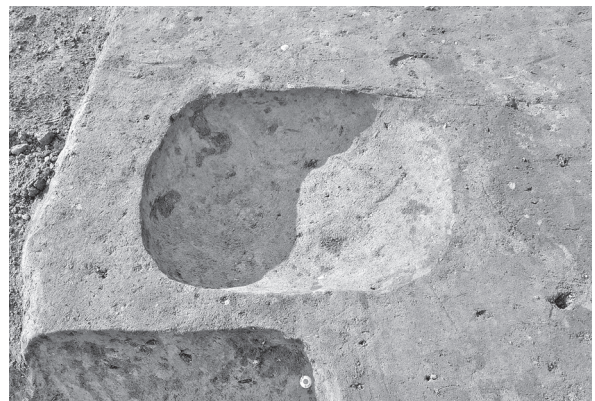
SD 3 完掘状況 (1) 北から



SD 3 完掘状況 (2) 東から



SK 11 完掘状況 南から



SK 12 完掘状況 東から



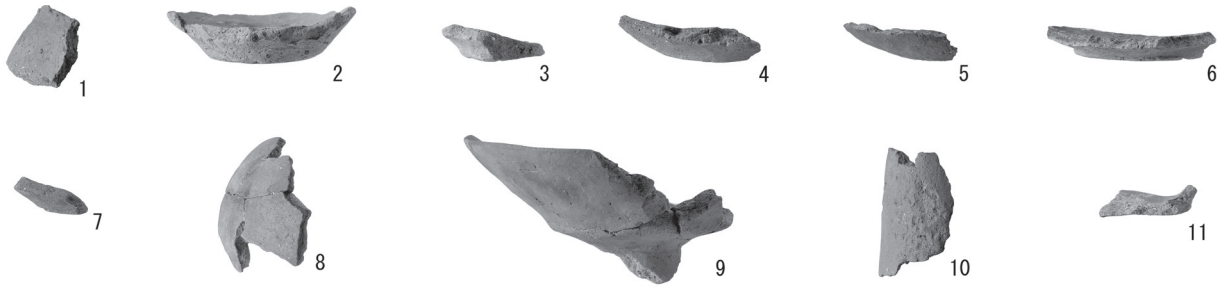
表土掘削作業状況



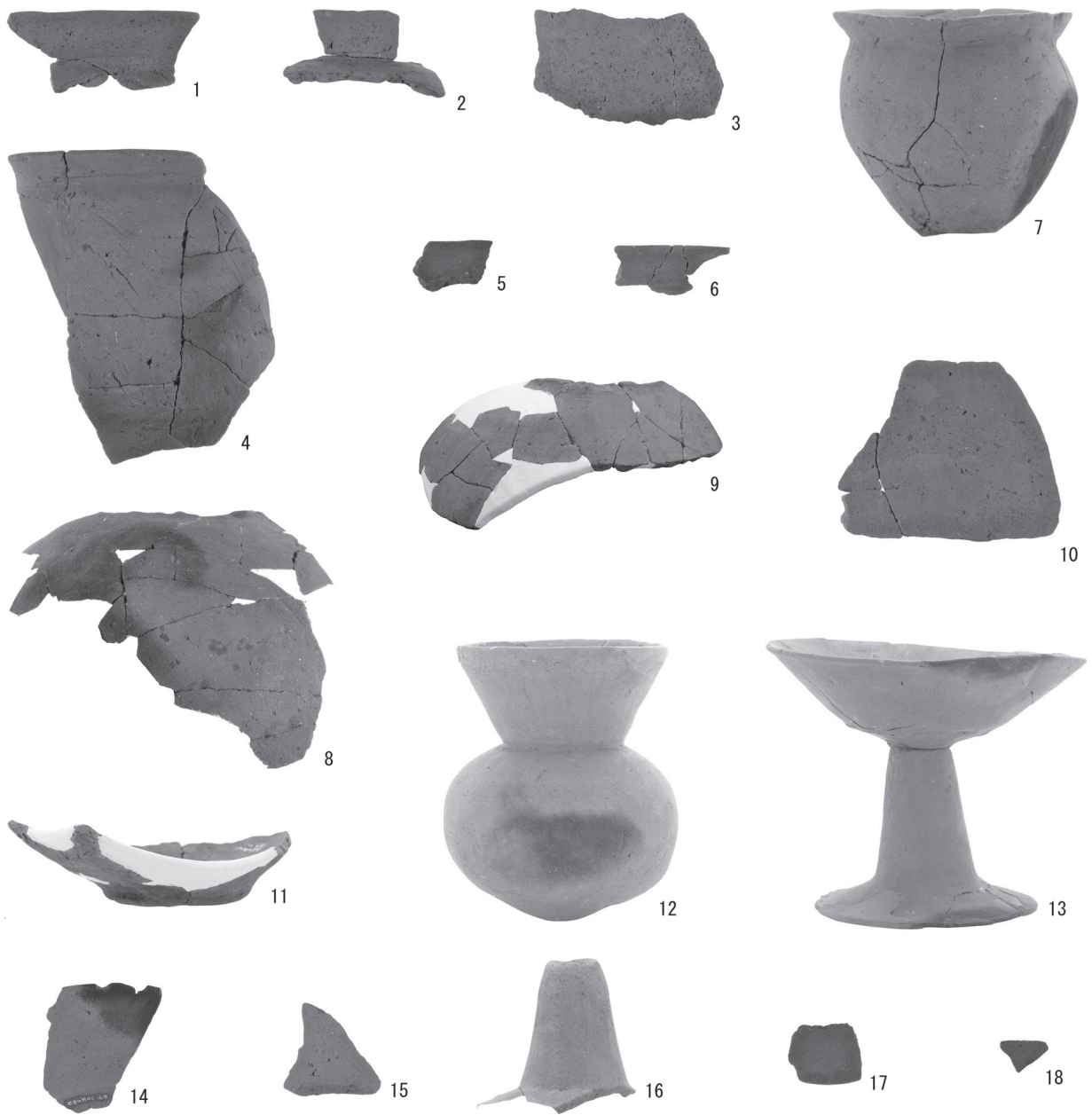
遺構実測作業状況 (S117)

写真図版 14

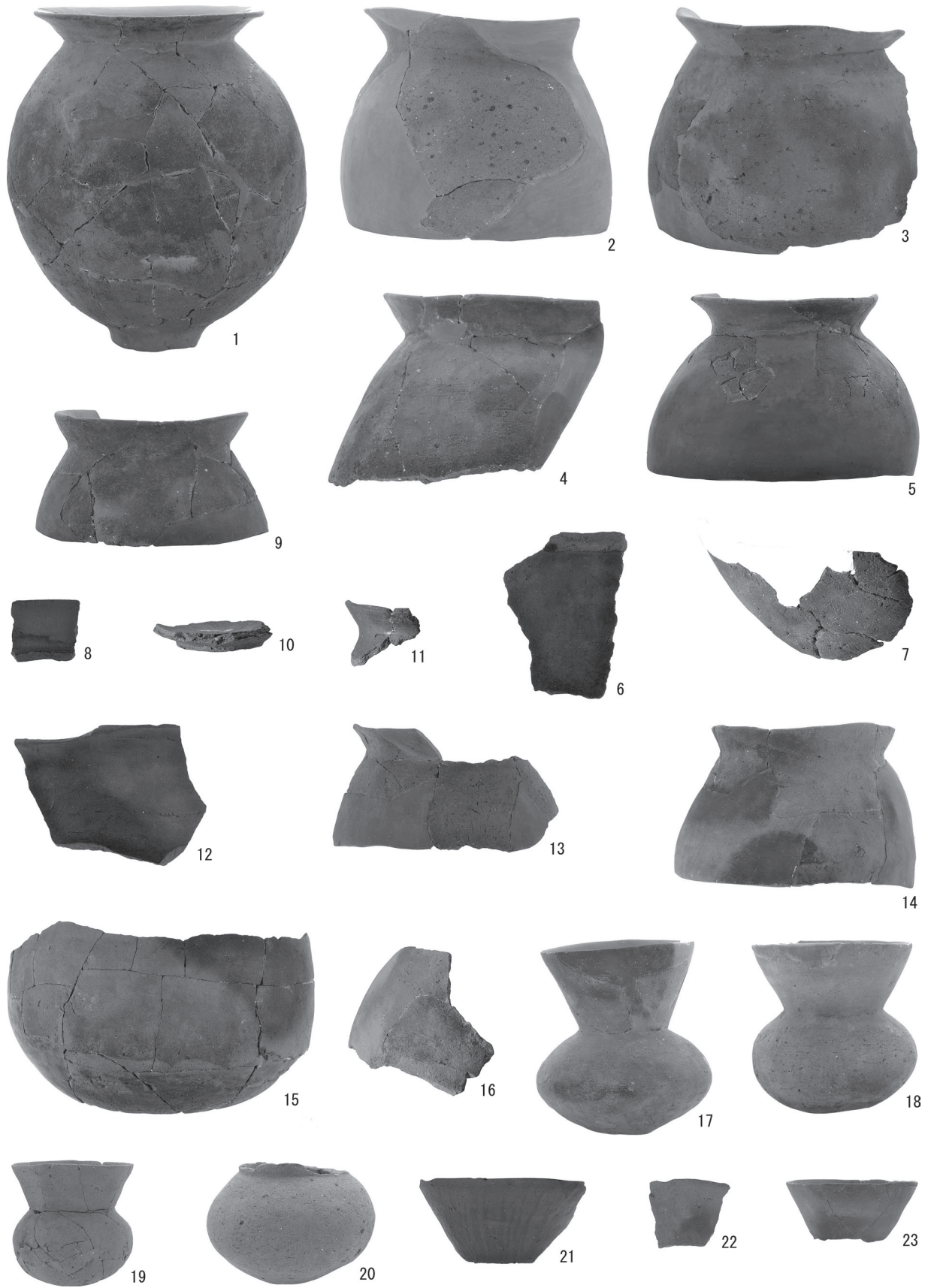
西富田新田遺跡Ⅱ



SI15 出土遺物



SI16 出土遺物



SI17 出土遺物 (1)



24



25



26



27



28



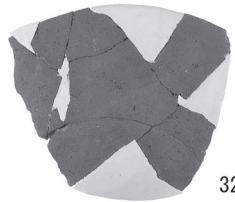
30



29



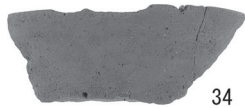
31



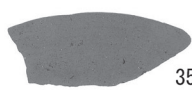
32



33



34



35



36



37



38



39



40

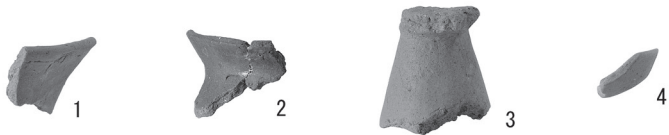


41



42

SI17 出土遺物 (2)



1

2

3

4

SD 2 出土遺物



1

2

3

東カクラン出土遺物



1

SK11 出土遺物

報告書抄録

フリガナ	カキコフツガノⅫ-タイ202コウツノチヨウサ-、メイケイⅣ-Eチンチヨウサ-、ニトミダシンデンイセキⅡ-Cチンチヨウサ-							
書名	長沖古墳群Ⅻ-第202号墳の調査-、女池遺跡Ⅳ-E地点の調査-、西富田新田遺跡Ⅱ-C地点の調査-							
副書名								
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書	巻次	第36集					
編著者	的野善行							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号				TEL 0495-25-1185			
発行日	西暦2014年(平成26年) 3月 24日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コ ー ド 市町村	ド 遺跡	北 緯 (°、'、")	東 経 (°、'、")	調査期間	調査面積	調査原因
ナガ オキ コ フ ン グ ン 群 Ⅻ 第 2 0 2 号 墳	ホンジョウシコダマチヨウ 本庄市児玉町 コダマチヨウカケウエ 児玉字賀家ノ上 パン 520番1	112119	54-300	36° 10' 46"	139° 08' 10"	20110721 ～ 20110729	53 m ²	個人住宅建設
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	古墳群	古墳時代		古墳周溝		埴輪		
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コ ー ド 市町村	ド 遺跡	北 緯 (°、'、")	東 経 (°、'、")	調査期間	調査面積	調査原因
メイケイセキチン 女池遺跡E地点	ホンジョウシコダマチヨウ 本庄市児玉町 キタバヤシアサフジイケ 吉田林字藤池 パン 54番5	112119	54-305	36° 11' 39"	139° 08' 09"	20111011 ～ 20111110	98 m ²	個人住宅建設
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	集落跡	縄文・古墳・平安時代・中世		竪穴式住居跡4軒・溝跡2条・土坑6基・井戸跡1基		縄文土器・打製石斧・土師器・砥石・瓦		
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コ ー ド 市町村	ド 遺跡	北 緯 (°、'、")	東 経 (°、'、")	調査期間	調査面積	調査原因
ニトミダシンデンイセキ 西富田新田遺跡 C地点	ホンジョウシニトミダアサシンデン 本庄市西富田字新田 パン 798番1	112119	53-094	36° 13' 51"	139° 09' 17"	20111128 ～ 20111226	80 m ²	個人住宅建設
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	集落跡	古墳時代		竪穴式住居跡3軒・溝跡2条・土坑2基		石鏃・土師器		

本庄市埋蔵文化財調査報告書第 36 集

長沖古墳群Ⅻ

-第 202 号墳の調査-

女池遺跡Ⅳ

-E 地点の調査-

西富田新田遺跡Ⅱ

-C 地点の調査-

平成26年 3月3日 印刷

平成26年 3月24日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒 367 - 8501 埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号

電話 0495 - 25 - 1185

印刷／山進社印刷株式会社